

モビルスーツ全集⑦

Z計画&アナハイム・エレクトロニクス社製モビルスーツ

U.C.0087-0096 BOOK

Contents

010 Introduction Z計画 新たな時代のモビルスーツ像

012 カラー設定画&イラストライティング

020 Z計画小史

024 アナハイム・エレクトロニクス社製MSの戦場

028 Z計画の実像

030 各種機体解説

リック・ディアス/ディジェ/RMS-099の系譜/百式 MSN-00100の系譜/
デルタプラス/Zガンダム/Zプラス(A1型) MSZ-006の系譜/
メタス/MSA-005の系譜/ネモ/MSA-003の系譜

050 宇宙世紀0088年前後のMSトレンド

052 各種機体解説

ZZガンダム/MSZ-010の系譜/ガンダムMk-III フルアーマーガンダムMk-III

058 コラム

Z計画の徒花!?

究極のスペックを誇るSガンダム

060 宇宙世紀0093年以降のMS

062 各種機体解説

リ・ガズィ/vガンダム/リゼル/ジェガン

070 コラム

宇宙世紀0090年代のバリエーション機、試作機

072 各種機体解説

ユニコンガンダム/ユニコンガンダム2号機 パンシィ/ジェガン

078 コラム

UC計画とは?

079 コラム

宇宙世紀0105年代のガンダムたち

080 宇宙世紀0087-0096年 エウーゴ/地球連邦軍の迷彩

082 宇宙世紀0087-0096年 モビルスーツの武装

086 THE対決

ガンダムMk-IIvs百式 vガンダムvsサビー
Zガンダムvsティターンズ&連邦軍可変機

090 V作戦、GP計画そしてZ計画へ

094 可変MS技術論

098 可変モビルスーツと現実世界の可変航空機

102 MS設定資料

126 MSスペック一覧



MSZ-010
ZZガンダム



RGM-89S
スタークジェガン



RX-93 ヴガンダム
RX-0 ユニコーンガンダム



RX-0
ユニコーンガンダム2号機
バンシイ



RX-0
ユニコーンガンダム



MSN-00100
百式



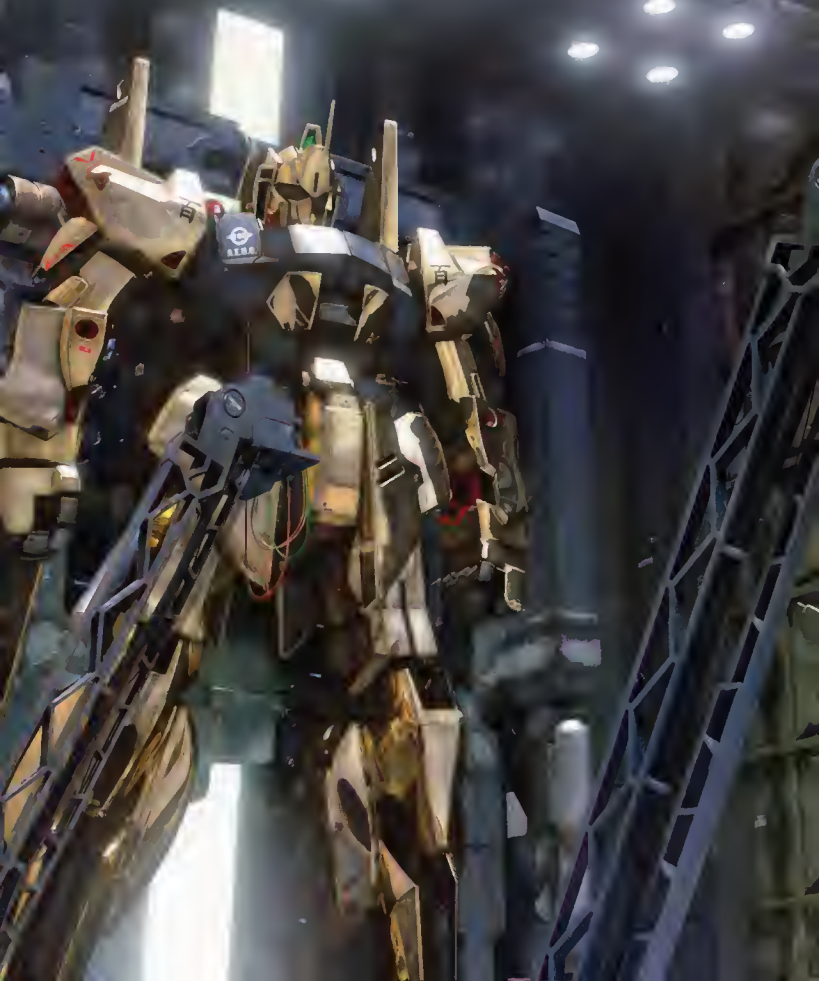




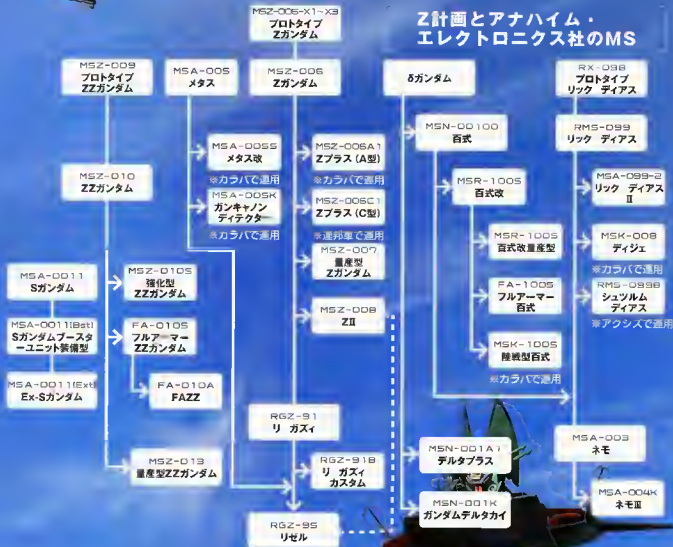
AE

ANAHEIM
ELECTRONIC

MSZ-006 Zガンダム
MSN-00100 百式



画



「機動戦士ガンダム」のヒットの要因は様々あるが、その中のひとつに「ロボット兵器化」というのが挙げられるのは論を待たないだろう。

それまでの「ローリー」的な、言い換えれば人間の体の拡張としての巨大ロボットは大魔神などのように、極端な話、ロボットでなくとも成立した存在だった。ロボットが支持されたのはそこに「科学の匂い」という、ギリギリのリアリティが込められていたからだろう。ガンダムは、ロボットにモビルスーツという名称を与え、SFやミリタリーといったエッセンスを投入することで、「リアル」「ロボット」というジャンルの確立になった。といっても、完全にリアリティのあるロボットではなく、「現実」にありそうな「世界観の中にある程度の説得力を持つて存在している」は事足りるものだった。本当のリアル（現実）を追求すると、キャラクター性を伴う、ロボットを使つたエンターテインメントは成り立たないからだ。

戦国時代を扱ったエンターテインメント作品でも、当時の合戦においてリアリティのある描写をした作品がほとんどないのと同じで、リアルより面白さを優先するのは古今東西同じである。

「ガンダム」は放送終了後、印刷媒体やファンたち、模型業界などによってそのリアルさは先鋭化されていった。それは、ある意味で大きな「いい遊び」の

「機動戦士ガンダム」のヒットの要因は様々あるが、その中のひとつに「ロボット兵器化」というのが挙げられるのは論を待たないだろう。

それまでの「ローリー」的な、言い換えれば人間の体の拡張としての巨大ロボットは大魔神などのように、極端な話、ロボットでなくとも成立した存在だった。ロボットが支持されたのはそこに「科学の匂い」という、ギリギリのリアリティが込められていたからだろう。ガンダムは、ロボットにモビルスーツという名称を与え、SFやミリタリーといったエッセンスを投入することで、「リアル」「ロボット」というジャンルの確立になった。といっても、完全にリアリティのあるロボットではなく、「現実」にありそうな「世界観の中にある程度の説得力を持つて存在している」は事足りるものだった。本当のリアル（現実）を追求すると、キャラクター性を伴う、ロボットを使つたエンターテインメントは成り立たないからだ。

戦国時代を扱ったエンターテインメント作品でも、当時の合戦においてリアリティのある描写をした作品がほとんどないのと同じで、リアルより面白さを優先するのは古今東西同じである。

「ガンダム」は放送終了後、印刷媒体やファンたち、模型業界などによってそのリアルさは先鋭化されていった。それは、ある意味で大きな「いい遊び」の

「機動戦士ガンダム」のヒットの要因は様々あるが、その中のひとつに「ロボット兵器化」というのが挙げられるのは論を待たないだろう。

それまでの「ローリー」的な、言い換えれば人間の体の拡張としての巨大ロボットは大魔神などのように、極端な話、ロボットでなくとも成立した存在だった。ロボットが支持されたのはそこに「科学の匂い」という、ギリギリのリアリティが込められていたからだろう。ガンダムは、ロボットにモビルスーツという名称を与え、SFやミリタリーといったエッセンスを投入することで、「リアル」「ロボット」というジャンルの確立になった。といっても、完全にリアリティのあるロボットではなく、「現実」にありそうな「世界観の中にある程度の説得力を持つて存在している」は事足りるものだった。本当のリアル（現実）を追求すると、キャラクター性を伴う、ロボットを使つたエンターテインメントは成り立たないからだ。

戦国時代を扱ったエンターテインメント作品でも、当時の合戦においてリアリティのある描写をした作品がほとんどないのと同じで、リアルより面白さを優先するのは古今東西同じである。

「ガンダム」は放送終了後、印刷媒体やファンたち、模型業界などによってそのリアルさは先鋭化されていった。それは、ある意味で大きな「いい遊び」の

「機動戦士ガンダム」のヒットの要因は様々あるが、その中のひとつに「ロボット兵器化」というのが挙げられるのは論を待たないだろう。

それまでの「ローリー」的な、言い換えれば人間の体の拡張としての巨大ロボットは大魔神などのように、極端な話、ロボットでなくとも成立した存在だった。ロボットが支持されたのはそこに「科学の匂い」という、ギリギリのリアリティが込められていたからだろう。ガンダムは、ロボットにモビルスーツという名称を与え、SFやミリタリーといったエッセンスを投入することで、「リアル」「ロボット」というジャンルの確立になった。といっても、完全にリアリティのあるロボットではなく、「現実」にありそうな「世界観の中にある程度の説得力を持つて存在している」は事足りるものだった。本当のリアル（現実）を追求すると、キャラクター性を伴う、ロボットを使つたエンターテインメントは成り立たないからだ。

戦国時代を扱ったエンターテインメント作品でも、当時の合戦においてリアリティのある描写をした作品がほとんどないのと同じで、リアルより面白さを優先するのは古今東西同じである。

「ガンダム」は放送終了後、印刷媒体やファンたち、模型業界などによってそのリアルさは先鋭化されていった。それは、ある意味で大きな「いい遊び」の

Z



計

新たな時代のモビルスーツ像

延長といえ、それらを「Zガンダム」の「宇宙世紀」に引き継ぐと、それによる「認識」のよきものを深めていった。そんな「ガンダムブーム」もそろそろ「一息つき」だ。という1985年、「機動戦士ガンダムIII めぐりあい宇宙」公開の3年後、「続編である『機動戦士Zガンダム』が放送を開始する。

この作品は前作の主要登場人物すべてを脇役になり、新しい登場人物が中心になるという、画期的ストーリーは今までなく、登場モビルスーツも話題となった。番組後半の主人公機である「ガンダム」をはじめ、変形するモビルスーツが数多く登場していった。

これは当時、異色論議を巻き起こした。変形口ボ自体は、戦艦「望月」にト生命体トランスフォーマー「超時空要塞マクロス」にも登場しており、流行していた。「ガンダム」の新作を製作するにあたり、当時の主要要素

を取り入れ、当然のことだ。また、ガンダムは合衆メカゆえ、それは変形といふ要素も、玩具的展開を考えると「面白くないか」と「ガンダム」の「ミラージュ」路線もファンたちからは「ロボットが変形するのはリアルではない」という論議も見られた。しかし、「Zガンダム」は新しい世代を巻き込み、翌年には主人公を代えた続編

「機動戦士ガンダムZZ」も制作されるなどヒットを記録した。変形モビルスーツは、若い新規ファン層を取り込むと同時に「リタリー」やSFといった要素がさらに加えられ、設定面が充実することで、「ガンダム」の古いファンにも、ある程度受け入れられることに成功した。そして、この時代に作られた様々な設定は、旧作のフ

ォロアップも行いつつ、現在の宇宙世紀の設定のベースになっている。これは、「ガンダム・ワールド」と

いうのは、「いかにモビルスーツはリアルティがあるのか」が重要なではなく、「いかにガンダムの世界に溶け込ませることが出来るか」が大事というところだ。見れば無難な可愛モビルスーツも、それらしい設定やドラマが用意されていれば、ガンダム・ワールドにいてもおかしくない存在、ということである。

また、定規められると、後の作品などで強化、補完されるのも特徴といえる。こうして「ガンダム・ワールド」は、現代も根元し続けている。本書では、「Zガンダム」開発計画である企画と、その成果として物語中で「Zガンダム」を建造したとされる架空のメーカー、アナハイムエレクトロニクス（A.E.）製のモビル

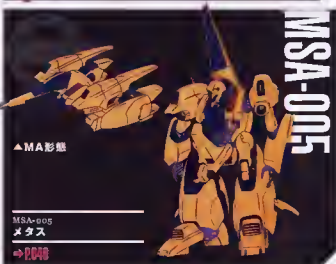
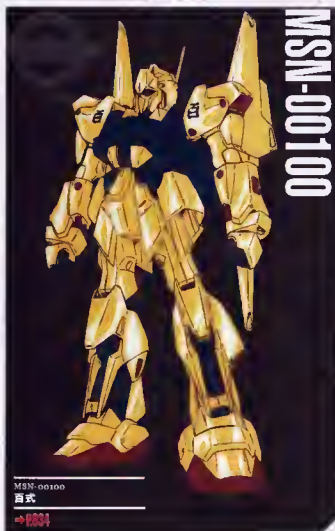
取り上げた。「メーカー」や「兵器」などの設定は、いかに「ガン」の中心に「ガンダムZZ」「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」「機動戦士ガンダム UC-」といった、後の作品に登場するA.E.製とされるモビルスーツについてまであるのだ。

それは、に現在における宇宙世紀0087-0096年のA.E.社製のモビルスーツについて学ぶだけでなく、先人たちのついでに補完、発展していった「ガンダム・ワールド」の歴史を振り返ることもある。

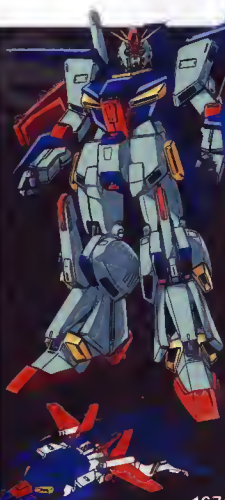
カラー設定画 & イラストラインナップ

ガンダムシリーズに登場したZ計画機ならびにU.C.0096年代までのアナハイム・エレクトロニクス社製のMS

機動戦士Zガンダムから最新作UCまでの映像作品、関連企画などに登場したZ計画機とU.C.0096年頃まで（一部の機体はU.C.0100年代）のアナハイム・エレクトロニクス社が開発したモビルスーツのカラー設定画、およびカラーイラストを掲載。本誌内で解説をしているものには該当ページを表示。並び順は映像作品を先に、関連企画、それぞれ登場年代でまとめている。



MSZ-010



△Gフオートレス形態

MSZ-010
ZZガンダム

⇒PG22

RX-93



△フィン・ファンネル
装備時

RX-93
Vガンダム

⇒PG01

FXA-05D



FXA-05D
Gディフェンサー

MSK-008



MSK-008
ディジェ

⇒PG32

RX-178+FXA-05D



RX-178+FXA-05D
スーパーガンダム

RGM-86R



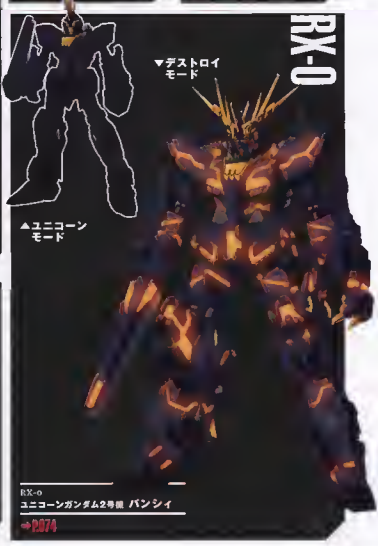
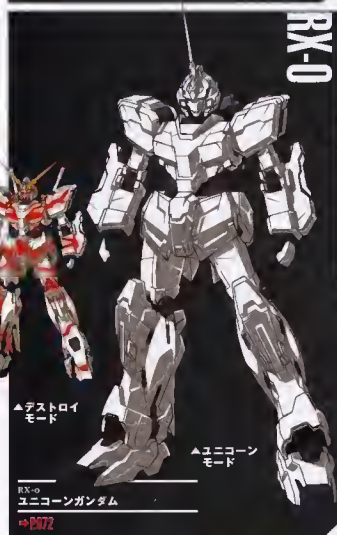
RGM-86R
ジムⅡ

MSA-003



MSA-003
ネモ

⇒PG08



RGZ-95



△ウェイブライダー
形態

RGZ-95
リゼル

⇒P.009

RGZ-95C

△ウェイブライダー形態

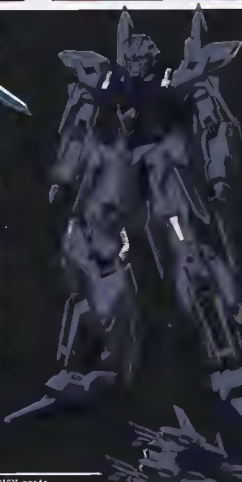
RGZ-95C
リゼルC型 (指揮官機)

MSN-06S



MSN-06S
シナンジュ

MSN-001A1



MSN-001A1
デルタプラス

⇒P.008

△ウェイブライダー形態

RGZ-95C



RGZ-95C
リゼルC型
ゼネラル・レビル配備機

MSN-06S



RGZ-95C
リゼルC型
ディフェンサーaユニット

PGM-09X



PGM-09X
ジェスタ

⇒P.070

PGM-09X



RGZ-95C
リゼルC型
ディフェンサーbユニット





MSZ-006-X1
プロトタイプZガンダム



FA-100S
フルアーマー百式改



MSK-100S
陸戦用百式改



MSR-100S
百式改量産型



▲ウェーブライダー形態

MSZ-008
ZⅡ (ゼッター)



MSZ-007
量産型Zガンダム



MSZ-006-X2
プロトタイプZガンダム
(ディアスヘッド)



MSZ-007
ガンダム Mk-Ⅲ
→P050



MSA-004K
ネオⅢ



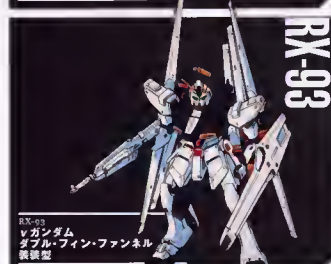
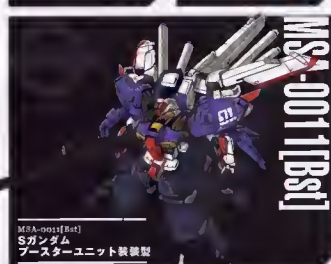
MSA-005K
ガンキャノン・ディテクター



MSA-005S
メタス改



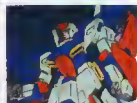
FFA-007GⅡ
フルアーマーガンダム
Mk-Ⅱ
→P057





Z計画小史

第二世代モビルスーツと可変機の登場
そしてその終焉



時代がモビルスーツ開発を加速する

宇宙世紀0080年に終結したジオン独立戦争（一年戦争）により、ジオン公国はジオン共和国となり、地球圏には一応の平和が訪れた。しかし、かつてのジオン軍の急進派は、木星と火星の間にジオン公国が建設した小惑星基地アクシズに落ち延び、一大勢力を構築。地球圏でも一部の勢力が徹底抗戦の構えでゲリラ活動を繰り広げるなど、必ずしも安定してはいなかった。特に宇宙世紀0083年に勃発した元ジオン公国軍エギュー・デラース中将率いるデラース・フリートによる軍事テロ「星の屑作戦」は、あらためて

ジオン軍残党の潜在的脅威を地球連邦政府に印象つけた。

一年戦争終結から7年。戦後の軍縮の時代の中でも地球連邦軍は、モビルスーツ開発を盛んに行っていた。新兵器であるモビルスーツは、技術的に向上の余地が多かったためであり、旧ジオン軍勢力が持っているであろう開発力に対抗する必要もあったからだ。

一方で、「星の屑作戦」以後の地球圏には、混乱の時代への予兆があった。地球連邦軍内に旧ジオン軍の残党狩りを専門にする特殊部隊、ティターンズが結成されたのだ。このティターンズは特殊部隊でありながら地球至上主義者のエリート部隊で、残党狩りという名目を拡大解釈し、第2のジオン公国軍になりかねないスペース・ノイドの弾圧を敢行。宇宙世紀0085年、コロニーに毒ガスを注入し、住民を虐殺する30パンチ事件など過激な行動をしばしば行なった。

エウーゴの結成と 新世代モビルスーツ開発競争

これに対し地球連邦軍内のスペース・ノイド派は旧ジオン公国残党などを抱き込み、反地球連邦組織エウーゴを結成。同じ軍隊内で2つの勢力が暗闘を繰り返すという事態に至る。宇宙世紀0087年のグリプス戦役だ。

このエウーゴを支持する母体が、戦

後にジオン系の企業を吸収合併する事で、地球圏一のモビルスーツメーカーとなったアナハイム・エレクトロニクス社だ。一方で、ジオン公国残党勢力との交流も噂される同社と一線を置きたいティターンズなどは、独自にモビルスーツ開発を推進。ここに新世代のモビルスーツ開発競争が繰り広げられることになる。

モビルスーツ開発は、戦後しばらくの間、戦時中の技術的資産を活かすことから始まった。しかし、宇宙世紀0087年頃になると、それまで技術開発が続けられた、新たなコンセプトの機体たちが登場することになる。いわゆる第二世代機の登場だ。第二世代モビルスーツとは、当時最新の3つのテクノロジを採用している機体のことを指す。

まず一つ目は、アクシズで開発された新素材ガンダリウム合金の採用。これは一年戦争伝説の機体であるRX-78ガンダムをベースに、一般的に使用できるようにしたものだ。アナハイム・エレクトロニクス社は旧ジオン公国軍人で、エウーゴの協力者であるシャア・アズナブルの仲介によりこの精練技術を手に入れ、ティターンズなどの地球連邦軍は、アナハイム・エレクトロニクス社との政治的取引によって手に入れた、という経緯があった。



二つ目のイノベーションは、ムーバブル・フレームだ。従来までのモビルスーツが、モノコック式(連邦軍はセミ・モノコック式)の機体であったのに対して、外装と駆動部(フレーム)部を分け、機体の可動範囲の自由度を高くすることにより、機体の運動性能を飛躍的に向上させる技術である。また、AMBA C機動の向上という意味でも、革新的な技術といえる。

三つ目となるのがインターフェイス系のテクノロジで、全周周回モニターとヒニア・シートである。これにより大幅に視認性が向上。コクピットユニットも脱出ボッドを兼ね、情報面、パイロットの居住性やサバイバリティ向上の面でも大幅に改善されることになる。

これらのテクノロジにより、モビルスーツは、新たなステージを迎えた。

一方、ティターンズの開発したRX-178ガンダム Mk-IIは、非ガンダリウム合金使用機であり、厳密には1・5世代機であるものの、時に第二世代以上の

パフォーマンスを見たように、ムーバブル・フレームの採用は新世代機開発の礎であり、それは結果的にもう一つの革新的な要素をモビルスーツに与えることになった。可変モビルスーツの開発だ。

もともと、可変機という存在はモビルスーツよりもモビルアーマーに試験的に取り入れられて開発が進んだテクノロジだった。これがムーバブル・フレームの応用でモビルスーツにも使用できる目処が立ったのだ。そして、アナハイム・エレクトロニクス社の可変モビルスーツ開発計画とされるのがZ(ゼータ)計画である。

その全貌は知られていない Z計画とは？

実際にZ計画は名前だけがよく知られていて、その詳細な概要となると、実はあまり知られていない。可変機であるMSZ-006ガンダムを開発するための計画とも言われるが、Z計画自体もその後のZガンダムやSガンダム何度の開発も含まれているとも言われるため、その表現は正確性に欠けるだろう。

一方で、アナハイム・エレクトロニクス社による第二世代初期の機体、RMS-009リック・ディアスやMSN-00100百式の開発もZ計画の一部であるともされる。このこと

から、少なくとも最新テクノロジによる、新たなモビルスーツのコンセプトの立案、そして実践というのが計画の趣旨である事は間違いないだろう。その到達点で、可変モビルスーツの完成なのか、それをステップしつつ新たな機体を作り続けるものなのか、途中から変化していったものなのか、実は歴史の中だ。

ともかくも、アナハイム・エレクトロニクス社は最新テクノロジを使用した第二世代の機体を開発した。それがRMS-009リック・ディアスである。この機体はムーバブル・フレームの使用に関しては、限定的だったものの、その性能に関してはまごう事なき第二世代モビルスーツである。

このリック・ディアスは計画当初Yガンダムと名付ける案もあったように、同時期にティターンズが開発したRX-178ガンダム Mk-IIと、その性能自体は互角だったものの、その設計思想は一歩先をいくものでした。アナハイム・エレクトロニクス社は、本機を量産機系のトップ・モデルとして位置づけ、第二世代のモビルスーツとして普及版と言えるMSA-003ネモとRMS-108マラーを同時に開発し、ネモをエウロゴの主力機とし、マラーを政治的な判断からティターンズに供与している。

一方で、RMS-009リック・デ

ィアスの技術をさらに追求する形で、技術開発も行われた。それが可変モビルスーツである。

ムーバブル・フレームが 可変MSを可能にした

この可変機は、モビルアーマーの優れた直線方向の機動性と、モビルスーツの優れた空間方向への機動性を併せ持つことがコンセプトとなっていた。本来、作戦に対する用途が限定されていたモビルアーマーに対して、モビルスーツの汎用性を与えるという方向で開発が進んでいたものである。一見すると可変モビルスーツと可変モビルアーマーは区別が付きにくい、モビルアーマー形態が主眼の機体が可変モビルアーマーで、一撃離脱に優れた高火力型(戦闘爆撃機)と考えればいいたろう。

一方で、可変モビルスーツはスラスタの効率的使用によるモビルスーツが不得意とする、直線方向の移動力の向上、および作戦行動時間の向上を主眼としていて考えていいだろう。

モビルスーツより大型で、性能的にも余裕のあるモビルアーマーを最初に可変機として計画が成されたのは頷ける話である。そうして開発された初期の可変モビルアーマーは、マグネット・コーティングなどの従来ある技術を使用して製作されるが、極めて簡易的な変形機構を採用していた。

[Z 計画の代表的なMS]

第2世代MS RMS-099 リック・ディアス

別名「Yガンダム」は、実用段階でブルックス能率が値したとされる（結局、クワトロ大尉が乗ることを示して採用されなかった）。各種の設計面で革新的だったといわれる。



第2世代MS MSN-00100 百式

可変MSとして当初は計画されていたが、途中から変更となりクワトロ大尉の愛的な専用機となった。百は開発者のナガノ博士が、百年活躍できるように願いを込め記したとされる。



第3世代MS MSZ-006 Zガンダム

単純による大気圏突破という破格の性能を有する機体。機動性、攻撃力ともに高い。ただ、多脚座という反面、専門に特化した相手には苦戦を強いられる場面も見られた。



第4世代MS MSZ-010 ZZガンダム

第4世代MSの代表格といえる。もっとも、この世代の機体は数も少なく、カテゴリー分けに関しては諸説あるため、本編を第3世代MSに区分する記述もみられる。



一方、モビルスーツを變形させることには課題も多かった。それは、變形によるデッド・ウェイトなどの許容範囲が少なく、結果的に中途半端な機体になる可能性があるからだ。また、變形にかかる時間も問題であった。しかし、ムーバブル・フレームにより、設計の自由度が上がり、モビルスーツの可変型という可能性が見えてきた。

Zガンダムへ至る 開発の道程

かくしてアナハイム・エレクトロニクス社において、Yガンダム（リック・ディアス）に続いて製作されたのは、MSA・0010（デルタ）ガンダム、

（「エプシロン」）ガンダムという機体があったという説もある」と、別アプローチの變形機構がトライアルされた後のMSA・005メタスになる機体であった。これらの機体は最初から變形機構を意識して試作されていた。しかし、MSA・005メタスの方は變形機構自体はうまくいったものの、變形実証機程度の位置づけであり、モビルスーツとしては必ずしも満足いく性能ではなく、一方でデルタガンダムの變形機構は問題を抱えていた。そのためデルタガンダムは、變形機構をオミットした形でひとまずの完成を見る。それがMSN・00100百式だ。この機体の性能はリック・ディ

第三世代機 Zガンダムの誕生

難航していた變形機構だが、幸運が舞い込む。ティターンズの最新鋭機、RX・178ガンダム Mk・IIの鹵獲に成功したのだ。本機は1・5世代機

ともいえるものだったが、ムーバブル・フレームの洗練度はアナハイム・エレクトロニクス社のそれを上回っていた。デルタガンダムの経験を活かしつつ、ガンダム Mk・IIのフレームの技術を参考にして開発されたのが「ゼータ」ガンダムである。また、これに鹵獲作戦時にエウロに参加した義勇兵の少年、カミーユ・ビダンによって、大気圏突入型であるウエイブライダーという新しいアイデアが加えられた。

かくして「Z計画」の成果としてMSZ・006 Zガンダムが完成した。この機体は強力なジェネレーターを搭載と、軽量の機体により、宇宙世紀0080年代の終わりまで第一線級の能

力を維持した。また、そのコンセプトはRGZ・91リガズイ、RGZ・95リゼルなどの後の機体に影響を与えた。一方で、各陣営の可変機も、大容量ジェネレーターに軽量の機体という同じような構成を持っており、これはムール・フルーム技術の確立による、構造上の革新が進んだためであるといえるだろう。これら可変機は第三世代機と呼ばれる。

Zガンダム以降続く ガンダム・プロジェクト

かくして、Zガンダムの完成によって、可変モビルスーツ計画はひと区切りを迎えるかと思いきや、Zガンダムとは別の方向性の機体の開発も並行して行われ、Zガンダムのロールアウトよりも若干遅れた宇宙世紀0088年に2機の機体がロールアウトしている。ひとつはMSZ・0010ZZガンダム。これは変形という新しいコンセプトを、合体という古いコンセプトに合わせたもので、かつてのコア・プロダクトシステムとGパーツというRX・78ガンダムの要素を再び投入したものだ。このZガンダムの高出力、高火力というコンセプトを持ち、位置づけとしてはV作戦のRX・77ガンキャノンに相当するものということもできる。過度の性能を通常のモビルスーツの範囲内の大きさや重量に収めた本機は、まさに夢の機体だが、実際には設計的にも無理があったようで、後にフルアーマー化という形で適性化が図られている。

もう一つはMSA・0011Sガンダム。これは増加装備を付けることでモビルアーマー並の性能を得ようとする試みであり、まさに「ミニ・デンドロビウム」とでもいうべきものだ。ちなみに、これ以降の機体は型式番号がMSZからMSAに変更されているが、これはアナハイム・エレクトロニクス社製のモビルスーツの番号が適用されたと思われる。狭義の意味ではZ計画とは、ZガンダムおよびZガンダムの二機の開発計画といえるのかもしれない。

Zガンダム、Sガンダムともに、カタログスペック上はZガンダムを大きく上回っているが、それがモビルスーツの絶対的な性能を表しているかといえるべきではない。同じ時代の最新テクノロジーを投入した機体である以上、その境界点は、ほぼ同一のところにあるからだ。

Zガンダム、Sガンダムなど第四世代機といわれるモビルスーツは、ニュータイプ専用機とされるが、全体数も少ないニュータイプ専用機を第四世代というの無理があるだろう。そういう意味では、可変機（ムール・フルーム技術による機体設計の洗練の登場により、設計的余裕度は増し

それを利用して様々な技術的取り組みをする、というのがいわゆる第四世代の「恐竜的進化」の正体といえるのかもしれない。

Z計画の総括としては、通常の汎用型であるZガンダム、火力型であるZガンダム、そして拠点防御用であるSガンダムというラインナップは、V作戦や、GP計画と同様の、最新技術を利用したモビルスーツのフル・ラインナップ開発方針であるともいえることができる。

Z計画の 残したものとは!?

Z計画の成果とは、おそらく主には機体構造関係の進化なのだろう。そして、次の世代の基礎技術としての成果は、Zガンダムの軽量化にあった。実際、アナハイム・エレクトロニクス社は、Z計画終了後に産み出した機体のRGM・89ジェガンで、第四世代までの「何でも付けてみる」的な進化から一転、シンプルな機体であった。

しかし、ジェガンの重量はRGM・79RジムIIの約半分。例え同じエンジン、推進器を使用していても単純に倍近い性能を確保している。少なくとも、対モビルスーツ戦闘においては、この形こそが最適といえる。また、ジェネレーターの余裕を火力に回せるという副産物もあったはずだ。

それはひとえに、Z計画の成果である3機の使用を経たアナハイム・エレクトロニクス社の結算なのだろう。そして、新たな時代のニュータイプ機であるRX・93Vガンダムもまた、この考え方の延長線上に開発されている。そしてそういった「ミニマリズム」な考えは、30年以上後に、小型化という形でさらなる進化を見せるのだ。

【主力MSでみる スペックの違い】

RGM-89 ジェガン

U.C.0093	◀	年代	▶
21.3t	◀	本体重量	▶
47.3t	◀	全備重量	▶
1.870kW	◀	ジェネレーター出力	▶
61,400kg	◀	スラスター推力	▶

ジェネレーター出力の差は本文でも触れたが、搭載できる推進剤の量も相当に差がある。これがわずかに6年、恐るべし進化のスピードだ。

RGM-79R ジムII

U.C.0087	▶
40.5t	▶
58.7t	▶
1,518kW	▶
62,000kg	▶



アナハイム・エレクトロニクス社製MSの戦場

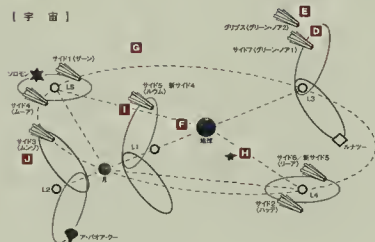


U.C.0080年〜0090年代において、高性能な試作機から量産機まで多彩なMSを開発したアナハイム・エレクトロニクス社。「同社製MSが戦わなかった地はない」といえるほど、様々な地で様々な戦いが繰り広げられた。その軌跡を振り返ってみよう。

【地上】



【宇宙】



H アクシス

U.C.0093年、シャアの反乱とも呼ばれる第二次ネオ・ジオン戦争の際、地球寒冷化作戦を遂行するためフィス・ルナについて地球への落下が企てられた。サイコクレームを内蔵するνガンダムのおかげで、後年アクシス・ショックと呼ばれる現象が観測される。

I 新サイド4 (旧サイド5)

新サイド4のコロニー、インダストリアル7で行われたビスト財団と「袖付き」の間の秘密戦争を阻止せんと、ロンド・ベル隊のMS部隊、特殊部隊のエコーズが侵入した。コロニー内では、両勢力によるMS戦が展開され、民間人などにも被害が出ている。

J サイド3

ハマーン・カーン率いるネオ・ジオンは、地球連邦政府との交渉によって得た、サイド3のコロニー、コア3を新たな本拠とした。第一次ネオ・ジオン戦争では、ネオ・ジオンの内乱もあり、ニュータイプ部隊や最新鋭MSによる激しい戦いが繰り広げられた。

E グリプス (グリーン・ノア2)

サイド7のコロニー。もとは密閉型コロニーを2つ繋ぎ合わせた形状だが、U.C.0067年のグリプス戦役において分離され、その形状からコロニー・レーザーへと改造された。グリプス戦役の事実上の決戦地となった。これによりティターンズは壊滅。

G 大気圏内

グリプス戦役において、エウゴがジャブロー基地に降下作戦を行った他、降下作戦を遂行する部隊とそれを阻止する部隊の戦いが度々行われている。U.C.0093年の第二次ネオ・ジオン戦争では、落下するアクシスを食い止めようと、水圏の攻防が行われた。

Q フィス・ルナ

資源小惑星のひとつ。第二次ネオ・ジオン戦争では、地球寒冷化作戦を実行すべく、フィス・ルナを地球に落下させようとするネオ・ジオンと、ロンド・ベル隊のMS部隊が出撃し、この宙域で戦戦を行なった。しかし、フィス・ルナはチベット、ラサに落ちた。

E アフリカ

U.C.0088年、ハマーン・カーン率いるネオ・ジオンがダカール制圧のために降下。ZZガンダム、Zガンダムなどで構成されたエウゴのガンダムチームはこれを逆襲、最新鋭MSで砂漠地帯での局地戦を戦った。その後、戦線は欧州へと飛び火することになった。

Q 太平洋上高高度

U.C.0096年、ビスト財団によりミネバ・ラオ・ザビを移送するガルド編の機上にて、ユニコーンガンダムとバンシイの兄弟機が戦闘を行う。その際、可変MSであるデルタプラスやアングラッシュも空中戦を行った。「袖付き」によりミネバは奪還されることになった。

Q サイド7

サイド7のコロニー、グリーン・ノア1はティターンズのMS試験場となっていた。ガンダムMk. IIの試験を行っていた際、エウゴのクワトロ・バジーナ率いるリック・ディアス隊と接触し、戦闘に突入した。その後、ガンダムMk. II 2機が撃墜された。



グリプス2

U.C.0088.02 グリプス2攻防戦

ティターンズとエウゴ、そして火星から飛来したアクシズを交えた三つ巴の戦いとなったグリプス2戦役末期。コロニー・レーザへ改装されたグリプス2を制圧したエウゴは、これをもってティターンズ艦隊の殲滅を計画。しかしティターンズとアクシズはこれを阻止せんと奮戦、その結果、総力戦に。グリプス2の内部では、Zガンダムや百式がキューベレイやジ・Oといったニュータイプ専用機と戦闘を繰り広げる。百式はこの戦闘にて大破（搭乗者は行方不明）。Zガンダムはジ・Oに突如と仕掛け、機体小破しながらもジ・Oを撃破している。



●Zガンダムに搭載されたパイオセンサは最大限に稼働、ビームを遠くから感知し、ダメージを与え続けるなど常備では考えられない能力を発揮した。



●コロニータイプ専用機キューベレイの前には目も手も及ばず、戦闘において大破（搭乗者は行方不明）を喫せられてしまった。

サイド3 (ジオン共和国)

U.C.0089.01 サイド3最終決戦

ハマーン・カーン率いるネオ・ジオンと、ハマーンに反旗を翻したグレミー・トトの軍勢、そしてエウゴが入り乱れて戦った第一次ネオ・ジオン戦争末期。グレミーはプルツォの搭乗するウィン・マンサやニュータイプ部隊による精鋭部隊を展開。有利に戦闘を展開するに見えたが、ルー・ルカのZガンダムに機を突かれコクピットを狙撃。ウィン・マンサもろとも戦死。ハマーンはキューベレイでジュードのZZガンダムと「一騎打ち」を行う。ZZガンダムの合体機構を使ったトリッキーな戦法や、パイオセンサの能力により、ジュードはハマーンとの戦闘に勝利した。



●頭部が融解するほどの出力でハイ・メガ・キャノンで連射するなど、ニュータイプ同士の戦闘においてZZガンダムのパイオセンサはフル稼働。

●機体が小破したZガンダムだったが、パイロットが混乱をきたし動きが止まっていたウィン・マンサを撃破した。



サイド7 クリーン・ノア1&2

U.C.0087.03.02 ガンダムMk-II奪取作戦

サイド7のコロニー、グリーン・ノア2はティターンズによって軍事基地化が進められ、新型MSであるガンダムMk-IIが行われていた。そのグリーン・ノア2の様子を偵察に来ていたクワトロ・バジーナ率いる3機のリック・ディアスで構成されたアーガマのMS隊は、任務中にこの試験現場に遭遇。ティターンズの新鋭機であるガンダムMk-IIの奪取を計画する。コロニー内外では同軍による戦闘が行われたが、民間人の少年カミーユ・ビダンの助力もあり、奪取計画は成功した。



●早くも壊れたガンダムMk-IIは、クワトロのリック・ディアス3機に襲撃を受け、戦いの最中に壊れてしまった。

【旧サイド5 インダストリアル7】

U.C.0096 ラブラスの箱争奪戦

聞けば地球連邦の存在を左右しかねないという、「ラブラスの箱」。ビスト財団の現当主、カーディアス・ビストはインダストリアル7において、その箱の真正なる存在、ユニコーンガンダムの機体に関する会談を「袖付き」のガランシェール隊と行う。しかしその会談を察知した連邦軍はロンド・ベル隊（エコーズ）を派遣、ガランシェール隊のMSと戦闘になる。コロニー内部ではリゼルとガランシェール隊のクシャトリヤの戦闘により多大な被害が出た他、カーディアス・ビストも混乱した状況の中で死亡。しかしその実子バーナージ・リンクスにユニコーンガンダムは託されることとなった。



●クシャトリヤとリゼルの激しい戦闘。絶対的な性能をそれほど重視していないリゼルは一封では不利であった。



●フルバネイコロニーを破壊したユニコーンガンダムは、デストロイモードに変身しクシャトリヤを倒す。

フィフス・ルナ

U.C.0093.03.04 フィフス・ルナ攻防戦

新生ネオ・ジアンを率い、地球人類を強制的に宇宙に上げるための「地球裏面作戦」を行う地球・アズナブル。その手段のひとつとして小惑星フィフス・ラグナを球下に落下させ各戦艦が降られる。作戦にはギン・ザク、スズ・ザク、ド・ドガが参加しており、フィフス・ラグナの推進器を破壊し落下を阻止しようとする、ロンド・ベルのアムロ・レヴィ、ガスティとの戦闘が繰り広げられた。アムロのレヴィ・ガスティは性能差をおもてヤクト・ドギーを追い越すが、シャアがガブリーで加勢し、形勢は逆転。結局、フィフス・ラグナの落下阻止は失敗し、落下地点となったチベト、ラサを中心とする大破壊が起る。



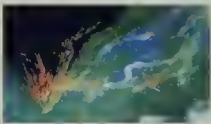
◆サザビーに搭乗して対戦したシャアには「おもちゃ」と形容されてしまった。ガズィ、ヤクト、ドーガに対しては有利に戦えたのだが……。

アクシズ

U.C.0093.03.12 アクシズ落下阻止戦

フィフス・ルナに次いでさらにアクシズを地球に落下させる作戦をとったシィア。しかしランド・ベル卿はその動きを察知し、阻止するためにアクシズを破壊しようとする。アムロのバグダムとシィアのオザビーはアクシズ周辺で一戦を行う。勝利するも、アクシズは破壊工作時の爆弾の威力が強く地球に落下をはじめ。これを食い止めるようにしたアムロのバグダムのサコフフレームが崩壊し、アクシズ・ショックと呼ばれる現象が発生。アクシズは落下軌道からそれるといふ奇跡が起きた。

→落下を食い止めるべく、ネオ・ジオン、連邦双方のバイロットがVガンダムに続いた。人々のその意思はサイコフレーションと共感し、人智を越えた力を発揮する。

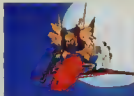


■サザビーとVガンダム、共にファンネルを誤爆したハイエンド機同士
の対決。最終的に街の真ん中で勝負がつくという意外な結末に

大気圏内

U.C.0087 & U.C.0088

星矢達から降下した地上の地味な直線兵器を投下する3発有力な戦術で戦うが、降下の直前に全く無防備になることと次第に危険になる。Zガンダムはこれのような降下用戦艦に有効な兵隊として開発されたが、実際に使われていた程大気圏再突入が必要とされた場面はなかった。しかし、大気圏再突入経路をたどるまま大気圏に落下したMSを救助するために、Zガンダムの大気圏突入能力が役に立っている。また、Zガンダムが登場している第1期-第3期・戦艦争奪時でも、衛星軌道での戦艦にはZガンダムの方がZZガンダムより速達しているとして無用なことがあった。



↑ハンブラビの海へビ攻撃により地球に落下した百式をZガンダムが機体上面に載せ、無事降下したこともあった。



↑第一次ネオ・ジオン戦争においても、キュベレイMkⅡをZガンダムがサルベージし地球へ降下している。



エウゴによるジャブロー降下作戦時には、フライングアーモを装備したガンダムMk-IIが、バリュートで降下するMSに対し一方的に攻撃できるシーンが存在した。バリュートに対するフライングアーモの優位性が明らかになった瞬間だ。

アフリカ大陸

U.C.0088.08 ~ ネオ・ジオン追撃行

地球連邦政府の首都があったダカールに、ネオ・ジオンが降下、これを制圧した。アーガンタ隊はカラバと共闘しつつ、アーガンタ、ガンダムチームの二手に分かれネオ・ジオンを攻撃する作戦をとる。その返答の際に、ガンダムチームは砂漠を拠点とするジオン公国陸軍や、アフリカ解放を目指す青の部隊と戦っている。最終MS 対旧式 MS の改修機という、珍しい戦いが行われた。



◆ZZガンダムは海中での戦闘も行った。至近距離での敵機の爆発に耐える装甲により、水圧もある程度凌げる様子。

↓砂漠に立つガンダムチーム
 地の利を活かした戦法により劣勢を強いられることもあった。また、砂漠の砂塵は戦場の視界の妨げだった。



太平洋上高高度 ガルダ

U.C.0096 ガルダ機上攻防戦

ミネバをのせたガルダと、そこに合流すべく運ばれてきたユニコーンガンダム。しかし事前のプライトによる機回しにより、ユニコーンガンダムはガラランシェール機と共闘、ミネバ（とマリダ）救出作戦を展開。これに反戦する形でバンシイが起動し、ユニコーンガンダムの兄弟機対決がガルダ機上で行われた。戦闘後、ガルダから離脱したガラランシェール機一行はユニコーンガンダムの力を借りて宇宙へ上がり、ネル・アーガマと合流した。



↑機体の特殊兵器を持つバンシイ。空間移動能力もバンシイの方が優れており、状況としては不利であった。



↑サイコフレームの力を最大限に引き出すことにより、艦船一撃を引き上げるほどのパワーを発揮。アクシズ・ショックを彷彿とさせる光がユニコーンガンダムを包んだ。

過去におけるトリントン基地での戦闘

U.C.0096のラプラス戦争以前にも、U.C.0083には搬入されていた松澤園とガンダム試作2号機がジオン公国陸軍軍によって奪取されるという事件がおり、ガンダム試作1号機とアルビオン艦がこれを追撃。アナハイム・エレクトロニクス社の新鋭ガンダム同士が戦う状況に、同社およびジオン公国陸軍軍にとって、トリントン基地は密戦場から助地というよう。



オーストラリア 連邦軍トリントン基地

U.C.0096 旧ジオン軍残党襲撃

ラプラスの旗を開ける「戦」であるユニコーンガンダムが指定した座標が連邦軍トリントン基地であったため、ジオン公国残党軍はトリントンおよび沿岸基地の襲撃（機動）を計画。MAシャンプロを中心とした部隊がトリントンに上陸したが、サイコミュの暴走からシャンプロは市街地において破壊の限りを尽くす。それを止めるために上空から降下したユニコーンガンダムのバナーは、シャンプロと対峙、MAパイロットであるロニ・ガーベを脱走しようとするも失敗。最終的にはデルタプラスの放ったビーム・マグナムによりシャンプロは活動は停止した。



↑シャンプロとユニコーンガンダムに搭載されたサイコミュが失態し、サイコフィールドが形成された。



↑デルタプラスはサブ・フライト・システムとしてユニコーンガンダムを襲撃共闘。シャンプロに止めた一撃を放ったのもデルタプラスだった。



↑トライスターが集るジェスタ。ユニコーンガンダムの援護を目的に開発されたが、シャンプロとユニコーンガンダムの戦いには踏み入らない様子だった。



↑時代的には旧式MSではあるが、トリントン基地配備のタモは、ジオン公国陸軍のMS（こちらも旧式ではあるが）を相手に戦闘した。

↑ガンキャノン・ディテクターのような試験機も配備されていたが、地給や整備には驚かされたことだろう。



Z計画の実像



「可変機構を持つMS」であるZガンダムをはじめとして、既存のMSとは異なるコンセプトを持った機体が作られたZ計画。巷間でいわれるような、Zガンダムを開発するためだけの計画なのか？ このMS開発計画の本当の目的とは何だったのだろうか。

MSがもつ数多の可能性を探るためのプラン・Z計画

「Z計画」は、アナハイム・エレクトロニクス（A/E）社と反地球連邦（Ⅱ反ディターンズ）組織であるエウゴとの共同によって進められたモビルスーツ開発プランだ。Z計画の素直なスタートラインは、クワトロ・バジーナとシヤア・アズナブルが小惑星アクシズから持ち帰ったという、ガンダリウム合金の精錬技術が引き渡されてからといえる。この合金の使用によってMSの装甲が堅牢になっただけでなく、機体を構成するフレーム材質に活用することで、その剛性が向上した。その結果、ムーバブル・フレームと呼ばれる関節部の可動範囲が大きくなり、自由度の高いフレームが実装され、最終的には機体そのものに変形機能を持たせる機構へと発展した。なお、ムーバブル・フレームのアイデア自体はA/E社でも独自に考案されていたようだが、本格的に実装が実現したのは、連邦軍

工廠製のRX-178ガンダムMK-IIを直獲、解析してからである。

しかし、Z計画の具体的な内容については判明していない部分も大きい。ギリシア文字を開発コードとして付け多様な「ガンダム」を開発する、という表面的な部分はともかく、最終的な目的は今ひとつ不明である。当初計画されたVガンダムはリック・ディアスに、Z計画のプランは逐一変更されているようにも見えるからだ。

さらに、本命のZガンダムは、リック・ディアスとも百式とも異なる特徴を持つ可変機だ。リック・ディアスおよび百式は質量によるAMBAC制御を行ったためのバインダーとよばれる特徴的な装備を持つが、Zガンダムでは趣が異なるなど、コンセプトは各機でバラバラなのだ。

このようにZ計画は、明確な到達点をあらかじめ設定し、ステップアップをして最終的に「Zガンダムを開発しよう」という計画だったとは言いが切

ない。Zガンダムの特質としては完成度の高い可変機構に加え、単独でオプ

ション機構無しでの大気圏突入を可能とする点が挙げられる。しかしこの能力、特に単機での大気圏を突破できる能力は、MSにあまねく必要なものとはいえず、むしろ限定的だ。たとえそれが、どちらかといえばスペースノイド側に立ち、宇宙を拠点に活動するエウゴが、地球を本拠とするディターンズ（地球連邦政府）と戦う際に必要だった、にしてもである。

その一方、リック・ディアス、百式、Zガンダムと後発のMSになるにつれて、大パワーと軽量化という特徴が顕著になり、MSとして総合的能力が向上しているのも事実だ。ZガンダムはMS形態においても、バラランスとれた高性能を発揮している。その性能は、MSにあまねく必要な要素といえる。

この2つの事実は一見、矛盾しているように見えるが、実際にはそうではない。話は簡単で、Z計画とは最新の技術を使いMSの様々な可能性を切り拓

いていくと同時に、MSそのものの能力をできる限り高めていくという、一種の実験的なプランだからだ。

Zガンダムが完成した後、A/E社はZZ(θ)ガンダムやS(Ⅰ)ガンダムなど、さらなる高機能な盛り込んだ試験的MSを開発し続けた。それは、広い意味における「Z計画」の続行といえる。「技術の粋をこらして最高性能のMSを開発し、その開発と実用データで得たものを、後の量産機開発にも転用する」という手法は、一年戦争における連邦軍が推し進めていたRX計画（ⅡV作戦）が通った道だ。Z計画においても、成功した高性能な試作機を量産しようという試みは百式、Zガンダムなどで行われていた。

A/E社は、Z計画によってRX計画と同じ道筋をたどることで、自社のMS開発技術のノウハウを歴史や理論ではなく、血肉としようとしたのかもしてない。

結果的にA/E社がZ計画や、その後展開するMS開発計画を経て、最終的にたどり着いた答えは、U.C.0120年代に量産MS、現役で使用される画期的な量産MS、RX-93ジェガンであったといつて差し支えないだろう。言い換えるならば、Z計画はジェガンを生み出すにいたる、遠大なMS開発の筋道における最初の一步であった、ともいえるだろう。

Z計画における その成果と実態

リック・ディアス

ガンダム
Y



当初は、γガンダム（開発用コードネーム）として開発される。新素材であるガンダリウムγ合金の、装甲材としての可能性を追求したが、ムーバブル・フレーム技術は未完成。U.C.0093年代に開発されたガンダム試作2号機のフレキシブルスラスタバインダーなどとは異なる、スラスタによる機動を重視しない、質量によるAMBAC制御を目的としたバインダーを装備する。

百式

デルタ
δ



当初はδガンダムとして開発される。ビーム全盛時代の防衛方法として、軽量化による運動性の向上とビーム・コーティングという課題にトライ。バインダー技術はさらに昇華され、完全に慣性制御のみを行う装置となった。また、後年になると可変機として計画されながら変更を余儀なくされた「可変MSとしてのδガンダム」を、完成したムーバブル・フレーム技術によって実現。後にデルタプラスが開発。

Zガンダム

ゼータ
Z



完成したムーバブル・フレームによる変形機構をもつ可変MS。単機での大気圏突破という特殊な機能と、MS時の高い戦術能力という普遍的機能を併せ持つ。後に様々な形で量産機や派生機の開発計画が試みられるが、どれも決定打とはならなかった。後年になると一部可変という特殊なリ・ガズィに引き継がれ、可変MSのリゼルへと統合されていくことに。その後の開発系譜は途絶えることになる。



ZZガンダム

シータ
θ



Sガンダムと共に、秋葉の意味ではZZ計画によって開発された機体ではない。だが、新たなコンセプトを模索し、新機軸の合体可変機として誕生している。機能を究極まで突き詰めるという姿勢は、AE社がMS開発ノウハウを得るために不可欠といえた。ただ、アイデアとしては早熟で、技術的にも「早すぎた」観が否めず、本格的な後継などは存在しない。開発コードはθガンダムであった。

Sガンダム

イオタ
ι



当初はιガンダムとして開発が進められていた。ZZガンダムと同じような合体可変機ではあるが、基幹となるコンセプトは異なっている。オプション装備による強化案の実現ともいえるが、その後の展開はなく、一代限りのMSになった。

MSD

主なパイロット

クワトロ・バジナ

エウゴのメンバーとして活動する。シャア・アズナブルの仮の敵。赤い髪と顔を彷彿とさせる赤いリック・ディアスに憧れる。



アボーリー・ベイ

一年戦争の頃から活動共にしているシャアの部下。黒いリック・ディアスに憧れる。顔は良く、アーガマクルーからの信頼も厚い。



ロベルト

アボーリーとともにアーガマ隊のリック・ディアスパイロットとして活躍。プラン・ブルダークのアッシマーに撃墜される。



➡1 胴体：既存のMSと異なり、頭部にコックピットを付す。胴体内のレイアウトの自由度も増した設計と思われる。なお、コックピットは射出ポッドとしても機能する。

➡2 バイナダー：AMBACによって機動を行うための、リック・ディアス（および百式）に特徴的な装備。下腿にはスラスターが内蔵されている。

➡3 ランドセル：通常のMSのような頭部と異なり、代わりにビーム・ビストル（4本・ビーム・サーベル）やクレイ・バズーカ用のラックとなっている。なお、スラスターは腰側に配置。

➡4 機体形状：ずんぐりとした旧ジオン公国軍系の意匠がうかがえるシルエットだが、ガンダリウム合金製の機体構造のおかげで一年戦争期のMSに比べ軽量。

➡5 装甲：アクシズの冶金技術で生まれたガンダリウム合金製装甲板をA.E.社が改良させたガンダリウムV合金が用いられる。胴部などの装甲は製造機。

R I C K D I A S

▶RMS-099

リック・ディアス

Spec

●頭頂高：18.7m ●本体重量：32.2t ●全備重量：54.7t ●ジェネレーター出力：1,833kW ●スラスター総推力：74,800kg ●センサー有効半径：11,500m ●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：バルカン・ファランクス、ビーム・サーベル、クレイ・バズーカ、ビーム・ビストル



目指したものは 新世代スタンダードMS?

アナハイム・エレクトロニクス(AE)社が開発したMS。クワトロ・バジールがシリア・アズナブルがアクシズが持ちこんだガンダリウム(一)合金の精錬技術や、連邦軍のみならずペーサイドの国家・組織全般にMSを供給するAE社における、旧ジオン公国系エンジニアの設計から、外見はMS・09ドムを思わせるフォルムを持つ(当初はVガンダムという名称がつけられる予定だったが、名称にそぐわないルックスであったためリック・ディアスになったとされる。これについては諸説ある)。AE社と旧ジオン公国系の関係性が窺える機体でもある。本機の大々な特徴としては、まずガンダリウム合金が装甲として使用されていることが挙げられる。さらに、本機は材質以外にもスペースドアーミーやリアクティブ・アーマーといった装甲の構造による強度向上が図られている。ビーム兵装全盛となりつつある時代において、装甲にこだわった希少なMS(ただし、実戦においてはやはりビーム兵装の前にはそれほど有意義な工夫とは言えなかった)。なお、これだけの装甲を持つ本機だが、ガンダリウムV合金の使用により、旧来機に比べて非常に軽量で、運動性も高い。

また、ガンダム試作2号機に通じる構造として、バインダーを装備しているが、ガンダム試作2号機と異なり、大型スラスターは内蔵していない。バインダー接続部の強度の問題やプロペラント消費量の増大といったデメリットと比較し、本機の重量と、想定される用途であるならAMBACを中心とした機能を持たせるのみで充分、という開発陣の結論かもしれない。リック・ディアスは計画段階ではVガンダムであり、Z計画の起点となったMSである。しかし、直接的にはZガンダムと関係はない。あくまでAE社の(ガンダム試作2号機開発に関わった)エンジニアが、エウロに要求された対艦、対MS戦闘用MSとしての要求を満たす汎用機として当時最新のエンジニアリングと設計思想において作り上げた機体だ。Z計画の結末ひいてはAE社がU.C.00800090年代にかけて様々なMSを開発し、最終的に行き着いた先はジェガンとなる。だが、ジェガンも製造時期のリック・ディアス同様、汎用ながら高い性能を持つ量産MSである。

Z計画の起点と終点のMSが用途・性質として近いものになるのは偶然ではなく、AE社が求め続けたのは、結局のところ「理想の高性能量産MSだった」ということの証明といえるのではないだろうか。

リック・ディアスの性能は!?

ムーバブル・フレームを用いたMSとしては未完成だったといえるリック・ディアスだが、その実戦における評価はどのようなものだったのだろうか。世代的には同じガンダムMk-IIを開発した技術者フランク・リン・ビンはリック・ディアスを高く評価していたし、カラバのメンバーも宇宙へ帰ろうとするクワトロたちにリック・ディアスをカラバのために置いていくように要求していた(カラバの会所事情からすれば何でも欲しがったかもしれないが)。また、次々と新機軸を盛り込んだMSが投入されたグリプス戦役において、最後まで運用され続けているのもポイントだ。リック・ディアスは特異なコンセプトを持たなかったものの、編かな先進性・独自性を持つ優秀な機体だった、といえるだろう。



第2世代MSの代表格といえる本機だが、外観から受ける印象より高機動な機体である。



「グリプス戦役末期になると、やや旧態化していき、が最後まで戦い抜いた」

武器・装備

バルカン・ファランクス

胴部に内蔵された56mm口径のバルカン砲。薬剤のはかミサイルなどの空艇にも使用される。



クレイ・バズーカ

口径300mmのバズーカ。対艦戦などに使用される。シルエット以外にコンセプトとしてドム系を引き継いでいる面を持つことがわかる。



ビーム・ピストル

通常は背部のマウントに2丁マウントされている。マウントした状態での射撃も可能で、後方および上方の防空にも使用できる。



多目的ランチャー

指内部に内蔵されており、対人用のトリモチやバルーンダミーなどを射出することが可能。



ビームサーベル

標準的なビーム・サーベル。背部武装マウント下面のラッチに取り付けられている。装備数は1基。



リック・ディアスの武装は実弾弾を用いたクレイ・バズーカからビーム・ピストル、近接戦闘用のビーム・サーベルまで一般的なMS用の兵装が用意されており、対艦から対MS戦闘まで対応が可能。ビーム・ピストルは意外にも百式のビーム・ライフルと出力は同等。しかし小型化して背部にマウントさせることによって、多目的な兵装システムを構築している。

D I J E H

▶ MSK-008

ディジェ

Spec

頭頂高: 18.4m ● 本体質量: 33.9t ● 全備質量: 51.8t ● ジェネレーター出力: 1,892kW ● スラ
スター総推力: 74,000kg ● センサー有効半径: 11,700m ● 装甲材質: ガンダリウム合金 ● 武装:
バルカン砲×2、ビーム・ナギナタ、ビーム・ライフル、フレィ・バズーカ、他

リック・ディアスを
陸戦用に向けて再設計

連邦軍のジャブロー基地への降下作戦を展開したエウゴが、宇宙へ帰る際、戦局の悪化もあり運搬できないMSが多数地上に残された。これらのMSは地球圏を活動の場とする、エウゴの支援組織のカラバへと引き渡された。その際得たRMS・009リック・ディアス（アポリー機）を、カラ

バが地上戦仕様様に最適化したのがMSK・008ディジェだ。スペック面はリック・ディアスに比べジェネレーター出力が若干向上し、スラスター推力が約20%高い。これはMS単体で大気圏内を飛行するための改善ではなく、機動性の向上を狙ったものだろう。サブ・フライト・システムを使用するのは他のMSと同様である。しかしディジェではスペック以上に、外見の変化が大きい。蝶の羽のような

特徴的な背中のフィンが放熱（冷却）効果を高め、サブ・フライト・システム搭載時、一種の整流板として働き、安定性を高める効果もあると見られる。宇宙でこそ意義のある装備のバインダーを、サブ・フライト・システムを多用する地上用MSに向けて再設計したデバイスといえよう。実戦においてはアムロ・レイが搭乗しており、本来はアムロ専用機としてガンダムタイプの頭部を採用予定だったという説もある。

▶1 全体的な外観イメージ。特に頭部の形状などは旧ジオン公国軍のゲルググを彷彿とさせる。リック・ディアス同様、コクピットは顔部に設置。

▶2 リック・ディアスのバインダーに替わり、特徴的なフィンが両面に備える。

▶3 右腕全体を覆うカバーのようなシールドを装備。左肩部分アーマーはミサイルラック。

リック・ディアスや面式武装のクレイ・バズーカ、ビーム・ライフルなど、武装は標準的。なお、ビーム・ナギナタを装備。



RMS-099

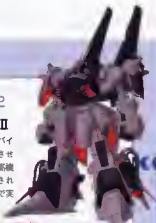
の系譜

●派生型試作機

MSA-099-2

リック・ディアスⅡ

脚部のスラスターが増設され、バインダーも大型化し機動性を向上させたモデル。グリアス戦役後期の高機動MSに対向する目的で開発されたが、試作機が開発されたのみで実戦投入はなされていない。

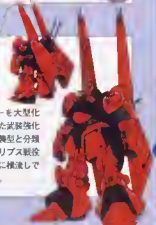


●派生型高機動機

RMS-099B

シュツルム・ディアス

リック・ディアスのバインダーを大型化し、ビーム・カノン内蔵させた武装強化型。スラスターも強化され、強襲型と分類できる。少数が製造されたがグリアス戦役では使用されることなく、後に横流しでネオ・ジオンに渡り運用された。



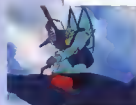
※ネオ・ジオンで運用される

●派生型陸戦用機

MSK-008

ディジェ

エゥーゴが地上に残っていたリック・ディアスを、カラバが重力下での運用に適するよう改造したモデル。リック・ディアスと同じ旧ジオン系の技術者が改修にあたっており、連邦軍のMSとは離れた外見をしている。



●試作機

RX-098

プロトタイプ リック・ディアス

アナハイム・エレクトロニクス社が独自開発していたリック・ディアス。試作機にはガンダリウムγ合金は使われておらず、重量増やジェネレーター出力の不足などに悩まされていた。後にノウハウを得てリック・ディアスが開発。



RMS-099

リック・ディアス

不完全ながらもムーバブル・フレームの機構や、ガンダリウムγ合金の採用、さらにバインダーによる機動など新技術を盛り込んで開発されたMS。特にグリアス戦役において活躍。



●その他

- 直系の後継機なし
- 技術面などはMSA-003 ネモなどへフィードバック

後のMSの礎となった
リック・ディアスファミリー

リック・ディアスはアナハイム・エレクトロニクス(AE)社の独自設計によるMSだが、ムーバブル・フレームを本格的に採用する以前の機体だった。しかしながら、ガンダリウム(γ)合金を使用し、これまでのMSに比べれば軽量なことや、バインダーを利用した新しいコンセプトなどから同時代のMSと比しても劣らない性能を持ち、少数だが量産もされている。

だが、リック・ディアスの直接の後継機としては、数種の試験機が開発された程度で、本格的な後継機は登場しなかった。AE社としてはより優れたムーバブル・フレームを持つMS、N・00100百式、同様にRMS・108マラサイやMSA・003ネモといった純然たる量産機がすでに開発されており、本格的に改良して派生機を積極的に開発する必要はなかったのだ。逆に言えば、形こそ違えど百式やネモが「後継機」といえる。これらMSの開発には、リック・ディアスの運用データが大きく役立てられているのは疑いようがない。

そういった意味では、リック・ディアスというMSの体系そのものが「試験機」という役割を担っていたといえるだろう。

主なパイロット



クワトロ・バジーナ

一年戦争時はシャア・アズナブルの名で知られたエウーゴのエース。百式は彼の搭乗を前例に調整されたとされる説もある。グリース戦役終結まで本機に搭乗していたが、最終決戦時に行方不明(機体は回収)。



ビーチャ・オーレグ

ガンダムチームのメンバーとして第一次ネオ・ジオン戦争を戦ったジャクウェの少年。彼以外にも仲間であるモド・アガケなどが搭乗して出撃している。



スペック比較

	MSN-00100 百式	MS-2006 Zガンダム	AMB-004 キャベレイ
全高	18.5m	19.9m	18.4m
全幅	31.5t	26.7t	36.2t
推進力	1,850kg	2,020kW	1,820kW
スラスター数	74,800kg	112,600kg	61,600kg

➡1 ゴーグル型に見えるが、スクリーンの下にはデュアルカメラが内蔵されている。

➡2 デルタガンダムとして開発されていたが、いわゆるガンダム型ではなく独自の高い重さを持つ。機体の先進性を補償し、過去のイメージからの脱却を図る。

➡3 金色に輝くという、MS史上にも類を見ないカラーリング。これは肩・ヒール・コーティングの影響といわれる。戦場では目立つ存在だが、パイロットの気持を乗り切った。

➡4 リック・ディアスと比べて大型化され、推進力も内蔵していないバインダー。機体にもAMB-004を行ったためだけの影響は、重量増もガンダム司令部の意思で、推進力を減らした全重量とどの程度少ない。ゆえに推進力の残量強化による影響を受け難い、バインダー式を選択したのかも知れない。

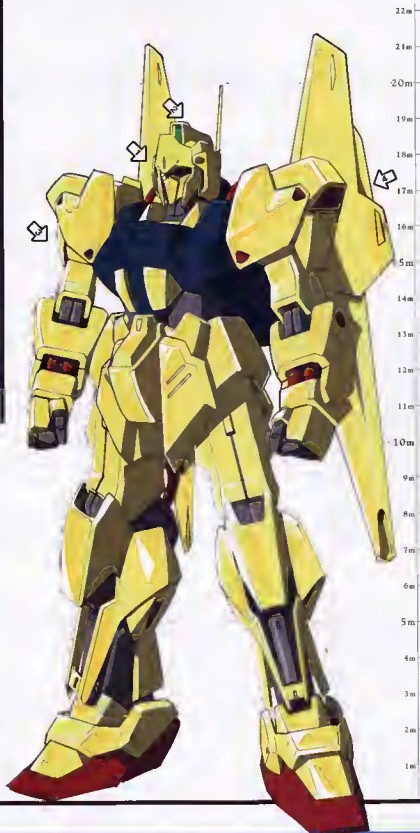
HYAKU-SHIKI

▶ MSN-00100

百式

Spec

◎頭頂高：18.5m ◎本体重量：31.5t ◎全重量：54.5t ◎ジェネレーター出力：1,850kW
◎スラスター総推力：74,800kg ◎センサー有効半径：11,200m ◎装甲材質：ガンダリウム合金
◎武装：バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、クレイ・バズーカ



MSのあり方を求める

リック・ディアスを開発したアナハイム・エレクトロニクス（A.E.）社が、直獲したガンダム Mk. II のムーバブル・フレームを解析し、そのデータをフィードバックさせた MS。開発主任は M・ナガノ博士であり、百式というネーミングも「百年保つよう」という博士の願いが込められている。

当初、ムーバブル・フレームを使用した可変機構を持つデルタガンダムとして、本機の計画はスタートしたが、ムーバブル・フレーム開発の技術が未成熟なため可変機構の実装をとりやめ、一般的な非可変 MS としてパッケージングしたのが百式である。しかしながらリック・ディアスとは異なりムーバブル・フレームの採用が開発当初から計画されていたため、A.E.社としては初の本格的なムーバブル・フレーム搭載機となる。

開発時期はリック・ディアスと近く、ジェネレーター出力や推力といったスベックに大きな違いはないが、機体のコンセプトには異なる部分もある。ある程度装甲にも配慮したリック・ディアスとは異なり、ガンダリウム合金製の装甲を持つものの、脚部などはバイタル・パート以外の部分は薄いほどに装甲を排除した。これはビーム兵装に対

しては装甲で防ぐのではなく運動性を向上させて回避するというコンセプトによるもの。フレームが露出している脚部は、軽量化を追求した結果だ。また、補助的に耐ビームコーティングによる防御が実装されており、金色に輝く機体カラーはそのコーティングによるものである（ただし実際の効果はあまり高くなかった様子）。

また、リック・ディアス同様に背部には2基のバインダーを備え、AMBACによる運動を実現している。軽量化を重視した本機が重量的にはハンデになるバインダーを採用した理由には、推進剤を消費せずに自由な機動が行えることのメリットの方が重量増というデメリットより大きいと考えたためと思われるが、このあたりはバックパックにフレキシブルスラスタを用いたガンダム Mk. II とは対照的である（なお、ジェガンはガンダム Mk. II タイプのスラスタを採用しており、最終的にはバインダーは淘汰されていく運命にあった）。

A.E.社が運用上において百式をどのようなコンセプトのMSにするつもりだったかは不明な面もあるが（実績的にはオールラウンドなMSといえる）、ムーバブル・フレームを用い、ビーム兵装が全盛となる時代におけるMSのあり方を模索した試験機、と位置づけることはできるだろう。



百式の操縦性から見るMS開発

百式は開発時からエウゴのパイロットであるクワトロ・バジナが搭乗することが想定され、高い運動性と引き換えにナースで難しい操縦性といわれる。実際には個人のためにMSを開発するというのは難しい面でも、技量の高いパイロットが訓練を積んで搭乗するMSとして設計されていた、と考えるのが自然だろう。なお、グリスズ戦役で大破した百式は、修復の際、この操縦性も改善されたようで、軍用MS搭乗経験のないジャンク屋の少年でも水準以上に操縦できた。百式は改良後に量産化も計画されており、尖ったコンセプトモデルを生産モデルとして普遍化するという、RX-78ガンダムの語から見られたスキームが窺われている。



百式の搭載兵器

ビーム・ライフル

当時のエウゴで用いられていた標準的な仕様のビーム・ライフル。ディジェなども使用していた。後部の半円状の部分はエネルギーパック。

クレイ・バズーカ

リック・ディアスと同型の口径300mmの実体弾バズーカ。基本的に対戦艦艇などに向いた兵装だが、多様な弾薬が用意され敵弾なども使用可能。

ビーム・サーベル

リック・ディアスなどにも採用されているビーム・サーベルで、腹部リアアーマーに2本マウントされている。

メガ・バズーカ・ランチャー

MSの全長はどのサイズを誇る、巨大なビーム兵器（それゆえ独自にスラスタを持つ）。超長距離狙撃により敵艦隊やMS部隊を一網打尽にする。連射の際にはエネルギーを外部供給しなければならず（旧式のMSなどでも供給自体は可能）、運用には難しい面も。

百式の武装は標準的な構成で、対MS戦闘を主軸としながらもオールラウンドに運用可能。特殊な装備としてメガ・バズーカ・ランチャーが挙げられる。敵戦力を（密着・先制と）大火力で殲滅するための兵装で、ZZガンダムのハイ・メガ・キャノンなど、AE社製MSに時折見られるコンセプト。

0100の系譜

ガンダム Mk-II 陸奪により
ムーバブル・フレームの技術が完成

MSN-00100

百式

デルタガンダムの開発プランを変更し、ムーバブル・フレームを採用しながらも非可変機としたMS。グリプス戦役、第一次ネオ・ジオン戦争で活躍した。



●その後

派生型は多いが直系の後継機はない



●可変量産機

MSN-001A1

デルタプラス

宇宙世紀0090年に開発された、百式（δガンダム）を可変MSとして再設計したMS。ラプラス戦争においてロンド・ベル隊において実戦運用された。

※U.C.0096ごろ実戦投入される

●可変試作機

δ（デルタ）ガンダム

「Z計画」において当初企画されていた、ムーバブル・フレームを用いた可変MS。このMSの開発プランを変更して非可変MSの百式が生まれたため、幻のMSとなってしまった（見取り図すら存在しない）。ただし、後にデルタガンダムはシミュレーションを用いた開発が行われている。

開発計画は
凍結

可変機構を
オミット

●U.C.0090ごろ？

MSN-001

デルタガンダム

「Z計画」で作られる予定だったガンダムを、後年に開発プランの通りで製造していたら、というシミュレーションで作られた仮想のMS（実機は存在しない）。



●可変試作機

MSN-001X

デルタガンダムカイ

デルタガンダムのシミュレーション開発データとデルタプラスの実験データを含めて開発された。サイコミュシステム「ナイトロ」を搭載している。

※U.C.0096ごろに実験か？



時代、モデルを問わず
試験機が作られ続ける

もともと百式は、ベースとなったδ

（デルタ）ガンダムの開発プランを、ムーバブル・フレーム技術の未成熟ゆえに変更した結果生まれた試作MSだ。そのため非可変機として開発されたが、装甲を大胆にオミットして軽量化をはかるといふコンセプトや、当時のアナハイム・エレクトロニクス社が注力したバインダー技術によって汎用性の高い高性能MSとして活躍している。

これらを踏まえたと百式のバリエーションは、大きく二通りに分けられる。一つは、「高性能な非可変MS」という要素を受け継ぎ、発展させようとした機体でMSR・100S百式改やFA・100Sフルアーマー百式改といったMSだ。

しかし、これら改良モデルの派生機は、百式の持つ尖った性能をフラットにし、より一般的な量産MSとして成立させようとして試みられていた。加えて一連の開発は、一年戦争時代から地球連邦軍、ジオン公国軍が連絡と行ってきた派生機開発の手法を、そのまま当てはめたといえるものであった（フルアーマー百式改は、増加装甲の他にメガ粒子砲の装備などが行われており、ZZガンダムのテストベッドとしての側面もあった可能性は

M S N - O

●派生型エース専用機

MSN-100S

百式改量産型

基本的には百式改と同様だが、コストダウンのためカポディ形状は百式に近い。ランドセルの下部スラスト・バインダーも省略された。



●派生型試作機

MSN-100S

百式改

百式の改修機。頭部バルスレーザー、肩部ビーム砲を新設。グリプス戦役で大破した百式を復元する際、この仕様になる予定だったともいわれる。



●派生型陸戦用機

MSK-100S

陸戦用百式改

カラバが運用していた百式の派生機。機体各所に防護・防水処理が施されている。武装はミサイルやグレネードなど実弾弾兵装が多い。

※カラバにより運用



●派生型増加装甲試作機

FA-100S

フルアーマー百式改

増加装甲で全身を強化した百式改。胸部にはメガ粒子砲も内蔵している。重量増を補うため、スラストなどが大幅に強化された。



ある。一部の機体は少数生産されたものの、結局、主力MSのような量産には至らず姿を消した。

もう一つは、百式を本来の可変MSとして成立させたグループだ。

UC0087年当時のムーバブル・フレーム技術では実現できなかったものを、後年（U.C. 0090年頃と推測される）の技術によって実現させた機体群を指し、MSN・001A1デルタプラスやMSN・001Xデルタガンダムカイが該当する。ただ、デルタプラスはラプラス戦争においてロンド・ベル隊によって実験を経験するものの、どちらも少量生産の試作機であり、量産には至っていない（そもそもこれらを量産しようとしていたかが疑問だ）。また、後継機が作られ続け、長く運用されるということもなかった。

結局のところ、高性能な非可変（量産）MSとしてのポジションはジェガンに、可変MSとしてのポジションはリゼルが受け持つこととなり、バインダー式の空間機動性が高いというコンセプトの百式の直接の系譜は途絶えてしまった。

これも非可変機として生まれた百式からデルタガンダムカイまで、百式は常に試験機的な要素が強かったということだ。『Z計画』の完了とともに試験機たる百式が姿を消すのも、ある意味、当然の道程なのかもしれない。

DELTA PLUS

▶ MSN-001A1

デルタプラス

Spec

●頭頂高：19.5m ●本体重●：27.2t ●ジェネレーター出力：2,360kW
●スラスター総推力：92,400kg ●センサー有効半径：16,200m ●装甲材質：ガンダリウム合金
●武装：バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、シールド・ビーム・キャノン、他

主なパイロット



リディ・マーセナス

ロンド・ベル隊のMSパイロットであり、連邦議会の有力量リカルド・マーセナスの嫡子。デルタプラスに搭乗し、パラオ攻防戦やトリントン基地防衛戦に参加した。

スペック比較

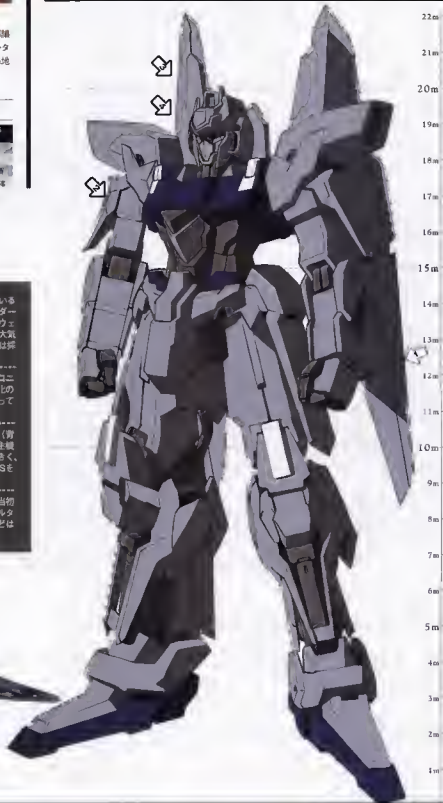
	MSZ-006 Zガンダム	MSN-001A1 デルタプラス	RGZ-95 リゼル
全高	19.5m	19.5m	20.5m
本体重量	28.7t	27.2t	25.0t
ジェネレーター出力	2,020kW	2,360kW	2,220kW
スラスター総推力	112,600kg	92,400kg	81,500kg

➡1 ウイングバインダー。首式から搭載しているバインダーは、Zプラス同様のウイングバインダーへ進化し、MS形態ではAMBACとして機能。ウェイブライダー（飛行形態）では可変翼となり、大気内での運動性を確保している。なお、リゼルでは採用されていない。

➡2 機体モジュール。アナハイム・エレクトロニクス社の独自技術の多用により、この会も進化の機になったとされる。ジェガンと共通規格を持っていた可変翼リゼルとは劇断的。

➡3 スラスター配置。ウイングバインダー（背部）はZプラスA1に似る。胴部のスラスターが主軸で、高圧エンジンの駆動機に近い構造。推力は大きく、サブ・ブライド・システムとして機体上部にMSを載せたまま1G下での飛行が可能。

➡4 変形機構。原型機のデルタガンダムは、当初の設計では変形機構の完成を目指していた。デルタプラスでは、それが実現された。ただ、構造などは実質的にZガンダムに近い。



22m
21m
20m
19m
18m
17m
16m
15m
14m
13m
12m
11m
10m
9m
8m
7m
6m
5m
4m
3m
2m
1m



▲ウェイブライダー形●

技術革新による再設計で生まれ変わったものの……

「Z計画」におけるδ（デルタ）ガンダム（型式番号はMSN・001）は、当初は可変MSとして開発が予定されていた。しかしムバブル・フレーム技術の未成熟から、非可変機へプランが変更され、MSN・001の100百式が開発されることになった。

この百式をベースにして、Z計画で当時描かれながら実現できなかった可変機として再設計されたのがMSN・001A1デルタプラスである。本機の開発時期には、すでに第一次ネオ・ジオン戦争も終結しており、先のZ計画における成果として、MSZ・006 Zガンダム、MSZ・010 Zガンダムといったハイエンドモデルのデルタは一通り揃っていた。

しかしその一方で、Zガンダムの後継機となると、決定打といえる機体は未だ登場していなかった。そのような状況下で、連邦軍はアナハイム・エレクトロニクス（A.E.社）にデルタプラスの試作を発注し、U.C. 0090年に完成した。

これまでZガンダム後継を自指したMSZ・006A1 ZプラスやMSZ・008 ZIIなどの派生機は、Zガンダムが持っていた能力を分解して取捨選択し採用する方式で開発されて

いる。特に大気圏突入能力はコストと必要性を天秤にかけ、オミットされるが多かった。しかし本機では大気圏突入能力が付与され、高い推力による1G下での運動性の確保といった、かつてのZガンダムと同様のコンセプトおよび能力が実現されている。それでいて、Zガンダムのように過度な性能を半ば無理やり持たせる、といった設計ではなかった（当時のA.E.社なら、そういったことも技術的に可能だったはずだ）。

つまりデルタプラスは、旧来のハイエンド機の性能を、進歩した技術で実現する、という目的に沿って開発されたと考えられる。その先には、量産化も念頭に置かれていたはずだ。しかしながら、結局は試作機にとどまり量産化は見送られている。その理由は定かではないが、その後、可変MSのRGZ・95リゼルがU.C. 0095年に制式採用された事実を鑑みるに、「必要以上に高性能でマルチロールな可変MS」というコンセプトが、すでに時代や状況にそぐわなくなっていたということだろう。言い換えれば、リゼルの能力ではとんどのことは事足りたということだ。

試作機のロリアルアウトから6年もの間、本機が活躍する機会がなかったという事実は、それを如実に物語っているのではないだろうか。

Arm and equipment

デルタプラスの搭載兵器

腕部バルカン砲

防空などに使用される60mmバルカン砲。MSではごく標準的な兵器。



ビーム・ライフル

銃身の長いビーム・ライフルはリゼルの流用。ウェイブライダー時でも機体にマウントできる。



シールド

先端にはビーム・キャノンを一門備え、2連装グレネードランチャーと、ビーム・サーベルを収容する。ウェイブライダー時のメインウェポンになるため、防衛装置というよりは変形用のサブユニットといえる。



ビーム・サーベル

シールドに2本収納されている近接格闘用の兵器。ビーム・サーベルの発信器には照射角可変機構が内蔵され、ビーム・ガンとしても機能する。

携行する武装や装備などは、Zプラス系の機体と同様の構成である。ゆえに可変MSの姿目は満たしているといえるだろう。グレネードを装備している点はZガンダムを彷彿とさせ、時代的にも後継の機体というのが譲ける。



デルタプラスとロンド・ベル隊

試験機であるデルタプラスが実戦へ投入されたのは、開発から6年も経過したU.C.0096年のラプラス戦争時のこと（U.C.0093年の第二次ネオ・ジオン戦争時には使用されなかったようだ）。配備先は連邦軍の外郭団体、ロンド・ベル隊だった。同隊は、一種の独立裁量権が与えられた独立部隊ゆえ、本隊の試験機や、特殊機などの補給や整備をまかなえる下地があったこと、加えて機動的な戦力不足が配備の理由として挙げられる。また、機体の性格上、マルチロールの高性能機で、単体で大気圏再突入が可能で活躍の場を獲るという汎用性の高さは、地球圏と宇宙の双方で行動するロンド・ベルにうってつけだったのだろう。



「U.C. 0090年代までZ計画が存在していたことが、Z計画が実現した点には、実は関係なかった。彼らは、本隊の補給や整備をまかなっていた。」



「デルタプラスは、Zガンダムの性能を凌駕するのではなく、Zガンダムの性能を補完する機体として開発された。Zガンダムの性能を凌駕する機体として開発された。」

ZETA GUNDAM

▶ MSZ-006

Zガンダム

Spec

● 頭高: 19.8m ● 本体重量: 28.7t ● 全備重量: 62.3t ● ジェネレーター出力: 2,020kW
 ● スラスター総推力: 112,600kg ● センサー有効半径: 14,000m ● 装甲材質: ガンダリウム合金
 ● 武装: バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、ハイパー・メガ・ランチャー、グレネード・ランチャー×2

主なパイロット

カミーユ・ビダン

Zガンダムのパイロットであり、開発時には可変機構などのアイデアを提供、高いニュータイプ能力を持ち、本機に内蔵されたバイオセンサーの力を最大限に引き出した。



ルー・ルカ

第一次ネオ・ジオン戦争でZガンダムの主パイロットを務めた、エウゴの志願兵でありガンダムチームの一員。チーム内で唯一の正規乗人であり、MS操縦の技量も高い。



スペック比較

	RX-78 ガンダム	MSZ-006 Zガンダム	PMX-003 ジムⅢ
頭高	18.5m	19.8m	24.8m
本体重量	33.4t	28.7t	57.3t
ジェネレーター	1,930kW	2,020kW	1,840kW
スラスター総推力	81,200kg	112,600kg	135,400kg

●1 頭部: 名称は「ガンダム」だが、これまでの「ガンダム」を名付けられたMSとは若干異なる点に注意。V字アンテナは4本になり、形状の細は折り込まれる。

●2 ムーバブル・フレーム: 機体を構成するムーバブル・フレームにより、ウェイブライダーへの複雑な変形も可能となっている。各部関節の可動域も広い。

●3 フライングアーマー: ロングテールスタビライザー: フライングアーマーは大気圏突入を可能とするユニットで、任意にバグジできる。ロングテールスタビライザーは、AMBACによって機体の姿勢を制御する(スラスターも内蔵)。

●ウェイブライダー: 機体各部には大気圏突入のために耐熱処理が施される。また、複雑な可変機構を持ちながらも重量は非可変機であるリック・ディアスや百式より1割強ほど軽く、推力/重量比に優れる。いずれもアナハイム・エレクトロニクス社で造られたノウハウが活かされている。



大気圏突入が可能なる 究極の強襲用MS

アナハイム・エレクトロニクス社が開発し、エウゴに供与した、実戦に耐えうる完成度を持つ初の変型MS。可変MSは変形することにより各スライダのベクトルを同一にし、より高い推力を効率的に得ることを目的としており、グリップス戦役時には陣営を問わず多くの可変MSが作られた。

Zガンダムの場合、オプション装備なしでの単体による大気圏突入能力を付与されているのが大きな特徴だ。エウゴは地球連邦軍「タイターンズ」の内部状態にある。宇宙を活動の中心とするエウゴには、地球に降下し敵拠点を制圧するという必要性が生じるのは自明だ。本機は、そういった事情から一年戦争でジオン公国軍が多量に、高い効果を挙げた宇宙からの空挺降下をMS単体で可能にした。

Zガンダムは、降下作戦時において、率先して大気圏に突入し、味方MS部隊の援護をしつつ、敵の降下部隊を殲滅するという目的において開発されたMSといえる。対するティターンズおよび地球連邦軍は、こうした降下部隊に対抗すべく、ORX・005ギャプランやNRX・0044アッシュマーといった迎撃用可変MSを開発していた。

本機は特殊機であり、究極の強襲用MSといっている。通常のMSが装備するランドセルに代わり、フライングアーマーと呼ばれる大気圏突入用のユニットを装備。このユニットで大気圏突入時に機体下部の圧縮された大気を受け止め、大気圏突入を可能にする。このため機能上、Zガンダムの飛行形態はウェイブライダー（WR）と呼ばれる。

実戦においては、開発時に想定されていたような降下作戦がZガンダムの実戦投入後は行われず、大気圏突入の能力が活かされる機会は少なかった。しかし、可変機ならではの直線方向の機動性や、MS形態において高次元でバランスのとれた空間機動性、そしてパイロットであったカミーユ・ビダンの能力により、アマガマの中核的な戦力となり活躍を見せる。結局のところ、当時のMSにおいて重要だったのは特殊なコンセプトより、高い機動性、運動性と火力であり、Zガンダムは大気圏突入可能型という機能を除いても、その2つを満たしている、時代の要請に応えた機体といえる。

同じくシンプルに運動性と火力を追求し（さらにはいえる）こちらは可変機で（すらない）、グリップス戦役において対MS最強の呼び声もあるPXM・003ジ・Oと本機が死闘を繰り広げることとなったのも、まったくの偶然ではないだろう。

Zガンダムとサイコミュ装備

ニュータイプ力を利用するサイコミュ装備の、MSへの実装には消極的だった地球連邦軍だが、アナハイム・エレクトロニクス（AE）社では機体側面にサイコミュを用いるバイオセンサーを開発。Zガンダム（およびMSZ-010 ZZガンダム）に実装している。多様なMSを試験的に開発する以上、サイコミュ技術の開発もまた進んでくることのできない要素だろう。それでもニュータイプ専用MSとしてZガンダムをパッケージングしなかったのは、専用とすることで逆にMSとしての可能性を狭めてしまうことや、AE社による連邦軍への配量があったかもしれない（むしろは、実験的要素が強い可能性も）。

なお、U.C.0093年にロールアウトした連邦軍初のニュータイプ専用機である、RX-93Vガンダムに搭載されているサイコフレームは、ネオ・ジオンからもたらされたものだが、それを短期間で実装できたのも、こうした密かなサイコミュ研究の成果があればこそ、ではないだろう。



▶グリップス戦役直前の機体では、原々バイオセンサーによる結果を処理したと思われる視覚を見せたZガンダム。時には、敵のビームをはじき返すという、通常では考えられない不可解な現象を引き起こしている。



▶第一次ネオ・ジオン戦争時もエウゴの機体として活躍したZガンダムだが、グリップス戦役のような現象を引き起こす場面は見られなかった。搭乗者のニュータイプ能力に左右されるのか、その点は不明だ。

武器・装備



ビーム・ライフル

百式のビーム・ライフルと比べ約2倍の出力を持つ、大型のビーム・ライフル。エネルギーバック方式で銃身部分が伸縮する。銃口からビームを形成し、銃剣として白兵戦も行える。

ハイ・メガ・ランチャー

ジェネレーターを内蔵している機体型のメガ粒子銃。全長はZガンダムの約1.5倍程度と巨大で特効用のスラスターを内蔵。ビーム・ライフルと比べ破壊力は大がかりで取り回しに難しい兵装。



2連装グレネード・ランチャー

両腕に内蔵されている実体弾兵装。ビーム・ライフルのような主兵装とはならないが、砲撃の牽制などに使用されることが多く、威力や破壊力もそれなりに高く有用である。



ビーム・サーベル

腰部の両サイドアーマーに装備されている。ウェイブライダー形態ではビーム・ガンとしても使用できるが、本来の用途がビーム・サーベルのためビーム砲としての威力は低い。



大気圏突入という特殊な機能を有する本機だが、武装面などはこの時代の標準的なものを装備している傾向。ただし、伸縮式のシールドなどもそれに該当する装備の一つだが、本機の場合、これを失うとウェイブライダー形態には変形できないというデメリットを抱えている。

MSZ-006A 1

Zプラス (A1型)

Spec

● 全高: 19.86m ● 本体重量: 36.2t ● ジェネレーター出力: 2,070kW ● スラスター総推力: 24,200kg ● センサー有効半径: 10,000m
● 装甲材質: ガンダリウム合金 ● 武装: バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・キャノン×2、ビーム・スマートガン



主なパイロット

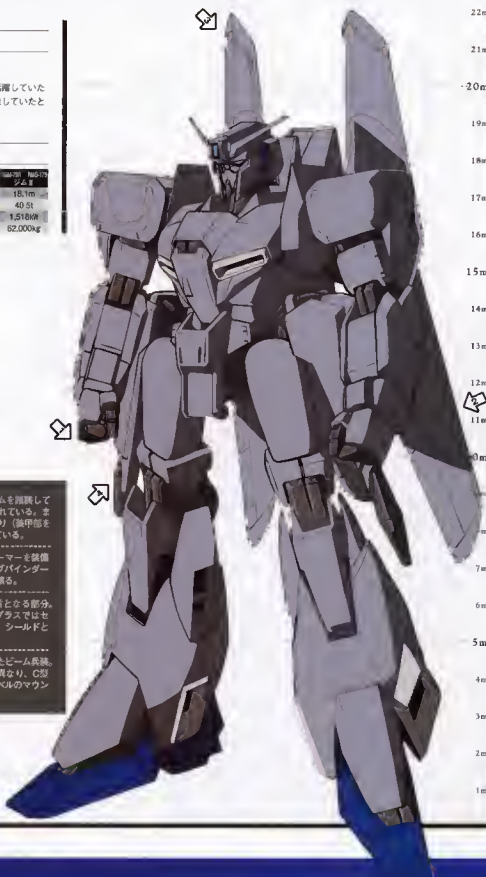
アムロ・レイ

カラバのエース・パイロットとして活躍していたが、一瞬にはZプラスA1型に搭乗していたという。

spec comparison

スペック比較

	MSZ-006 Zガンダム	MSZ-006A1 Zプラス(A1型)	MS-06S ジムⅡ
全高	19.8m	19.86m	18.1m
本体重量	28.7t	36.2t	40.5t
ジェネレーター出力	2,020kW	2,070kW	1,518kW
スラスター総推力	112,600kg	24,200kg	62,000kg



➡1 機体形状。大まかにはZガンダムを模倣しているが、腹部など一部装甲が簡略化されている。また、可動部のクリアランスを大きくとり（装甲部を小さくする）、歩行に適した構造としている。

➡2 リアユニット、フライング・アーマーを装備していたZガンダムと異なり、ウイングバインダーを装備。A1型の総推力はZガンダムに劣る。

➡3 サブユニット。飛行形態で機首となる部分。Zガンダムではシールドだったが、Zプラスではセンサーなどを内蔵したユニットとなり、シールドとしては設計されていない。

➡4 ビーム・キャノン。腹部に内蔵されたビーム兵装。A型とC型ではケーブルの取り回しが異なり、C型は露出が少ない。また、ビーム・サーベルのマウントも兼ねている。

Zガンダムを持つていた能力を抽出し最適化

MSZ-006 Zガンダムは、オプションレスでの単機大気圏突破が可能にするという限定的な用途を想定されて開発されたMSだったが、飛行形態がもたらす高い機動性とMS形態でのバランスの良さ、そしてパイロットであるカミーユ・ビダンの能力により、グリス戦役では大きな戦果を挙げた。端的に述べれば「成功したMS」であり、後継機や派生機の開発が企画されるのもある意味当然といえる。

Zプラスは、そのZガンダムを元に開発された可変MSである。可変機構はZガンダムのものを踏襲しつつもより最適化（簡略化）され、信頼性が向上している。また、その他の特徴としてZプラスは細かく仕様が異なるモデルが非常に多いが、大きく分ければA型系（C型系）に分けることができる。

ZプラスA1型は、カラバがアナハイム・エレクトロニクス（AE）社に発注したZガンダムの派生モデル。カラバは活動の場が地球上であるため、A1型は大気内専用の設計が図られ、大気圏突入能力は備えていない。Zガンダムでは背部のフライング・アーマーを装備する構想だが、A1型（後述のC1型）も基本は同様、はバインダー+変形用サブユニット（飛行形態におい

て機首となる部分）という構成。このバインダーはMS時にはAMBACを引くほか、飛行形態ではZガンダムより大型の可変翼に変えられる。

ただ、これらの改良は飛行形態で戦闘機のように高度な空中戦を行うためのものではなく、MS単機での飛行による長距離機動を目的としたものである。つまり用途としては通常のMS+サブ・フライト・システムに近い。ムパブル、フレーム技術の成熟、最適化によって可変機のコストが下がり、サブ・フライト・システムよりも効率的な運用が可能な状況だったと考えられる。

もう一方のC1型は、地球連邦軍がAE社に宇宙用MSとして発注し、再設計を施した宇宙戦専用機だ。背部にスラスターが追加され、さらにバインダーにプロペラントタンクの増設が可能。なお、突入前に調整を行う必要があるが、C1型は大気圏突入も行うことができる。Zガンダムに近い機体といえるだろう。

このように見ていくと、ZプラスはZガンダムが持つていく必要を分解し、必要に応じて抽出、再設計、最適化した機体といえる。様々な派生機が開発されたのも、要素の分解だけでなく、新しく付与する（組み合わせる）ことによって、様々な可能性を探った結果といえる。



アウドムラとZプラス

カラバには地球各地にある支部の他に、ガルダ級アウドムラという特殊な「移動基地」を有している。地球を周回し飛行を続けるアウドムラにZプラスを中心としたMS部隊を駐留させ、必要とあればアウドムラで現地に向かいつつ適宜MS部隊が発進、初戦にあたるというのが、カラバが想定したZプラスの運用法だろう。Zプラスによって編成されたアウドムラの遊撃部隊はアムロ・レイが率いていたともいわれる。つまり、カラバにとってはそれだけ重要な部隊であったと見ることもできる。カラバがアウドムラを有していなければZプラスは生まれなかったかもしれない。



主なZプラスのバリエーション

Zプラスにはそれぞれタイプが異なる派生機が開発されている。各タイプとも現場の要求に応じて仕様が見直し、その都度、変更されていると考えられる。

ZプラスA1	カラバが運用していたZプラスの中で、最もスタンダードなモデル。
ZプラスA2	胸部にハイ・メガ粒子砲を装備した派生型。A1型から6機が試作された。
ZプラスC1	地球連邦軍が発注した宇宙用のZプラスの中ではスタンダードなモデル。
ZプラスC1/2	胸部をA2型のハイ・メガ粒子砲内蔵タイプに換装したモデル。
ZプラスC4	低軌道から大気圏上層部での運用に特化したモデル。Zガンダム同様のフライング・アーマーを備える。
ZプラスD	飛行形態における運動性を追求したモデル。ウイングバインダー後部および肩サブユニットに小型のフィンを追加。さらに熱核ファンジェット・エンジンも2基追加している。
	一説には件のアムロ・レイは、Zガンダム3号機に搭乗していたとする説があるが、ZプラスA1（テスト機カータイプ）に搭乗していたという説もある。

S Z - 0 0 6

の系譜

MSZ-006-X1~X3

試作機

プロトタイプZガンダム

ムーバブル・フレームの研究のため開発された試作機。リック・ディアスやネモの機體を用いた、都合3機が存在した。



MSZ-006

Zガンダム

アナハイム・エレクトロニクス社のムーバブル・フレーム技術とカミーユ・ビダンのアイデアが昇華した傑作可変MS。



●U.C.0093

RGZ-91

リ・ガズィ

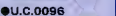
サブ・フライトシステムと可変MSの中間的な、バック・ウェポン・システムというオプション装備で飛行形態も実現。量産はなされなかった。



●U.C.0096

RGZ-95

リゼル



point

ガンダムMSは強さ・フライングアーマーの開発。カミーユ・ビダンのアイデアにより可変モデルスーツとして再設計された。これにより単機での大気圏突入が可能に。

point

Zガンダーと型式番号は異なるが実質的後継機にあたる。わずか3年の間でRGZの型式をもつMSは可変機を究めるものとなる。

point

これ以後は連邦軍の主力MSにおいては、可変機という基盤が主道から完全に外れ、直系の後継機も見られない。

必要な機能とコストを秤にかけて計画されたが……

Zガンダムは、グリプス戦役においてもっとも成功した可変MSのひとつといえる。Zガンダムの特徴を端的に述べると、変形によって推力のベクトルを揃え、高速度・高加速を得られるという点と、フライングアーマーと呼ばれる装備を標準化することで、オプションなしで単機の大気圏突入能力を持つ点。そしてMS形態においても軽量・大パワーという機体の特性からくる、運動性、火力ともにハイレベルであるということが挙げられるだろう。

その一方で、大気圏突入の際、重量となる機体の入念な耐熱処理およびその機能維持、そして複雑な製造・整備コストともに高くなる可変機としての構造、さらにはパイオセンサーなどの搭載により、製造から運用までのトータルでのコストは高くなってしまいう問題点もあった。

Zガンダム（Z計画）の成果としての生産型（普及型）のMS開発においては、これらの問題をどう処理するかというのが常にテーマになっていたといえる。そこには「可変機の量産化」「高性能機の量産化」といった取捨選択があり、それは多くの場合、可変機構を簡略化するか、廃止するといった選択を迫られている。例えばZⅡで

MSZ-006-3

Zガンダム
3号機

カラバが試験的に運用していた機体で、基本仕様はZガンダムと同じだがオプション装備が豊富に用意されている。



MSZ-006C1 Zプラス(C1型)

※地球連邦軍で運用

MSZ-006A1 Zプラス(A1型)

※カラバなどで運用

開発中止

point

機体の開発自体は中止されたZミッドが、航空戦闘機としての操作性の高さや機体の変換機構は、リゼルなどの開発に活かされた可能性もある。

MSZ-007

量産型Z
ガンダム

ZガンダムのMS形態における能力に着眼したプラン。そのため非可変機であり、百式系の量産プランと適合するため計画は回収された。



MSZ-008

Z II

宇宙空間での運用に特化されている。そのため大気圏再突入および重力下での飛行能力は持たない。可変機構はメタスに近い構造を持つ。



大気圏突入
能力を
排除

その背景には、サブ・フライト・システム（汎用のフライングアーマーを含む）の発達と、MSの推進器に関する技術そのものが向上し、非可変機でも十分な運動性能を持たせることができるようになったことがあるだろう（ユニコーンガンダムなどはその例といえる）。しかし、それらサブ・フライト・システムや高機能なスラスターの発展には、当然、可変機開発によって得られたノウハウが活かされているはずだ。その後、姿の消える可変機（宇宙世紀0150年代に登場する機体は別機種）だが、その開発技術は無駄ではなく、機体の設計思想の変化でしかなく、ともいえるのだ。

あれば大気圏突入能力を廃し、ZプラスA1型などでは大気圏内での飛行能力に特化したり、あるいはリ・ガズィのようにバック・ウェポン・システムを採用する、といった手法がとられた。しかしながら、このような後継機候補も、結局決定打にならなかった。宇宙世紀0080年代末〜0090年代にかけて、一定数が生産され実戦において実績を作った可変機はリゼルといえるが、これはZガンダムや、メタスの影響はもろん受けているが、基幹となる機体は通常型であるジェガンといってもいいだろう。さらに、そのリゼルでさえも最終的には系譜が途絶えている。

M E T H U S S

▶ MSA-005

メタス

Spec

- 頭高: 18.1m ● 本体重量: 27.8t ● 全重量: 52.4t ● ジェネレーター出力: 1,640kW
 ● スラスター総推力: 77,000kg ● センサー有効半径: 11,300m ● 装甲材質: ガンダリウム合金
 ● 武装: ビーム・サバール×6、アーム・サバール×2

**Z計画から派生した
A.E.社初の可変MS**

Z計画において、変形機構に関して様々なトリアルを行っていたアナハイム・エレクトロニクス（A.E.）社は、本命である、後にMSZ-006 Zガンダム（この時点ではガンダム）となる機体とは別に、ムーバブル・フレームを用いた変形機構のトリアール・モデルを開発していた。それが本

機である。

メタスの特徴は可変フレームが今までのそれと較べて簡易型であったこと。結果的にZガンダムよりもパワーが低く、構造上格闘戦に向かない機体となり、大気圏も含む広域での使用を前提としたZ計画の要求に対して、MA形態が宇宙空間限定のため、本格的な採用は見送られた。

その一方で、MA形態での宇宙戦闘機としての戦闘力、機動力は優れている。

そのため、主力MSの支援機として十分な性能を有していたこともあり、改修された上で、エウーゴに正式配備された。旗艦アーガマに配備された機体は、Zガンダムや百式などに連じた主戦力の一角を担った。

また百式が扱うメガ・バズーカ・ランチャーへのエネルギー供給を行ったため、高速度を活かして部隊の連絡・偵察用に使われるなど、その能力を発揮しサポート機としても活躍した。

➡1 両腕ユニットから先端までの全高は26mと大きい。艦内格納庫内などでは前方に倒して全高を低くした形態で移動する。

➡2 コンパクトな作りの頭部。メインカメラとなるモアイは水平移動する物と垂直移動する物が搭載されている。

➡3 主翼フレームの一部が露出するなど、直線的な防御力は低い。しかしムーバブル・フレームはガンダリウム合金製で剛性は確保。

➡4 MA形態への変形は、両腕ユニットで関節を覆い、前部と脚部を折りたたみ、腕と足のアーマーを連結して行う。



主なパイロット

レコア・ロンド

元はレジスタンスとして活動し、エウーゴに転向したMSパイロット。ティターンズのバブタマス・シロッコと接触したことで敵化する。グリプス戦役末期に戦死した。



ファ・ユイリィ

カミーユ・ビダンの幼なじみだが、後にエウーゴのMSパイロットとして訓練を受け、メタスを乗機とする。第一次ネオ・ジオン戦争初期までアーガマ陣のクルーとして活躍。



◆ 設定画はP108へ

MSA-005

の系譜

●Z計画における可変機構

○ガンダム系
Zガンダム系

どちらの系統も可変MSとして開発されていたが、これ以外の可変機構を採るべくメタスの開発も進められた。

●派生型試作機

MSA-00SS

メタス改

エウゴから供与されたメタスをカラバが独自に改裝した。背部ユニットにハイ・メガ・キャノンを搭載して火力の強化が図られた。腰部のフレームにもカラバが施されている。

※カラバにより運用

●派生型試作機

MSA-00SK

ガンキャノン・ディテクター

メタスのフレームを利用して試作開発された中距離支援機。両肩にビーム・キャノン2門を搭載し、U.C.0096頃には連邦軍でも一部の機体運用している。

※カラバにより運用

●U.C.0093

RGZ-91 リ・ガズィ

※ロンド・ベル機で運用

●U.C.0096

RGZ-95

リゼル

U.C.0096 年代に活躍した可変 MS。系譜としてはリ・ガズィの後継にあたり、可変機構などは Z II やメタスが参考にあつた。型番号でくれば、かつての Z 計画の申し子といえなくもないが、実質的には「可変するジェガン」という表現が相応しいだろう。

●異なる可変機構の機体

MSA-00S

メタス

※エウゴで運用

point

メタスの概念と異なる機構は存在しないが、異なる可変機構は Z II に取り入れられたほか、U.C.0096 年代になると変更され、リゼルなどに取り入れられるようになる。リゼル自体の位置づけはリ・ガズィの後継にあたる。

メタスの変形機構やフレームは柔軟性が高く、MS の機能拡張にも用いられた。MSA-005K ガンキャノン・ディテクターは、名前こそガンキャノンだが、フレームはメタスのものがベースとなつていて、砲撃時に体を変形させて、より安定した砲撃を可能とするもので、可変機構を利用したユニークな機体といえる。

その中で知られているのが、Z ガンダムにメタス系の変形機構を組み入れた MSZ-008 Z II だ。この機体は、トータルコストに優れ、性能面も Z ガンダムに劣らなかつた。試作機が実戦にも試験投入され、評価は上々だったとされる。ただ結果的には MSZ-010 Z Z ガンダムの開発が優先され、計画そのものは廃止されたという。しかし、この成果は、宇宙世紀 0090 年代の可変機、RGZ-95 リゼルなどにフィードバックされている。

結果的に MSZ-006 Z ガンダムは MS として成功はしたものの、構造の複雑さからくる生産性の悪さ、運用上の問題は抱えていた。一方で様々な問題点があつたメタスの簡易的な変形機構は、熟成させればむしろ将来性があると判断され、積極的に研究開発が行われた。

再評価され次世代で花開いたメタスの基本構想

← 設定画は P108 へ

N E M O

▶ MSA-003

ネモ

Spec

頭頂高：18.5m ◎本体重量：36.2t ◎全備重量：55.6t ◎ジェネレーター出力：1,620kW ◎スラスタ総推力：72,800kg ◎センサー有効半径：10,020m ◎装甲材質：ガンダリウム合金 ◎武装：バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル



ムーバブル・フレイムを 導入した エウゴの主力MS

グリプス戦役直前、ティターンズに対抗して戦力強化を図っていたエウゴは、旧式化が進むジムⅡに代わる主力MSの開発を企図。

本命は最新鋭機であるリック・ディアスや開発中のZガンダムであったが、コストのかかる最新鋭機と並行して、普及型も必要とされていた。こうして

開発されたのが本機だ。

技術的にはジムⅡなどの地球連邦軍系のMSがベースになっており、並行してジオン公国軍の技術がベースになるRMS・108マサイも開発されている（こちらはティターンズが採用）。

ムーバブル・フレイム、ガンダリウム合金など、第二世代MSの要件を満たし、推力の増強も図られるなど、次世代の主力機にふさわしい高い基本性能を獲得している。

また汎用性にも優れ、宇宙空間から大気圏内まで多様な状況での戦闘に対応できた。このためジャブロー侵攻作戦後、地球に残されたネモはカラバに譲渡され、主力を形成している。

このように量産主力機として申し分ない性能と実績を誇るネモは、グリプス戦役後、ラプラス戦争時までの間、エウゴから連邦軍へと引き継がれ、宇宙世紀0090年代後半まで運用された機体も多い。

▶1 メインカメラなど、顔面はジム系と似たデザインを継承。搭載したセンサーなどは強化されている。

▶2 ムーバブル・フレイムの採用で関節の可動範囲も広く、強度面などの基本性能も向上している。

▶3 ネモ専用のスライド式シールドを装備。サイズを縮めることで腕の動作を阻害しないように配慮。

▶4 AEC社は、射撃管制システムやスラスタなどの設計をジム・スナイパーⅡなどで実績のある他社に依頼したといわれる。

← 設定画はP109へ

MSA-003

の系譜

●Z計画機

RMS-099
MSN-00100

可変機が主体の同計画だが、汎用機もいくつか開発が進められている。これらの汎用機のデータ機がネモなどの開発に活かされることになる。

point

ネモが開発されるまでの間に、いくつかの派生機が存在するといわれるが定かではない。なお、戦場にあるネモの正式番号はMSN-004とされる。

●データをフィードバック

MSA-003

ネモ



●ネモと同時期に開発

RMS-108

マラサイ



ジオン系技術をベースにムーバブル・フレーム技術やガンダリウム合金を取り入れた機体。エーゾグ用としてネモより先行して開発が進んでいたが政治取引によってティターンズやネオ・ジオンが使用することになる。

※ティターンズで運用される

●派生型中距離支援機

MSA-004K

ネモⅢ



ネモの火力支援型。左肩部にビーム・キャノン装備。開発はグリプス戦役末期まで遅れたといわれる。一部の機体はU.C.0096年まで運用される機体もあった。

point

ネモの直系に当たる機体機はないがU.C.0096頃まで連邦軍の機体として、一部配備されているものが確認できる。また、技術面などは後の連邦軍の主力機であるジェガンに継承される。

●U.C.0093

RGM-89

ジェガン



主力MSの位置づけを再考
MS恐竜的進化の中のネモ

ジムⅡに代わる主力機として活躍が期待されたネモだったが、グリプス戦役やその後の第一次ネオ・ジオン戦争などにおける活躍や、戦果についての記録は少ない。しかし基本性能の高さは間違いがなく、ネモをベースに改修した支援機が何種か開発されている。

ビーム・キャノンを搭載した支援砲撃機のネモⅢは、グリプス戦役未まで開発が遅れてしまったが、その後、その火力を活かし連邦軍に再編成された機体もあり、基地防衛に配備されるなどしている。

またグリプス戦役で続々登場したティターンズの新型MSに対抗して、ネモの強化が計られたといわれるが、どうやら計画だけで終わったようである。ジムⅡが改良が可能な推力系を中心に強化され、支援機としての道を見いだし、宇宙世紀90年代まで使用されたことから、ネモも近代化改修などで息を繋いだのかもしれない。

技術的にはネモの直系はRGM-89ジェガンであると考えることができるが、ジェガンは軽量化により生産型としては破格の性能を実現している。宇宙世紀80年代のアナハイム・エレクトロニクス社製MS全体の研究成果とも考えることができるだろう。

← 設定画はP109へ

宇宙世紀0088年前後のMSトレンド

モビルスーツ

グリプス戦役初頭、ムーバブル・フレームや全天候型モニターとリニア・シート、そしてガンダリウム合金が採用されたいわゆる第2世代MSが登場し、さらにその進化は短期間で劇的に進んでいく。ここでは宇宙世紀0088年以降にZ計画で誕生した機体群と、それと相まみえた敵陣営のMSを追いつつ、MSのトレンドの推移についてまとめてみた。

Z計画を刺激した 他陣営のMS

グリプス戦役でエウロ・コ陣営のトップモデルであったMSZ-006 Zガンダムだが、敵対する陣営でも可変型のいわゆる第1世代MS(MA)を中心に、様々な新機軸を搭載した機体を投入していた。

特にその中でも、機体制御にサイコミュ・搭載したMRX-009 サイコ・ガンダムなどは、その後続くMSの高出力、高火力化の先駆けといえるかもしれない。いずれにせよこの時代に登場した特殊な機体群のMSは、少数の高性能な機体を必要としていた時代の要請にも適合され、グリプス戦役以後、第一次ネオジオン戦争のわずかな間だが、様々な実験的な要素を帯びつつ、多くの機体が登場することになる。

高出力のビーム兵器と、様々な機能

と装備の付加は、当然、機体の大型化を招く。もちろん、そうした機体を維持するためには大出力かつ大型のジュネレーターが必要だ。そうして機体が大きくなると、機体の積載量、ペイロードが増すのは自明の理といえるだろう。反面、機体の大型化、細密化は、その運用にあたって消耗品を含めた艦艇への搭載スペースや維持運用には負担をかけることになるが、当時の情勢はそれを補ってあまりあるほどの存在価値を、大型MS&MAに見出していたと考えられる。

グリプス戦役末期から第1次ネオジオン戦争にかけて、多くの陣営でユニットタイプ、もしくは強化人間の専用機が次々と開発され、MSは可変型の第3世代MSから、サイコミュ搭載型の第4世代MSへと、その開発は移っていく。

しかし、単にユニットタイプ専用機といつても、この時代はひと括りにする

のが難しい。なぜなら、インコムといつた簡易サイコミュも開発され、ユニットタイプ能力の高低に関わらず、オーレルレンジ攻撃が可能な機体もあれば、先述したサイコ・ガンダムのように、機体制御にサイコミュを用いている機体もあるのだから。

つまり、第4世代MSとは、巷間言われているユニットタイプ専用機を主眼とするのではなく、大パワー、大火力の機体を指し、それらを制御するには、サイコミュによる制御がもっとも合理的だったということも考えられるだろう。もちろん、サイコミュ制御とサイコミュ兵器は近い関係ゆえ、それらがセットで考えられていたとしても、不思議ではない。こうしたMSの世代区分については諸説ある。

ユニットタイプ能力なしに 成立しない高性能機

地球連邦軍系の場合、無線誘導兵器

MS開発の エポックな機体

MRX-009
サイコ・ガンダム



PMX-003
ジ・O



バブテマス シロフコ自身の設計開発による専用機。その外観から想像に難いが、非常に高い機動力を有したユニットタイプ専用機だ。

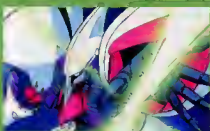
連邦軍のムラサミ研究所で開発された機体。分隊上はMAで運用されたが、モビルスーツという巨大機、兵器搭載や機体制御にサイコミュを応用する。



U.C.0087 ~ 0093年代のMSのスペック比較

機体名	本体重量 (t)	ジェネレーター出力 (kW)	スラスター推力 (kg)	世代
RMS-099 リック・ディアス	32.2t	1833kW	74800kg	2
MSZ-006 Zガンダム	28.7t	2020kW	112600kg	3
PMX-008 ジ・O	57.3t	1840kW	135400kg	4?
AMX-004 キュベレイ	35.2t	1820kW	61600kg	4?
MSZ-010 ZZガンダム	32.7t	7340kW	101000kg	4
AMX-014 ドーベン・ウルフ	36.8t	5250kW	87300kg	4
NZ-000 クイン・マンサ	143.2t	21370kW	287100kg	4
MSN-04 サザビー	30.5t	3960kW	133000kg	4
RX-93 ヴガンダム	27.9t	2980kW	97800kg	4

中でも目を引いているのがクイン・マンサだろう。頭頂高39.2mの巨体ながら分類上はMSのため、破格な性能となっている。もっとも数の上で少数のネオ・ジオンの所属機ゆえ、一騎当千のサイコミュ兵器に頼った戦は否めない。



（ビットやファンネル によるオールレンジ攻撃に代表されるような、サイコミュを兵器として前面に押し出した開発は行っていない。むしろ、機体の制御面を重視していたフシがある。その代表例がバイオセンサードッキング機

のMSZ-010 ZZガンダムだろう。結果的にはニュータイプ専用機であるAMX-004キュベレイやNZ-000クイン・マンサといったサイコミュ兵器を搭載した機体を凌駕し、第四世代MSの頂点に立ったといえる。確かにバイロッドを務めたジドー・アシタのニュータイプ能力の高さもあるが、ZZガンダムは、オールレンジ攻撃のような非効率ともいえる戦法は採らずに、高出力、高火力に振り回されないようサイコミュを機体制御に用いて、どんな任務もこなせるよう、開発を行ったことでの勝利といえるのではないだろうか。

以後は、地球連邦軍系で第四世代の最後の機体、RX-93 ヴガンダムで初めてファンネル系の武器が装備されるが、これすら当時のネオ・ジオン系のファンネルとは、そのコンセプトがかなり違っていた。

そして時代が移るにつれ「ファンネルが最強」という、半ば都市伝説のような既成概念が、ニュータイプ専用機そのものの将来を行き詰らせた、とも考えることができるだろう。

ネオ・ジオンが開発したニュータイプ専用機。ファンネルによるオールレンジ攻撃が可能。サイコガンダムと違い、こちらはMSに分類される。

NZ-000
クイン・マンサ



ネオ・ジオンが開発したニュータイプ専用機。ファンネルによるオールレンジ攻撃が可能。サイコガンダムと違い、こちらはMSに分類される。

AMX-014
ドーベン・ウルフ



機体サイコミュによりインコムを接続した機体、ニュータイプ能力がなくともオールレンジ攻撃が可能。グレイトトの反逆軍で運用された。

AMX-107
パウ



可変MSが多いアークザンクス隊の中で、一部異彩を放つZガンダムと同様の合体可変機。少校が大量運用されている。

AMX-004
キュベレイ



サイコミュをMSサイズに小型化して搭載したニュータイプ専用機。MAN-08エルメスの後継機として、アークスで開発された。

Z Z G U N D A M

▶ MSZ-010

ZZガンダム

Spec

◎留頂高：19.85m ◎本体重量：32.7t ◎全備重量：68.4t ◎ジェネレーター出力：7,340kW
 ◎スラスタ総推力：101,000kg ◎センサー有効半径：16,200m ◎装甲材質：ガンダリウム合金
 ◎武装：ダブルバルカン、ハイパー・ビーム・サーベル、ダブル・ビーム・ライフル、ハイ・メガ・キャノン、ダブル・キャノン、21連装ミサイル・ランチャー×2



主なパイロット

ジュドー・アーシタ

マイ1のシャングリラ・コロニーでジャンク屋を営んでいた少年。偶然したアーガマからMSを盗み出そうとしたのがきっかけで、アーガマのパイロットとなった。Zガンダム、ZZガンダムのパイロットとしてエウゴの主力として戦い、最後はネオ・ジオンのハマーン・カーンと一騎打ちでこれを倒した。



ZZガンダムの戦闘

第一次ネオ・ジオン戦争初期、アクシズ（ネオ・ジオン）のマシュマー・セロ部隊の攻撃を受けるアーガマに緊急配備される。その後、ガンダムチームの中核を成し、エウゴ（連邦軍）の中心戦力として最前線で戦った。大型MSのウィン・マンサや、アクシズを率いるハマーン・カーンのキュベレイなど、数多くの敵を撃破。この時代最強の機体であることを示した。



スペック比較

	ZZガンダム	Zガンダム	ジムⅡ
留頂高	19.85m	19.6m	18.0m
重量	22.7t	25.7t	30.5t
ジェネレーター	7,340kW	2,020kW	1,580kW
機力	101,000kg	112,600kg	81,200kg

◆1 / ガンダムタイプの機体だが、顔部にハイ・メガ・キャノンを搭載する。そのため、他のガンダムにないボリュームを持ったデザインになっている。

◆2 / その全高が20mを超える大型機だが、機体重量はその似に似合わない軽やかな機体で収まっている。後に増加装甲を取り付けている。

◆3 / コクピットには、Zガンダムと同様にバイオセンサーが搭載。ニュータイプが増強することで、ある程度の意思による機体制御が可能。

◆4 / コア・ブロック・システムの導入で、パイロットの生存性を高める。可変機体機構を活かした機体運用で多目的な任務に対応が可能。



極端なコンセプトで 進化を促した重MS

宇宙世紀0083年に実施されたガンダム開発(GP)計画で、ガンダム試作2号機やガンダム試作3号機など、MSに規格外の攻撃力を付加した機体を誕生させたアナハイム・エレクトロニクス社が、その経験を活かしつつ、後のZ計画において、汎用MSの範疇に収めながら、究極の火力強化型、強襲攻撃型の思想を推し進めた機体として開発されたのが本機だ。

同計画の高機動を主眼としたMSZ・006Zガンダムとはかなり性格が異なり、高出力、大火力の決戦兵器に近い性格である。ニュータイプ搭載も視野に入れ、簡易サイコミュの発展型であるハイオセンサーを搭載するなど、この時代のMSのトレンドを取り入れている。まさにMS単体の攻撃力の頂点を極めた機体といっても過言ではないだろう。

本機の第一の特徴は、強力なビーム兵器の搭載である。特に頭部のハイ・メガ・キャノンが当時のMSの兵器としては破格の威力を持ち、携行兵器も軒並み高出力を確保する。これらの高出力の源は、搭載された3基のジェネレーターによる。ただ、ハイ・メガ・キャノンなどは連射ができるものではなく、初戦時には1発撃つただけで



機体が作動不良を起している。このことから、当時としてもかなり無茶な設計をしたことが窺える。

第一の特徴が合体変形機構だ。これは一年戦争時のRX-78ガンダムのコア・プロトック・システム、パワーアップ計画として開発されたGパーツを統合したようなコンセプトといえるだろう。ただ、システムとしては一種の先祖返りともいえ、フルに性能を発揮して運用されたかという疑問も残る。

それでも、この時代における究極のMSといえる性能を確保したのは間違いないことだろう。しかし、標準的なMSサイバズに3基のジェネレーターを搭載し、なおかつその重量は、同時代最軽量といえるMSZ・006Zガンダムの5トン増し程度に収めているのだから、設計面に無理があつたことも否めないだろう。

それは結果的に「フルアーマー化」という名目で、機体自体の強化も余儀なくされ、各部に増加装甲が施された点からも明らかだ。汎用型の空間機動性の重視から、直線方向への機動性重視にシフトしたとも取れる。もしかすると、これが本来の姿かもしれない。



Z Zガンダムの合体変形

上半身ブロックのコア・トップ、下半身ブロックのコア・ベースという戦闘形態での運用が可能。ただし、コア・トップ、コア・ベースともにコア・ファイターをそれぞれ必要とする。ZZガンダムへの合体変形は分割した状態で行われることがほとんど。

余ユニットが合体した巡航形態がGフォートレスだ。この状態からMS形態のZZガンダムへ変形する。ただ、Gフォートレスの状態では運用される場面は少なかった。

ネオ・コア・ファイター

コア・トップ

コア・ベース

Gフォートレス



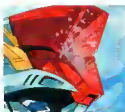
← 設定画はP110へ



Z Zガンダムの搭載兵器

ハイ・メガ・キャノン

頭部のメガ粒子砲で、一発にその出力は50MWとも、コロニー・レーザーの約20%程度の威力を持つといわれるが、定かではない。MSの固定武装としては最強クラスだが、エネルギー消費も大きく、連射使用は難しい。



ダブル・ビーム・ライフル

本機が携帯する主武装で、コア・トップ形態時などには複合ユニットとなる。連射が可能なら威力も高い。



ビーム・キャノン兼 ハイパー・ビーム・サーベル

背部に搭載時はビーム・キャノンとして、マウントから外せば強力なビーム・サーベルとして使用できる。



21連装 ミサイル・ランチャー

ビーム兵器以外に実弾弾も多数搭載する。オプション用装備にコア・トップ用のミサイル・ランチャーも存在する。





●試作機

MSZ-009

プロトタイプ ZZガンダム

ZZガンダムの武装や機能などのテストをするために開発された機体。コア・ブロック・システムは搭載されていないが、機体は上下に分離可能だ。



フルアーマー化による機体強化

生産を図る

●派生型量産試作機

MSZ-013

量産型ZZガンダム

量産化を目指してコストダウンを計った機体。変形合体機構や、コア・ブロック・システムは廃されている。ハイ・メガ・キャノンが発射可能数も2回に制限されている。



MSZ-010

ZZガンダム



●その後

直系となる後継機はなし。合体変形という特殊な機構を備えた機体は、U.C.0150頃に再び登場するが、その因果関係は不明である。

MSZ-010

の系譜

より強力なMSを求め、
進化を続けたZZガンダム

一般的にMSZ-010 ZZガンダムはMSZ-006 Zガンダムの後継機と取られることがあるが、それはおそらく機体コンセプトという意味での後継機ではない。Zガンダムの量産型などがZガンダムのロールアウト後に開発されていることから、実質的な後継機ではないことが分かる。双方ともZ計画から誕生した機体ではあるが、開発コンセプトが大きく違う。機動性に特化したZガンダム、高火力に特化したZZガンダム。その方向性の違いは明らかだ。もし後継とするならば、戦術思想の変化によるものという可能性はある。これは、グリプス戦役時から第一次ネオ・ジオン戦争時、MSに必要なのが、機動性が高火力か、という問題だ。

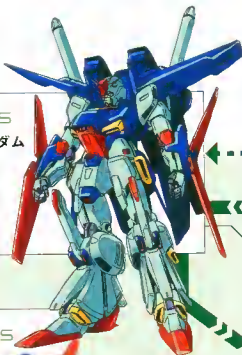
一年戦争時、地球連邦軍のRX-78ガンダムが他より抜きん出ていたのは、ビーム兵器とその装甲の堅牢さが挙げられる。一般的に極度の軽量化を求められる航空機を除き、搭載武器は自身の装甲（防衛力）が耐えられる程度のものを付与されることが多い。だが、MSのビーム兵器の場合、その威力の前には、当時の最高素材であるルナ・チタニウム合金では役不足であった。つまり、敵の砲撃は、受けることは不

●改修強化型

MSZ-010S

強化型ZZガンダム

フルアーマー化のためにZZガンダムに強化改造を施した機体。大型のラウンドセルへ換装し、スラスター推力の向上、機動力のアップを図っている。



MSZ-010S

ZZ-GR

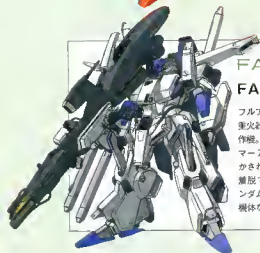


●派生型試作機

FA-010A

FAZZ

フルアーマーZZガンダムの実火器支援システムの運用試作機。このデータはフルアーマーZZガンダムの開発に活かされた。なお、アーマーは兼用できない。本来のZZガンダムの構想とはこのような機体なのかもしれない。



●武装強化案

FX-010

スーパーGフォートレス

Gフォートレスに対しても、ハイパー・メガ・ランチャーやミサイルポッド、プロペラントタンクなどを追加装備するフルアーマー試案が考案された。

point

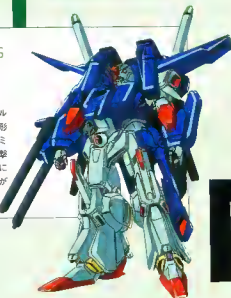
強化型ZZガンダムの機甲そのものは強化されてない。FAZZはフルアーマーZZガンダムを母体としている。そのため、強化型ZZガンダムのような機体は存在しない。

●フルアーマー化

FA-010S

フルアーマーZZガンダム

強化型ZZガンダムにフルアーマー改修を装備した形態。ハイ・メガ粒子砲、ミサイルなどを追加し、攻撃力を強化。また増加装備には対ビームコーティングが施され、防御力も向上。



M

可能で、「避ける」か、「撃たれる前に撃墜する」以外の方法はなかった。

Zガンダム、ZZガンダムともにその両方を追求した機体という意味では共通するが、Zガンダムはどちらかといえば機動性を主軸にし、ZZガンダムは高い攻撃力を主軸にしている。要は、V作戦におけるガンダムとRX-77ガンキャノンの関係に近い。違う点はZZガンダムの方が求められている性能が、より高次元で複雑ということ。

軍縮時代の戦争は、大規模戦闘にはなりにくく、むしろ単機の性能を上げることで状況を打開する。こうした戦術は、デラース紛争を経て実証されており、ゆえにZZガンダムには、究極といえるまでの総合性能が求められたのだろう。

実際、ZZガンダムの派生機に目を向けると、本機とは打って変わって「由緒正しきガンキャノン」といったコンセプトに回帰している。一方、ZZガンダムも高火力に主眼をおくフルアーマーZZガンダムへ改修された。こうしたことから、本機のコンセプト自体、いかに機能が盛り込まれて過激すぎたことがうかがえる。

そして、これ以降になると、高火力を備えたガンキャノンのアイデアを抱えたMSは、標準機体に増加装備する、という新たな形に収束していく。

GUNDAM MARK III

MSF-007

ガンダム Mk-III

Spec

●頭頂高 19.5m ●本体重量 32.1t ●全備重量 48.2t ●ジェネレーター出力 2,022kW
 ●スラスター総推力 107,500kg ●センサー有効半径 11,500m ●装甲材質 ガンダリウム合金
 ●武装 ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、2連装ビーム・キャノン

より人体に近い
ムーバブル・フレームを
搭載した高機動機

ティターンズから奪取したガンダム Mk-IIの解析により、より洗練されたムーバブル・フレーム技術を得たアナハイム・エレクトロニクス（A.E.）社だったが、同時に欠点も顕在化した。それは機体の内部構造が複雑になりやすく、それが、保守性、生産性を下げ

てしまうこと、そしてムーバブル・フレームの採用がかえって機体の強度を低下させてしまう部分もあるというものだった。

そんな中でA.E.社のフジタ博士は、ムーバブル・フレームを単純化するとともに機体強度も上げる研究を開始し、完成させたのがガンダム Mk-IIIとされる。

より人体に近いムーバブル・フレームを搭載し、また関節部なども大幅に

見直され、人間に近い運動を行うことが出来るばかりでなく、スラスターなどの増強により機動力も高まっている。

攻撃力の面では、肩部にビーム・サーベル兼用のビーム・キャノンを2門搭載するなど、火力面も強化されている。しかし、実際のところ、本機は試作段階でも完成したかは、はっきりした記録がなく、機体名は後に伝えられて

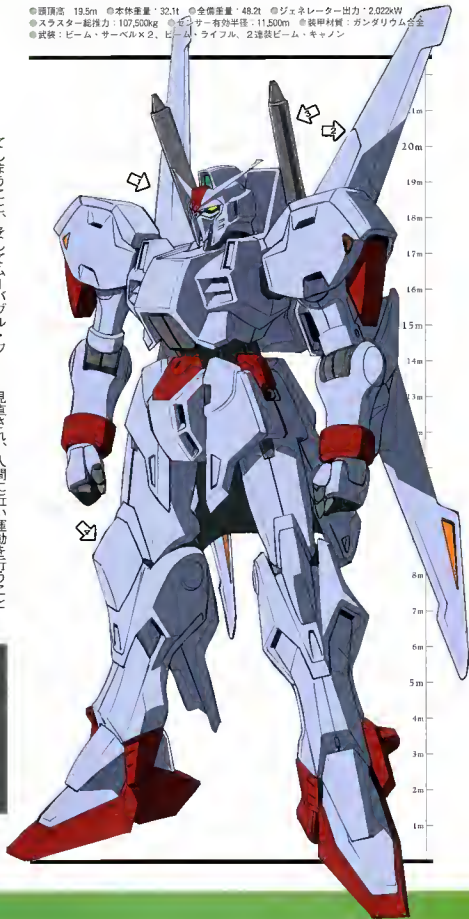
はいるが、単なるベーパープランという説もある。

➡1/ ライトや関節形状はZガンダムに準じる。共通部品が使われる予定だったと推察される。

➡2/ Zガンダム、西式とも違う形状の背部スラスター。AMBACも考慮されていると思われるが、詳細は不明。

➡3/ 肩関節のビーム・キャノン。Zガンダムのビーム・ライフルと同様、ビーム・サーベル兼用が可能。

➡4/ 関節形状は可変MSのようだが、可変機構はない。MS形態での高機動化が計画されていた。



GUNDAM MARK III

FA-0076 III

フルアーマーガンダムMk-III

Spec

● 頭頂高：19.5m ● 本体重量：47.2t ● 全備重量：62.1t ● ジェネレーター出力：3,040kW
 ● スラスター総推力：141,200kg ● センサー有効半径：11,500m ● 装甲材質：ガンダリウム合金
 ● 武装：ヒーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、ハイパー・ビーム・キャノン×2、ビーム・キャノン×2、シールド・キャノン×2、グレナード・ランチャー×2

機動性を生かしつつ、
戦力強化を狙った
フルアーマー装備を搭載

ガンダムMk-IIIの開発が進める中で、火力と防御力を向上させ、機動力は損なわないように追加装甲、フルアーマー・システムも構想されていた。左右の脚部にハイパー・ビーム・キャノン、両肩部にはシールド・キャノンなど多数の火器を搭載することによ

って、強力な砲撃力を獲得している。またこれら追加されたビーム砲には、シールド・キャノンに搭載されたジェネレーターからエネルギー供給されるように設計されていた。一方、追加された装甲にはスラスターが増設され、加えてプロベラントタンクも追加搭載されるなど、増加する重量分を補って元々の高い機動性を維持している。本機はその高い機動性と火力を生か

して、中距離からの砲撃戦で大きな戦果を上げられると期待されていたといわれていた。しかしベースのガンダムMk-IIIの開発がグリップス戦役末期だったこと、想定以上に早く戦況が変化していった影響もあり、本体のガンダムMk-IIIもテスト機製造までは進展したかはっきりしない状況では、本機も設計段階で計画打ち切りとなったと思われる。

➡1/両肩に設置されたシールド・キャノン。攻撃一体の装置で、内部にジェネレーターを搭載する。

➡2/両腕外側のハイパー・ビーム・キャノン。その形状からZガンダムに匹敵する威力が予想される。

➡3/背部には推力補助用の増加スラスター、そして増加プロベラントタンクなどが装備されている。

➡4/フルアーマー装備は、試製時も機体の重量バランスが変化しないように設計されている。



SガンダムとZZガンダムの関係とは？

一年戦争時に活躍した連邦軍のRX-78ガンダムのコンセプトの中で、支援機であるGパーツの要素まで含めて、MS単体の中に搭載しようとして試みたのが、開発コード、θ（シータ）ガンダムこと、MSZ-010 ZZガンダムであった。

このコンセプトをベースにしながら、別の方向性を模索し、オプションパーツによって、さらなる機能の拡張性を狙ったのが、開発コード、イオタガンダムと呼ばれた、MSA-0011 S（スベリオル）ガンダムである。コア・ブロック・システムによる変形合体機能を採用、複数のジェネレーター搭載による大パワーなど、機体構造的にZZガンダムとの共通点も多い。だが、MS単体での能力を高めるZZガンダムに対し、オプションパーツの装備を前提に、多様な任務へ対応できるプラットフォーム、というのがSガンダムのコンセプトだ。

つまり、ZZガンダムの基本的なMSの基本構造や能力の再現を、オプションパーツで最適化する、というのがその発想の源泉と思われる。実際、両機のスペックはよく似ている。

一説にはZZガンダムの基本構造をベースにした再設計機という説もあり、

これはこれで頷ける話でもある。

ニュータイプ機ではないが 第四世代機！

Sガンダムは様々な強化ユニットを装備することで、機動性、武装共にMS単体とは思えない性能が発揮できる。それは、もはや人が乗ることをも排除するかのような値だ。

本機は、世界的には第四世代、すなわちニュータイプ専用機が属する世代に分類されるが、ニュータイプ専用機ではない。これは本機に搭載されている、独自の自律制御システム「ALL-CE」に依るところが大きい。

実際、追加装備の多様さと、機動性の高さから、従来型のパイロットによ

Z計画の徒花！

究極の スペックを誇る Sガンダム



ZZガンダムの開発と同時期、さらに先進性を追求した別コンセプトの機体が誕生した。Z計画の1機とされ、「究極の機体」といわれる割には、アーガマ、ネル・アーガマなどのエウゴの最前線部隊に投入されたわけでもなく、その実体は謎に包まれた部分が多い。また、本機のようなコンセプトを継ぐ機体も後世には残されていない。ここでは、そんなSガンダムについて考察してみよう。





MSA-0011 Sガンダム

無人MS構想の一端から、機体制御システムに自律型のALICEを搭載する。オプションパーツを組み替えることで多様な任務に対応可能だ。

Z計画から生まれたとされるが、機体の型式番号などはMSZではなくMSAというエウロ系のもので、数字も4桁と地味だ。このあたりも本機の出目の複雑さを物語っている。



A-D11IBst Sガンダム ブースター装備型

Ex-Sガンダム用のブースターパックを4基装着した高速巡航、突撃戦闘形態。下半身(Bパーツ)を外し、両肩部にブースターパック2基を換装している。残りは背部に搭載。無理矢理後進したように感じられるが、当初から構想されていた形態だ。加速性能は、高速MAに匹敵する。



MSA-0011ExSt Ex-S Sガンダム

Sガンダムのオプションパーツをすべて装着した形態で、重装甲型という位置づけ。大気圏内から衛星軌道への離脱が可能で、Gクルーザーへ変形する。

本来はGクルーザーが主形態で、MS形態になれる、という方が正しい。実際、航続距離や推力などMSには必要ないほどの高性能ぶりだ。

る機体制御には無理があった。中には、パイロットとガンナー(火器管制担当)という複重型にするという考え方もあっただろうが、採用されたのは自律制御システムであった。

おそらく、追加装備後の本機(Ex・Sガンダム)の機動性は、MSの常識を上回り、当然のことながら、人が操るには困難を極めたはず。そのため、安定した運用には、機械による自律制御を介した方が向いていると判断されたのであろう。そのため、火器管制はほぼフルオートで、操縦さえも無人化を視野に入れられていたという。ミノフスキー粒子下の無人操縦は、通信に

よる制御が不可能ゆえ、自律型の人工知能の搭載が求められた。そう考えると、ALICEに辿り着いたのも自然な発想の帰結だろう。

その反面、作戦の途中変更などの柔軟な対応が難しいことや、咄嗟のトラブルが起きた際、問題が生じるのは明らかで、それゆえにALICEは正式には採用されず、あくまで操縦支援システムとして使用されたようだ。

ALICE搭載機は、経験の少ない者でも熟練パイロットのようにつぶさることができると言われ、それこそが本機を第四世代の機体に分類する理由でもあるのだらう。

Sガンダムに見える軍縮という時代背景

さて、本機の性能に目を向けてみると、その源流は、RX-78GP03ガンダム試作3号機(テンドロビウム)や旧ジオン公国軍のMA・08ビグ・ザムに通じるような、拠点攻略もしくは防衛用の機体であることが分かる。

謎なのは、なぜそのような能力をMS一機に詰め込んだのか? という点だ。大型MAレベルの性能を、ただだか20メートル級の機体に収めることは、設計的にも無理がある(ゆえにオプション追加型を選んだのだらうが

……。結果的に、おそらく対MS戦に限れば、軽量、空間機動性の高いMSZ-006 Zガンダムに分があるのは明らかで、存在意義はどっち付かずで、素直に大型MAを作る方が、総合的には合理的だろう(実際、シャアのネオ・ジオンはそういった方向性を歩んだ)。

それができない軍縮の時代だからこそ、過度のマルチロール型のMSという発想が生まれ、開発にも重きが置かれたのだらう。ただ、惜しむらくは、それらの選択に無理がありすぎたことで、そのことは後の時代に証明されているともいえる。

パイロットよりも優先された ALICEシステム

ALICEとはAdvanced Logistic&in-consequence Cognizing Equipmentの頭文字から名付けられた自律制御システムだ。先天的論理および不条理認識機能とでも訳せば良いのだろうか、つまりは論理だけでは計れない人=パイロットの感情部分も認識し、今までの人工知能には出来ない、高度な機体制御を可能とする目的で開発された。そのためパイロットから学習する必要がある。だが、単なる学習型コンピューターではなく、最終的にはパイロットなしで人間以上に機体を制御して戦う無人艦へ成長するとされていた。

このシステムは極端とされ、機体が破壊されたとしても必ず回収されなければならない、とされていた。Sガンダムに搭載されていたコア・ブロック・システムなども、パイロットの生存性を高めるより、ALICE回収のための安全装置というのが実情だった。

試作機時代は終わりを告げ
ジェガンへと収束する

地球圏全土に及んだ一年戦争から7年、グリプス戦役や第一次ネオ・ジオン戦争が相次いで勃発したが、これらの戦争は一年戦争に比較すれば紛争程度の小規模なものであった。さらに第一次ネオ・ジオン戦争以降には大規模な戦闘が発生しないであらう状況もあった。急速に軍縮が進んでいく。この時代に於ける軍縮とは、すなわち兵器体系の頂点に君臨したMS開発に影響を与えることを意味する。

グリプス戦役、第一次ネオ・ジオン戦争が勃発した宇宙世紀0087年より0088年は、連邦軍内部の開発拠点や研究施設、ジオンから接収した工廠、民間企業アナハイム・エレクトロニクス社といったMS開発施設が乱立し、群雄割拠の時代であった。一年戦争後MS開発製造の基礎技術が確立されたことから、いわば最先端事業といえた。この時代に確立された技術は、長くMSの基礎技術を支えることになる。

その一方で、ハイスペックや先端技術を追求めた結果としてMSの開発コストは急騰。たまたま機体の試作機のために新技術が投入されることも珍しくはなく、異常ともいえる状況が続いていた。だがこうした状況は長くは続かず、前述の軍縮の波もあって、のち

に恐竜的進化と呼ばれるMS群は姿を消していく。

宇宙世紀0090年代初頭のトレンドは、優れたスタンダード機の開発であり、用途に合わせてオプションやバリエーション機を使用するという方向性である。これは多機種が乱立した宇宙世紀0087年・0088年の揺り戻しといえる状況にあったといえる。

こうした状況は連邦軍の象徴であるガンダムも例に漏れず、ロンド・ベル隊のパイロットとして駐屯へ復帰したアムロ・レイの要望でも、「ガンダム」の復活はしばらく実現することはない。現場の声が届かない状況は、連邦政府の腐敗を予感させるものだ。事実、宇宙世紀0120年代以降、連邦政府は緩やかな衰退の道をたどっていく。

僅かながら生き延びたガンダムの系譜は、グリプス戦役で活躍したZガンダムの系統のみとなった。Zガンダムはグリプス戦役期において、コミュニケーションの構築によって活躍を見せたが、本来は強襲型として優秀な側面を持つMS。また大戦中はサブ・フライト・システムとしての能力もクロイズアップされており、その背景にあるのは機動性であり、この点の能力に注目して立ち上げられたのが、RGZの型式で始まるZガンダムの再設計機群である。RGZ・91リ・ガズイは量産性を考慮

して変形機構を排除し、生産性とコストダウンを実現した。RGZ・95リゼルは変形機構を活かす。サブ・フライト・システムのな運用にシフトした。本来の想定とは違うオールラウンドな性能を求められたグリプス戦役期と違い、機動性に特化させることで系統を残した。

ガンダムといえは、時代ごとに最高の性能を与えられる連邦軍の象徴のような側面を持つが、この時代ではそうした状況にも微妙な変化をもたらしている。すでにガンダムの名を冠したMSの開発は、連邦軍からアナハイム・エレクトロニクス社が中心となっており、「ガンダム」をあらわすニュアンスも微妙な変化を遂げていた。

第二次ネオ・ジオン戦争期、アムロの要望によって完成したRX・93Vガンダムであったが、同機のコクピットフレームに採用されたサイコフレームは、ネオ・ジオンからの技術供与によるもの。サイコフレームをコクピットフレームに配するという構造を採用したVガンダムとMSN・04サザビーは、強い関連性のある機体といえる。この時代、MSの技術体系はすでに混沌としており、阿鼻は連邦系・ジオン系という垣根が消滅したことを現す象徴的な機体であるといえるかもしれない。そして宇宙世紀0096年、Vガンダムとサザビーに用いられたサイコフ

レームは、ユニコーンガンダムのムーバブル・フレームを構築するフル・サイコフレームとして発展。連邦軍再編の一端である「UC計画」にガンダムタイプが採用されたのは、ジオニズムを対する「象徴としてのガンダム」を活用するためのニュアンスが感じとられ、何とも皮肉な話である。

以降のMS

宇宙世紀0093年以降のMSカテゴリーとその状況

ガンダム系MS群

軍縮の流れは、かつて連邦軍の勝利の象徴であったガンダムにも影響を及ぼした。高コスト化を招くハイエンド機の開発が凍結された宇宙世紀0090年代前半には、ガンダムの開発すらも停滞。

シャアが復活した第二次ネオ ジオン戦争でも、連邦軍上層部は理解を示さずとせずロンド ベル熊の再三の要求にもかかわらずギリギリまでガンダムの開発にGOサインを出そうとはしなかった。

一方で象徴としてのガンダムを利用する動きは、連邦軍軍備再編計画である「UC計画」でも見てとれ、ジオニズムを転換するための先兵として「ガンダム」の存在が利用されている。

可変MS群

MSにとって地球上における移動力の拡大は、大きなテーマだった。ジオン公国軍が地上で戦北した背景の大きな要因として MSの移動力の向上も無視できないからだ。こうした状況を受け、グリプス戦役期には様々なタイプの可変MSが登場した。だが操縦の難易度や生産コスト、複雑な構造によるランニングコストなどの問題も多く、可変MSの時代は短期間に終わった。こうした中、僅かに生き残った可変MSの系譜がZガンダムの流れだ。Zガンダムの強襲能力に着想したリガズィ、サブ フライト システムとしての能力に着目したリゼルなどの再設計機が登場している。それでも宇宙世紀0100年代には、こうした系統も絶滅してしまう。

主力MS群

グリプス戦役、第二次ネオ ジオン戦争という2つの紛争時代、地球連邦軍では内戦の影響などもあり、明確な主力機がジムIIのまゝ数年が過ぎた。これには政府内と各工場の競争などの問題もあり、明確な主力機が定まらないまま、試作機の乱立という状態であった。こうした時代の反省から、宇宙世紀0080年代後半から次世代のスタンダードMSの主力が進み、アナハイム エレクトロニクス社による初のRGMシリーズ、ジェガンが開発される。一年戦争からグリプス戦役、第二次ネオ ジオン戦争で確立した技術の蓄えがジェガンといえるかもしれない。宇宙世紀0090年代にはジムIIから主力機の座はジェガンへ移行しつつある。



巨大MA群

グリプス戦役、第二次ネオ ジオン戦争におけるトレンドであった巨大MA 群も高コスト化を招く存在として 勢いを失っていた。だが物量の少ない機動力は、1機で数十機分の活躍をこなす切り札として機能し、シャア率いる新生ネオ ジオンではα アジール、「抽付き」ではクイン マンサの流れを受け継ぐクシャトリヤが一定の成果を上げていた。メンテナンスや運用面のコスト問題さえなければ、十分効果的な活躍をする存在である。



再編成を促される連邦軍のMS群 宇宙世紀0093年

恐竜的進化と呼ばれる時代を経て、急速な軍縮化が進む宇宙世紀0090年代。試作MSが群雄割拠した時代は終わりを告げ、次世代のスタンダード機が主力MSの座を獲得した。この流れは、ガンダムにも波及し、その位置づけはハイエンド機の代名詞から連邦軍の象徴としての立場となっていく。



主なパイロット



アムロレイ

一年戦争、グリプス戦役と活躍した伝説のエース。ロンド・ベルのMS部隊長を務める。νガンダムが完成するまでの間は、リ・ガズィに搭乗していた。フィス・ルナ落下阻止作戦では、極上のヤクト・ドーガを追い詰める戦いを繰り広げた。



ケーラ・スウ

ロンド・ベル隊の女性パイロット。アムロに次ぐエースで、以前からリ・ガズィに興味を示すなど、高性能のMSを欲していた。リ・ガズィを手に入れ、アクスズへの先鋒として出撃するも、ギュネイの人質となり、命を落とす。

single comparison



スペック比較

	MS-05 Zガンダム	RGZ-91 リ・ガズィ	MS-06 ヤクトドーガ
総高	19.0m	20.5m	21.0m
本体重量	20.7t	24.7t	28.0t
ジェネレーター	2,020kW	2,550kW	3,340kW
スラスター総出力	112,600kg	67,600kg	82,000kg

➡1/頭部・アンテナ：ガンダムのようなツインアイカメラを装備するが、V字アンテナは装備されず、外観的印象はガンダムタイプからやや離れる。

➡2/胸部：外観のシルエットは、基礎技術のベースとなったZガンダムのシルエットを色濃く残している。だが、変形機退避機ではないために、Zガンダムのように胸部が大きく展開するような構造ではない。

➡3/胸部：リ・ガズィは同じZガンダムの再設計機であるリゼールよりも、Zガンダムの図形を強く踏襲。胴体もそのことが見え、グレネードランチャーを搭載するなど、共通性が見てとれる。

➡4/関節：胸部もZガンダムのシルエットに類似する。バック・ウェポンシステムとの合作時には、陸奥の可変機構により胸部、つま先が折りたたまれる。

RGZ-91

リ・ガズィ

Spec

●総高：20.5m ●本体重量：24.7t ●全備重量：55.2t ●ジェネレーター出力：2,550kW
●スラスター総出力：67,600kg (14,200kg×2、11,000kg×2、8,600kg×2)
●センサー有効半径：18,900m ●装甲材質：ガンダリウム合金
●武装：バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、2連装グレネード・ランチャー×2、ハンドグレネード×3、バック・ウェポン・システム、他



分離方式を採用した Zガンダム再設計機

RGZ・91リ・ガズィは、Zガンダムのコンセプトを元に、量産化を視野に入れて開発されたMSである。そのため名称もREFINE（REFINED）AND AMZ（AMZ）と、Zガンダムの再設計機を示すものとなっている。

とはいえZガンダムの量産化は、複雑な構造と、生産コストがネックとなっていた。Zガンダムという大きな影響力のあつた機体を量産するというコンセプト自体は、ZプラスやRGZ・95リゼルをはじめ、多くの可能性が生まれており、きわめて有効といえた。その中で、リ・ガズィが採用したコンセプトは、変形構造の核となるユニットを別体化したバック・ウェポン・システム（BWS）であつた。

BWSは武装（メガ・ビーム・キャノン1門、ビーム・キャノン2門）+プロペラント+本体で構成され、リ・ガズィと合体することで、かつてのウェイブライダーを思わせる宇宙戦闘機型のシルエットになる。直接スラスターは装備されていないが、BWSとの合体によってスラスター噴射を一方に集中させ、可変MSの構造と同じメカニズムを実現する。

可変MSの構造を簡易にしつつ、Zガンダムのメカニズムを最大限に活かすこ

と。それがリ・ガズィに課せられたテーマだったのかもしれない。Zガンダムの長所といえば、ウェイブライダー形態による機動性と、ハイ・メガ・ランチャーの攻撃力だったからだ。

Zガンダムは基礎的な機体性能が高かつたこともあって、オールラウンダーのようには扱われたが、本来は高速移動を活かした遠襲（大気圏外からの強襲も想定）や、長射程の攻撃能力による要害、対艦戦に適した機体といつていい。ビーム・キャノンの搭載や、作戦行動時間の増大を目指したプロペラントタンクの搭載など、Zガンダムのメリットは、BWSの構想に集約されている。一方で離脱式のBWSは、状況に応じてMS・ウェイブライダー形態の選択はできず、BWS排除後は一般的なMSに向かわりやすい機体となつてしまふ点は否めない。

またリ・ガズィが前線へ投入された宇宙世紀0090年代では、すでにZガンダムの性能自体も過去のものとなり、ジェガン、ギフ・ドーガなどと比べて、ハイエンド機というには性能的アドバンテージはわずかだ。

それでも性能的に不利なネオ・ジオンのサイコミュ搭載型最新MS、ヤクト・ドーガ、強化人間のギニュー・ガストと互角に渡り合えたのは、パイロットが「アムロ・レイだった」ことが、最大の理由かもしれない。

最大の特長であるバック・ウェポン・システム

バック・ウェポン・システムは、変形機構を外ユニット化したものといえ、リ・ガズィ本体に装備することで、Zガンダムのウェイブライダー形態を彷彿とさせる形態となる。だが大気圏内再突入能力はなく、Zガンダムの強襲能力に類した再設計機であることがうかがえる。アウシズへの先鋒を務めたシーンからも、その運用方法が浮かび上がってくる。ユニット自体は背面から上半身を覆うもので、胸部をはじめ機体前面はシールドでカバーする構成となっている。ユニット自体は、武装、プロペラントが装備されているのみで、推進用のスラスターなどは設置されていない。だが、可変MSの概念がそうだったように、機体のスラスターを一定方向に固定することで推力を集中させ、宇宙戦闘機的な運用が可能となっている。



← 設定画はP114へ

リ・ガズィの搭載兵器

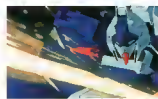
ビーム・ライフル

ジェガンなどが使う次世代の標準ライフルと違い、Zガンダムのビーム・ライフルの発展形である。



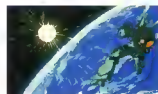
ビーム・サーベル

これもジェガンなどの標準装備とは違う専用装備で、使用時に両部分が開く。ランドセルの左右に1本ずつ収納されている。



グレナード・ランチャー

前胸部それぞれに2本ずつ収納されている。腰部にもオプションでグレナード・ランチャーが装備可能である。



大口徑ビーム・キャノン

バック・ウェポン・システムに装備される固定武装。大口徑ビーム・キャノンは、かつてのハイ・メガランチャーを思わせ、艦船にも大ダメージを与えることが可能である。



主なパイロット



アムロ・レイ

一年戦争で活躍した伝説的エースパイロットだったが、力を尽した連邦政府によって幽閉される。その後、連邦軍に復帰し、ロンド・ペルのエースパイロットに。だがその力に見合うMSがなく、νガンダムの開発に携わる。



スペック比較

機体名	機高	機重	出力	推進力
RX-93	22.0m	27.9t	2,980kW	97,800kg
νガンダム	22.0m	27.9t	2,980kW	97,800kg
MSM-06	20.0m	20.0t	2,000kW	80,000kg

スラスター総出力 67,600kg 97,800kg 133,000kg

V G U N D A M

▶RX-93

νガンダム

Spec

●頭頂高：22.0m ●本体重量：27.9t ●全備重量 63.0t ●ジェネレーター出力：2,980kW
●スラスター総出力：97,800kg (18,300kg×4、12,300kg×2) ●センサー有効半径 21,300m
●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、ニュー・ハイパー・バズーカ、フィン・ファンネル×6、ビーム・キャノン、ミサイル×4



22m
21m
20m
19m
18m
17m
16m
15m
14m
13m
12m
11m
10m
9m
8m
7m
6m
5m
4m
3m
2m
1m

➡1/頭部：フインアイカメラにV字アンテナ、バルカンポッドなど、重型的なパーツ構成が「ガンダム」を形作るシャアとの違いを際立て、華を出された形状なのだろうか。

➡2/ランドセル：フィン・ファンネルやニュー・ハイパー・バズーカなどのウェポンラックも兼ねる。フィン・ファンネル装備の都合で、ビーム・サーベルは左腕にのみ装備。予備のサーベルは左腕に装備される。

➡3/コクピット：シャアによりもたらされたサイコフレームを採用。これまでのサイコミュシステムよりも、優れた性能を実現する。シャアは「備わらないMS」と戦って勝利した意味合いはないと述べて、アムロは初めて同技術を用いたMS、エレクトロニクス社のνガンダム開発チームにもたらした。

➡4/ボディ：可変システムなど、特殊な装備はない。これは時代的にMS本体のスペック向上に主眼が置かれた時代であり、若てはたことよりも単純に性能アップを目指した結果であろう。これはジェガンにも見えることで、νガンダムにもジェガンの基礎技術やパーツが使用されていることがうかがえる。

初のアムロ自身が携わった 初の特用ガンダム

連邦軍のエースパイロット、アムロ・レイ自身が開発に加わって完成した、初のニュータイプ専用ガンダム。開発はアムロの要請によってアナハイム・エレクトロニクス社の月のフォン・ブラウン工場が進められており、ロンド・ベルへと配備された。まさにアムロのために誕生したガンダムといえる。

特徴として、ガンダムタイプとしては初のサイコミュ兵器であるフィン・ファンネルを搭載している点にある。フィン・ファンネルは、その名称とおりフィン状のファンネルで、ジェネレーターを内蔵し、通常のファンネルよりも大型だ。そのため搭載数も6基と少なめだが、通常のファンネルよりも強力なビームを放ち、サイコミュに連動してバリアを展開するなど防御機能も備えている。

ニュータイプ専用装備を効率よく運用するために、ネオ・ジオンからもらったサイコフレームが投入されているのもエポックだ。サイコミュチップを誘込んだ金属サイコフレームをコクピット周辺のフレームに採用することで、サイコミュの反応速度や機体の追従性向上に効果を発揮し、実験の記録でそれ以上の効果も見られた。このようにレガンダムは先端の装備

を搭載しているが、その開発には紆余曲折があった。宇宙世紀0090年代は、無数の実験機が猛威を奮ったグリプス戦役期と違い、連邦政府内にも軍縮の意識が強まりつつあった。だがシヤアの復活に際し、現場では強くハイエンドMSの投入が望まれていた。グリプス戦役期のMS、Zガンダムの再設計機、リ・ガズイの配備にすら難色を示す状況下で、ようやく開発がスタートした機体であった。わずか3カ月で完成させたという背景には、いち早く美談への導入を求めるほかにも、十分な予算が確保できなかったという理由があったのかもしれない。

充実したニュータイプ用装備、その反面、苦しい台所事情を加味すると、レガンダムは既存の、もしくは研究開発中の機体をベースにしつつ、それをさらにサイコミュとファンネルに特化させた機体であったという可能性も充分あるだろう。それは同時期の同クラスの機体であるサザビーよりもカトラグスベック上で若干劣ることからも伺える。

実験投入後、レガンダムはシヤア搭乗のサザビーを撃破し、シヤアの反乱を収束させるきっかけを生む機体となった。さらに地球へ落下していくアクシズを、サイコフレームの共鳴現象によって押し返すなど、MSという存在の領域を超えた能力を発揮した。



フィン・ファンネルの効果

レガンダムが装備するフィン・ファンネルは、ボディを折りたたんだコの字の状態でビームを放つなど、その構造からも特殊な装備であることがわかる。一般的なファンネルより大型化しているのは、ジェネレーターを搭載しているためで、稼働時間が長く、出力も向上している。また、パイロットの危機を感じると、バリアを展開することも可能である。ヤクト・ドーガとα・アジールという2機のニュータイプ専用機を相手にした際には、アムロが危機を感じた瞬間、5機のフィン・ファンネルがピラミッド状のバリアを形成。レガンダムを攻撃から守った。一方、通常のファンネルのように機体に戻して充電することはできず、また大型ゆえに攻撃を受けやすいというデメリットも存在する。



◆ 設定画はP116へ

レガンダムの搭載兵器



ビーム・ライフル

レガンダム専用ライフル。長射程からも圧倒的な威力を誇り、艦船の主砲なみに称される。低出力の連射モードに切り替えることで、フレキシブルな運用が可能。



フィン・ファンネル

加熱板を思わせる板状のファンネル。従来型よりもかなり大型で、活動時間やビーム出力も高い。大型ゆえにデメリットも多いが、防衛用としても機能するなど、これまでのファンネルの常識を超えた使用法が可能。



ニュー・ハイパー・バズーカ

大型実弾兵器。背面ランドセルにマウント可能。マウント状態でも発射することができる。

シールド

防御用装備としての機能だけでなく、ビーム・キャノンとミサイル4発を装備する。

ビーム・サーベル

ランドセルに装備されるメイン装備と、左腕に装備される予備サーベルがある。メインのサーベルは、ジェガン等が使用する標準装備とは異なり、高出力の専用品。



主なパイロット



リディ マーセナス

ロンド ベルに所属するパイロット。連邦政府初代首相ローナン マーセナスの家系であるマーセナス家の嫡子。家に対する反発から家系となったリゼルをはじめ、ガンダムの系譜を継ぐMSを乗り継いでいく。



スペック比較

	旧MS-06S ズガンダム	RGZ-95 リゼル	MS-06S クシャトリヤ
全高	19.2m	20.5m	22.3m
全幅	28.4m	25.8m	20.7m
全重量	1,870kg	2,220kg	16,540kg
ジェネレーター出力	62,000W	81,500W	197,000W

➡1. 頭部：頭部形状はZガンダムを思わせるが、センサーユニットなどのパーツ類をジェガンと共通化することでコストダウンを実現している。除暴機などのC型は出力の影響か、もしくは別機種のためか、各部センサー色が一般機とは異なる。

➡2. 胴部：メタスの変形機構を継承するも、メインパイプ3本で接続された断面構造は改められ、Zガンダム+メタスのメリットを、あわせもつような構造となっている。

➡3. 腕部：上腕部にはグレネード・ランチャーを装備。Zガンダムの系譜を感じさせるポイントになっている。

➡4. 脚部：Zガンダムのシルエットを思わせる脚部には、メインジェネレーターが収められている。だが構造はZガンダムとは大きく異なり、膝を折りたんで変形する。

R e z e L

RGZ-95

リゼル

Spec

●全高：20.5m ●全幅：25.8m ●全重量：57.6t ●ジェネレーター出力：2,220kW
●スラスター総推力：81,500kg ●センサー有効半径：14,920m ●装甲材質：ガンダリウム合金
●武装：バルカン砲×2、ビームサーフ、ビームライフル、グレネードランチャー、シールド内蔵式ビームキャノン、他



Zの系譜を継ぐ もう1つの再設計機

グリップス戦役期に活躍したZガンダムは、その基礎性能の高さから様々な手法で量産化が試みられてきた。しかしさらなる軍縮の波にさらされた宇宙世紀090年代において、通常タイプのMSよりも高コスト化につながりやすい可変MSを継続するためには、構造から使用パーツをはじめとする全面的な見直しが必要であった。可変MSを巡る状況は、新たなフェーズに突入しようとしていたのだ。

リゼールリファイン・リーター、ガンダム、エスコート、リーター、ガンダム（Refine Gate Gundam Escort Leader）も、そうした新時代の対応を迫られた可変MSの1機である。同じZガンダムの再設計機であるRGZ-91リ、ガズィが分離方式で変形機構をオミットしたケリスと違い、変形システムの見直しによる低コスト化を目指した。

ベースとなつたのはZ計画で提案されたZガンダムの発展機ZⅡ。ウェイブライダー形態への変形に、メタス方式を採用することで変形の簡略化を計った機体である。この構造を継承しつつ、同時期の主力機であるシエガンと主要パーツの共通化を図ることで、Zガンダムの高コスト化から脱却。量

産が実現し、宇宙世紀096年には、ロンド・ベルをはじめとする様々な部隊に配備されるに至った。

また、ナーバスの操縦性を持つZ系の機体を一般兵でも扱えるように、あえて限界性能を引き下げる措置が取られていたが、RGZ-95Cでは、こうしたデチューンからリゼールを解き放ち、スラスターのリミッター上限などを再調整。フレーム補強などが行われ、Z系本来の機動性を発揮できる機体として記憶されたい。背面ユニットは一般機と異なり、大気圏内にも対応するウィングバイナード・装備型に換装。メガ、ビーム、ランチャーを装備した特別仕様となっている。

リゼールが「生き残ることができた」背景には、運用面を重視したことが大きい。シエガンが主力MSとなつたこの時代、MSに様々な機能を内包するのがではなく、装備や武装面で補うのが一般的だ。移動力に関しては、機体自体にスラスターやプロペラントを内蔵せずに、サブ、フライト、システムを活用する方式が採られた。

そのためリゼールは、単体としてのスปีド型の可変機という役目だけでなく、シエガンのサブ、フライト・システムとして機能することで、総体的により柔軟かつ効率的な運用が可能となった。ある意味、可変機の新世代機といえることができるだろう。



バックパックから見るリゼールの運用

リゼールは数種類のバックパックやオプションが用意され、フレキシブルな運用が可能となっている。リゼールが標準装備しているバックパックは主に宇宙用をメインとしたもの。一方で隊長機が使用するウィング・バイナードを装備したタイプは、大気圏内での飛行も可能となっている。大気圏再突入能力はオミットされているが、バリエーションなどの進化を加味したうえで、オミットされたと考えるのが妥当だろう。こうした用途に応じてバックパックを換装するという構造も、Zガンダムからのコストダウンを実現した要因となっている。バックパックにはそれぞれMS用のグリップが取り付けられており、ほとんどのバリエーションにサブ、フライト・システムとしての運用が想定されていることがうかがえる。



← 設定画はP118へ

Arms and equipment

リゼールの搭乗兵器

ビーム、ライフル

Zガンダムの系譜を受け継ぐロング形状のライフル。通常モードと高出力モードなどの切り替えが可能。高出力時は、その発射時の様子からギロチン・バーストと称される。また先端部にビーム刃が発生することができる。



シールド ビーム・キャノン

先端部分に3点バースト方式のビーム・キャノンを搭載。変形時の武装としても活躍する。また近接戦闘時には、シールド後部のブレードを武器として使用できる。



ビーム・サーベル

前腕部に2機ずつ装備されている。グレネードランチャーとの選択装備。



グレネード・ランチャー

前腕に2発ずつ搭載されている。Zガンダムやリ、ガズィにも搭載された実弾兵器。



メガ、ビーム、ランチャー

主に隊長機が使用する奥座敷支援ビーム砲。本体はユニットに搭載され、ランチャーを保持すると同時に、MS本体のジェネレーターからのエネルギー供給を行う。そのため連続して高出力のビームを放つことが可能。





主なパイロット



ケーラ・スウ

ロンド・ベルのMS隊に所属する女性パイロット。当初はジェガンに搭乗していたが、その機体には特にパーソナルカラーやカスタマイズなどは施されていない模様。リ・ガズィに乗るのはアムロがVガンダムへ乗り換えてからのこと。



ハサウェイ・ノア

ブライト・ノアの息子。無断でラー・カイラムに乗り込み、クェス・バラヤを殺めたいという思いでジェガンで出撃した。正統のパイロット訓練は受けていないが、シミュレーションや実戦でも生き残るなど、非凡な才能を見せている。



スペック比較

	RGM-89 ジェガン	RGM-89 ジェガン2	AMS-119 ギア・ドム2
全高	19.0m	19.0m	20.0m
本体重量	38.6t	21.3t	23.0t
ジェネレーター	1,560kW	1,870kW	2,160kW
スラスター総出力	61,200kg	61,400kg	54,000kg

➡1/ 頭部：ジム系を思わせるセンサーユニット。リゼールなど様々な機体と共用化される。センサー内部は、ジム系のようなツインアイではなく、シングルカメラ方式となっている。

➡2/ 胸部：多く運用されるジェガンは、胸部によってマイナーチェンジが施される。初期型からD型になるにあたっては、胸部や腰部などに増加装甲マウントが追加されている。

➡3/ バックパック：ガンダムMk11からの発展を思わせるバックパック形状。スラスターは高出力のメインスラスターに、サブスラスターが組み合わされる。

➡4/ 脚部：股関節の装甲形状は縮小化が行われており、シルエットはジム系とは大きく異なっている。

▶ RGM-89

ジェガン

Spec

●頭頂高：19.0m ●本体重量：21.3t ●全備重量：47.3t ●ジェネレーター出力：1,870kW
●スラスター総出力：61,400kg ●センサー有効半径：14,200m ●装甲材質：チタン合金セラミック複合材 ●武装：バルカン砲、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ハンド・グレナード×3、2連装ミサイルランチャー×2



新世代のスタンダードを 目指す量産機

宇宙世紀0090年代初頭に採用された、新世代の量産型MS。

本機の開発において大きな転換点となったのは、RGM-79ジムの系譜にあるRGMナンバの機体を、アナハイム・エレクトロニクス社が手掛けたことである。同社はグリプス戦役期に、ネモを送り出しているが、これはリック・ディアス由来のジオン系技術が盛り込まれており、純粋なジム系の機体とはいえなかった。

次の世代に求められるスタンダードMSとはなにか？ アナハイム・エレクトロニクス社は、宇宙世紀0090年代にあるべきRGM系の姿と向き合うことになる。

RGM-89ジェガンが開発された宇宙世紀0080年代から0090年代初頭には、シャアの反乱となる第二次ネオ・ジオン戦争以外の目立った戦争はなく、連邦軍は軍縮化に意識を向けていた。シャアが興した新生ネオ・ジオンには、以前に比べて圧倒的に小さな組織であり、戦闘の規模がより小規模化したことも影響しているのかもしれない。

また、多数の優秀なパイロットが失われたことで、ハイエンドなエース機よりも、MSの基本性能を底上げする

方向性へ向かったとしても不思議ではない。誰にでも扱いやすく、結果として部隊の平均的な戦闘能力を向上させる機体……。こうした流れの中で登場したジェガンは、いわばベストオブスタンダードを目指した機体だった。こうした方向性は新生ネオ・ジオンが使用するAMS-119ギラ、ドッグも同様であり、第二次ネオ・ジオン戦争で恐竜の進化を遂げた高出力、高火力を誇るハイパワームス群は消えつつあった。構面でも、装甲材質などにはチタン合金セラミック複合材へ変更するなど、積極的なコストダウンが図られる一方、機体設計自体は大幅な進化を遂げており、本体重量はジム系の半分程度という、大幅な軽量化を実現している。

一方、運用面に関しては、ベース、ジャバートとの運動を基本としている点も注目される。これはスラスター数や搭載フロベリアルト量の増大を防ぎ、不必要な高出力化を避けるための措置であったと考えられる。

操縦性もフレンドリーで、パイロットは短い訓練期間でも機体に習熟したことは、ハサウェイが僅かに経験で実戦へ赴いたことからもうかがえる。その奇をてらわないコンセプトと余裕のある設計は改良の余地も多く、様々なサブタイプが開発。宇宙世紀0120年代以降まで連邦軍の主力として運用された。

ジェガンの豊富なバリエーション

RGM-89DジェガンD型

ジェガンにスタークジェガン用の増加装甲、追加武装を装備するために改修が行われた機体。肩部長甲は大幅な形状変更が行われ、スラスター形状も変更。胴部にも増加装甲を装備するためのマウントが設けられる。MSの基本性能に変化がないが、不評だったアムレイカーから通常のコントロールスティックへの変更が行われるなど、実質的なマイナーチェンジ機となった。



RGM-89Sスタークジェガン

特務仕様と称され、熟練パイロットや特殊部隊に優先的に配備されるジェガンの強化機型。主力機をジェガンに一元化する流れは、前線のパイロットからの高性能機開発の原動力が相次ぐという事象を招き、こうした状況に対応するためにジェガンの強化ということでもその要求に応えた。胴部には3連発ミサイルランチャーを装備し、ほかにビーム・ライフルやバズーカなど、用途に応じて選択が可能。

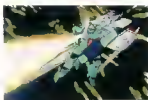
RGM-89De ジェガン（エコーズ仕様）

パイザー式追加センサー、胴部に増加装甲を備えた。特殊部隊エコーズ用のカスタム機。

ジェガンの搭載兵器

ビーム・ライフル

標準的なビーム・ライフル。突出した性能はないが、取り回しに優れている。地球連邦軍の標準装備として、リゼルなどが装備するケースもある。



ビーム・サーベル

胴部左側のウェポンラックに1本装備されている近接戦闘用兵器。これも連邦軍の標準装備となる。



グレナード・ラック

胴部右側のウェポンラックに3基装備されている実弾兵器。

シールド ミサイル

防御用装備ではあるが、両サイドに2門ずつミサイルを装備している。



宇宙世紀0090年代の バリエーション機、試作機



軍縮の時代と言われた宇宙世紀0090年代。その時代に生まれた試作機や実験機の特徴は、のちに正式に生産された機体と密接な関わりを持つ機体が多いという点にある。またバリエーション機として、実現化した機体も少なくない。ここではそれらの機体を紹介していこう。

RGZ-99BEW EWACジェガン
頭頂高19.5m
本体重量24.4t

様々なバリエーションをもつジェガンD型の演習タイプ。武装は最低限の上、センサー能力の向上を目指し、頭部と右前腕部のカメラ・ユニットなどを装備している。



RGZ-99S プロトスタークジェガン
頭頂高19.2m
本体重量23.1t

同じスタークジェガンでも異なる仕様が存在し、本機は初期型のジェガンを改修したスタークジェガンの運用試験機。ロンド・ヘルムに配備された機体は、大型対艦ミサイルを装備し、パラオの攻めに参加した。



ジエガン

RGZ-91B リ・ガズィ・カスタム
Zガンダムの両設計機であるリ・ガズィをさらに改修したMS。分離式のBWSを廃止し、代わりに折りたたみ式の小型BWSへ変更。Zガンダムへと発展した変形型MSとなった。アムロ用として設定されていたが、Zガンダムの開発によって実現することになった。



RGZ-99C (ディフェンサー-bユニット)
頭頂高20.5m 本体重量29.2t

多様なバグバグユニットが存在するリゼルの中長距離射撃に特化したバリエーション。『ディフェンサー-b』ユニットにある増設ジェネレーターとのダイレクト・ドライブにより、ビーム兵器の稼働効率の最適化が図られ、メガ・ビーム・ランチャーの2門同時使用も可能となった。



RGZ-99C (ディフェンサー-aユニット)
頭頂高20.5m 本体重量28.3t

リゼルの指揮官用。C型をベースに、オプションのバックパック『ディフェンサー-a』を装備した。ユニット先端部にあるミサイルコンテナと、通常の50%増の高出力ビーム刃を実現したハイパー・ビーム・サーベルを備え、特に近接・中距離に向く機体となった。



リ・ガズィ

リゼル

MSZ-006 Zガンダム

ARX-014P シルヴァバレット (ファンネル試験型)
頭頂高22.2m
本体重量35.2t

ネオ・ジオンのMS。ドアーベン・ウルフをベースに、連邦軍製ファンネル兵器の試験機として使用された。ジェネレーターを内蔵した有線式大型ファンネルを背部に装備し、後のサイコミュ搭載機の開発に役立てられたという。



ARX-014 シルヴァバレット
頭頂高22.2m
本体重量33.3t

ネオ・ジオンのMS。ドアーベン・ウルフをベースとし、オガスタ研究所の元スタッフらによってアナハイム・エレクトロニクス社グラナダ工場で改修された。元の装備である腰部メガ粒子砲など、ジェネレーター-直接型兵器をオミットすることで、機体性能の向上を目指している。



ドアーベン・ウルフ

MSN-001X ガンダムデルタカイ
頭頂高19.6m
本体重量28.0t

一般兵でもユニットタイプ並の戦闘能力を実現するサイコミュシステム、ナイトロを搭載した試作機。他にもロング・メガ・バスター・ブレット・フィン・フアンネル、シールドにはサブウェポン・ラックが設けられ、攻撃力に特化した機体であることがわかる。



MSN-001 デルタガンダム
機体不明
本体重量不明

可変MSとして開発されながら、諸問題から非変形MSとして設計変更された形式。同機が本来想定していた可変MSがデルタガンダム。設計当時の技術では完成しなかったが、のちのそのデータはデルタプラスなどに転用されている。



MSN-00100 百式

MSN-001A1 デルタプラス

RX-93

vガンダム ダブルフィン・ ファンネル装備型

vガンダムの強化目的の
プラン。右側のビーム・サー
ペルマウントをフィン・フ
ァンネルのマウントに変
更し、合計12機ものフィン
・ファンネルを搭載する。
実戦では増加分のフィン
・ファンネルが同
に含む。6基
装備のまゝロー
ルアウト
された。



RX-93-v2

Hi-vガンダム

小説「機動戦士ガンダム 逆襲の
シャア ベルトーチカ・チルドレン」
で描かれた。もう1つのvガン
ダム翼のように装備されたフィン・
ファンネルが特徴で、青白のカラ
ーリングも異なる。搭載されるサイ
コフレームは、Seulnae攻防戦
で入手したサイコ・ドーガのもの。



RX-94

量産型vガンダム

ジェガンに代わる主力
機MSとして提案され
た。武装はフィン・フ
ァンネルとインコムが
選べ、ニュータイプと
一般パイロットのど
ちらにも対応可能になる
予定であった。



FA-93HWS

vガンダム ヘビーウェポンシステム

vガンダムの強化プランで、
「F.S.W.S.」というフルアーマー
化を行ったもの。装甲を強化し
たうえで、機動力の低下を防ぐ
ために、装甲はプロペラント
とスラスターをユニット化
した。武装はハイパー・メ
ガライフルと、ハイパー・
メガ・シールド。



MSN-06

シナンジュ

MSN-06S

シナンジュ・スタイン

機体番号22.6m

本体重量23.1t

「UC計画」におけるサイコフレ
ームの強度と適性のテストのための
機体として開発された。機体性能の
テスト用として、パイロットの提案
は想定されていないというが、ある
特定の人物向けに作られたとの説が
ある。名称のスタインは底石の意味。



RX-0

ユニコーンガンダム

主なパイロット



バナージ・リンクス

インダストリアルズのアナハイム・エレクトロニクス工業専門学校に通う学生。オードリー・バーンを救出した際、偶然ユニコーンガンダムに乗り込み、以降パイロットとして搭乗。ラプラスの箱を巡る戦いに巻き込まれていく。



スペック比較

	RX-03 ユニガンダム	RX-0 ユニコーンガンダム	MSN-06 シナンジュ
全高	22.0m	19.7m	22.6m
本体重量	27.9t	23.7t	25.2t
ジェネレーター	2,900kW	3,400kW*	3,240kW
スラスター総出力	97,600kg	142,600kg*	128,600kg

※ユニコーンガンダムのデストロイモード時は計測不能。

UNICORN GUNDAM

▶RX-0

ユニコーンガンダム

Spec

◎頭頂高：19.7m（デストロイモード：21.7m） ◎本体重量：23.7t ◎全備重量：42.7t ◎ジェネレーター出力：3,480kW（ユニコーンモード時） ◎スラスター総出力：142,600kg（ユニコーンモード時） ◎センサー有効半径：22,000m ◎装甲材質：ガンダリウム合金 ◎武装：バルカン砲×2、ビーム・サーベル×4、ビーム・マグナム、ハイパー・バズーカ、ビーム・ガトリングガン、他



➡1/頭部：通常のユニコーンモード時は、一角鉄を思わせる形状だが、NT-Dが発動するとアンテナが展開、ガンダムタイプのフェイス形状へと姿を変化させる。

➡2/ボディ：シルエットはRX-78を思わせるが、胸部にはダクト形状ではなく、実用時には内部のサイコフレームが赤熱化して露出。発動時には全長が変化するほど。サイコフレームが拡張している。

➡3/腕部：両腕に1本ずつビーム・サーベルが搭載されている。腕部に接続したままビーム刃を発生して攻撃することも可能。

➡4/バックパック：ユニコーンモード発動時には、折りたたまれていたビームサーベルが展開、内部のサイコフレームが露出する。

UC計画の根幹を成す 対ニュータイプ専用機

地球連邦軍再編計画の一環である「UC計画」の中核として開発された試作MS。地球連邦軍の委託により、アナハイム・エレクトロニクス社が極秘裏に開発を担当。計画自体は、最終テストがビスト財団の管轄下にあるインダストリアル7内のコロニー建造ブロック、メガロニカで行われていたように、同財団が中心となって開発は進められていた。

本機の最大の特徴は、機体の根幹を成すムーバブル・フレームに、サイコフレームを採用したフル・サイコフレームにある。サイコフレームは第二次ネオ・ジオン戦争において、RX-93νガンダム、MSN-04サザビーに試験的に導入された新素材で、母材となる金属にサイコミューチップを誘導することで、サイコミュシステムの強化を計り、ニュータイプ能力を効果的に活用することが可能であった。νガンダム、サザビーでは、もっともパイロットの影響を受けるコックピット周辺のフレーム材に使われたが、ユニコンガンダムでは、ムーバブル・フレームすべてがサイコフレームで構成された、いわば全身がサイコミュシステムと呼べる機体である。一方、サイコフレーム自体がどのような金属を使用しているか

は不明だが、フレームに使用されるのは

の強度をもつ材質であるなら、ガンダリウム合金系金属、もしくはそれに近いものだと考えるのは自然だろう。

ユニコンガンダムを特徴づけるのは、通常時は一角獣を思わせるユニコーンモードと呼ばれる形態だが、NT-Dと呼ばれるシステムが發動した際には、デストロイモードへと「変身」を遂げる点にある。デストロイモード時は、全身のフレームが赤く輝くとともに、拡張体が大幅な変化を遂げる。システム発動時には、性能面でも機動性、反応速度などが飛躍的に向上。またサイコミュシステムは、他パイロットが制御するサイコミュ兵器に干渉するほどの力を発揮する。

本機は一年戦争から始まったMS+サイコミュ兵器に、1つの答えを出した機体といえるかもしれない。少なくともνガンダムやサザビーまでは、サイコミュシステムはファンネルの運用と密接な関係にあった。だが、本機ではそれを逆手にとり、対サイコミュ搭載MS、対ニュータイプを主眼として開発されている。宇宙世紀の戦いを席巻してきたニュータイプ、サイコミュ兵器は、ユニコンガンダムの登場によって、その終焉という可能性をはらみつつ、新たな領域に踏み出しつつある。

武装を強化したフルアーマー・ユニコンガンダム

バナージの友人であるタクヤ・イレイが提案し、ネェル・アーガマに搭載されていた武器、装備を搭載した。武装はハイパー・ビーム・ジャベリン×1、ビーム・マグナム×1、ビーム・ガトリングガン×6、ハイパー・バズーカ×2、グレネードランチャー×1、シールド×3を装備。さらに重装備による機動性の低下を補うために、94式ベース・ジャバーのスラスターを装備している。本来フルウェポンの名がふさわしいが、タクヤが「フルアーマー」として提案したために、フルアーマーユニコンと呼ばれた。全装備状態でデストロイモードへの変身も可能で、急造の装備ではあるが優れた運用性を確保する。



← 設定画はP120へ

武器・装備

ビーム・マグナム

通常のビーム・ライフル発分のカートリッジを使用した高出力ビーム兵器。直撃せずとも会弾だけでMSを破壊するほどの威力を持つ。だが発弾数は少なく、高すぎる威力から用途は限定される。

ビーム・サーベル ビーム・トンファ

バックパック左右と両腕に合計4本装備された近接ビーム兵器。基部が回転し、トンファのような使い方も可能である。

シールド

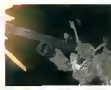
フィールドジェネレーターを採用した強固な防衛装備。NT-D発動時にはサイコフレームが展開し、さらに防衛力を向上させる。

ハイパー・バズーカ

大型実弾兵器。広範囲を攻撃できるベアリング弾など特殊な弾も使用可能。

ビーム・ガトリングガン

本来はクシャトリヤ用のもので、「補付き」に調達された際に装備された。



主なパイロット



マリダ・クルス (上)
リディ・マーゼナス (下)

連邦軍に捕らわれたマリダは、オーガスタ研究所へ送られ、フル・トゥエルプとしてバンシイのパイロットとなるべく再調整を施された。バンシイとワンネマンに救出されたのは、復讐心に燃えるリディがパイロットを務める。



スペック比較

	MSN-001A1 デビルパルス	RX-0 バンシイ	RAS-0 アムロ・バスター
全高	19.5m	19.7m	22.3m
本体重量	27.7t	24t	28.3t
出力	2,560kW	3,480kW*	2,200kW
スラスター推力	92,400kg	142,600kg*	79,600kg

※ユニコーンガンダムの
デストロイモード時は計測不能。

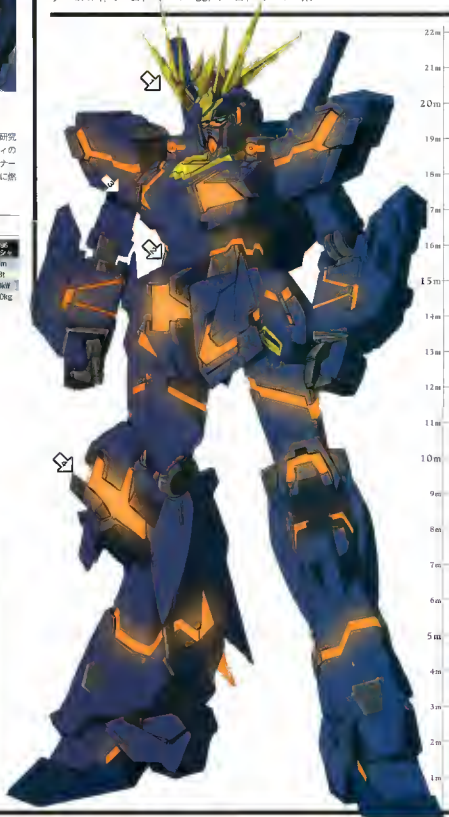
UNICORN GUNDAM 02 BANSHEE

▶ RX-0

ユニコーンガンダム2号機 バンシイ

Spec

● 頭頂高: 19.7m (デストロイモード: 21.7m) ● 本体重量: 24.0t ● 全機重量: 46.7t ● ジェネレーター出力: 3,480kW (ユニコーンモード時) ● スラスター総推力: 142,600kg (ユニコーンモード時) ● センサー有効半径: 23,500m ● 装甲材質: ガンダリウム合金 ● バルカン砲×2、ビームサーベル×4、アームD・アーマーBS、アームD・アーマーVN



➡ 1. 顔部: ユニコーンガンダムと同様。NT-D発動時にはガンダムフェイスへと変化する。一瞬顔を隠した1号機と違い、2号機は獅子の顔がモチーフとなっている。

➡ 2. ボディ: 頭部以外は、基本的に1号機と変わりはなく、サイコフレームは1号機が赤く輝くことに対し、2号機では黄金に輝く。

➡ 3. コックピット: 1号機と同様。NT-D発動時にはコックピット内部も変形する。1号機との違いは、ラプラスの痕の存在を示すL+が描かれていないことなど。

➡ 4. 関節: ダーク系のカラーと、黄金のサイコフレーム以外変わりはなく、NT-D発動時には各部のサイコフレームが拡張され、全容が変化する。

一角獣を駆る 黄金の獅子

RX-0ユニコングダム2号機だが、一部仕様の違ういわば兄弟機的な機体である。

ムーバブル・フレームにサイコフレームを採用したフル・サイコフレーム構造や、対ニュータイプ戦闘に主眼を置いたコンセプトは1号機を踏襲。外観から見ると大きな違いは、カラーリングと頭部のブレードアンテナ程度だが、内身についての差は想像以上に大きいものである。本機は1号機に先行して地球のオーガスタ研究所に送られ、重力下試験をはじめとする想定されたプログラムを実施。イレギュラーで実戦に投入された1号機とは異なり、本機は最終調整が施されたユニコングダム2号機の完成形といえるものだ。このため1号機との差は、特に武装面において顕著に表れている。ユニコングダムタイプの基本装備であるビーム・マグナムは、ビーム・ライフルの4倍といえる威力を誇るが、継戦能力という意味では十分とはいえない。そのため正式な運用がなされていない1号機は、旧ネオ・ジオン勢力や他機種の武装を用いるなど、運用面での問題点が付きまとった。その点、正式に運用されているバンシィは専用武器の開発も継続されており、アーム

ド・アーマーと呼ばれるサイコフレーム兵装が用意された。

初陣ではパイロットにブル・トウエルブ（マリダー・クルス）を据え、1号機単体との戦闘を主眼においたアームド・アーマーBS（偏向ビーム兵器）とVN（超振動兵器）を使用。

その後、リディ・マーセナスがパイロットとして出撃した際には（機体名称・バンシィ・ノルン）、アームド・アーマーDE（シールド/スラスタ）メガ・キャノン、アームド・アーマーXC（増加サイコフレーム）が装備されるなど、戦場に合わせたフレキシブルな対応が可能となっているのだ。

このリディの乗った機体は2号機バンシィのマイナーチェンジ版「バンシィ・ノルン」であり、ビーム・マグナム下部にリボルビング・ランチャーを採用、これは用途に合わせた様々なカートリッジを装填することが可能で、ビーム・マグナムの継戦能力問題に対する1つの回答といえるかもしれない。

本来、対ニュータイプ・対サイコミュ兵器を想定したユニコングダム2号機はコンセプトだが、1号機と2号機が相対する立場となったことで、結果としてその能力は同系統に向けられることになる。はたして宇宙世紀0090年代最高のスペックを持つ機体同士の戦いは、どのような結末を迎えるのか。

戦場にに合わせて変化するバンシィのスタイル

戦いが新たな局面を迎えるごとに、正式運用されているバンシィの優位性が際立つ。マリダーが搭乗した際には、対1号機に絞った武装を搭載し、その後リディ搭乗時には、より柔軟な対応を目指した装備へと変更がされている。特にリボルビング・ランチャーは、ユニコングダム2号機の汎用性を大きく拡大するもので、リディはMGaAP（重甲弾）、ポップミサイル、ビーム・ジュッテといった多彩な武装を搭載して追撃戦に挑んでいる。ネル・アーガマから出撃した迎撃部隊を圧倒するなど、NT-D非発動時でもユニコングダムタイプは圧倒的なスペックを誇ることを証明するとともに、こうした一般派が充実するだけでも、さらに脅威が高まる事が証明されている。

バンシィ・ノルン

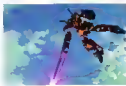


← 設定画はP120へ

武器・装備

アームド・アーマー BS

右腕に装備する偏向ビーム・スモートガン。空間データをサイコミュで感知し、高精度の予測照準を実現。まるで誘導兵器のように敵機に襲いかかる。



アームド・アーマー VN

左腕に装備する格闘武器。強固なサイコフレームの特性を利用し、超振動によってあらゆる物質を破壊する。デルタプラスを一振りですぐ粉砕するなど、通常のMSでは太刀打ちできない。



アームド・アーマー DE

シールドの機能拡張を目的とした強化ユニット。劇団式スラスタとメガ・キャノンを装備した。背面に装備する形で使用する。

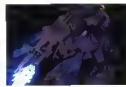


アームド・アーマー XC

シールドの機能拡張を目的とした強化ユニット。劇団式スラスタとメガ・キャノンを装備した。背面に装備する形で使用する。

リボルビング・ランチャー

ビーム・マグナムの銃身下部にセットされる新武装。カートリッジ内には4種類の異なる武装をセットすることができる。



主なパイロット



ナイジェル・ギャレット



ダリル・マッグネス



ワッツ・ステッパー

トライスター

ロンド・ベルのエースパイロット部隊。ナイジェル、ダリル、ワッツの3人で構成される。本来はユニコーンガンダムに搭乗予定だったが、1号機が想定外の運用となり、計画が中断となったため、ジェスタのパイロットとなった。

スペック比較

	RX-0 ユニコーンガンダム	RGM-96X ジェスタ	RMS-100 ギラ・ズール
全高	19.7m	19.3m	20m
全幅	23.7m	24.0m	21.0m
全重	3,480kg	2,710kg	2,470kg
センサー出力	142,600kW	95,030kW	62,100kW

※ユニコーンガンダムのデストロイモード時は計測不能。

➡1/頭部：ジェガン系のヘルメットを受け継ぐセンサー、カメラを搭載。ユニコーンガンダムの顔付としての役割を果たすため、パイザー状のセンサーを備えるなど全体的な機形の向上が行われている。

➡2/ボディ：ジェガンと比較して、胸部を覆うように装甲が取り囲む形状。防御性能は大幅に向上している。

➡3/腕部：左上腕部はサーベルバックになっており、ビーム・サーベルが格納されている。右上腕部は、デュアルの予備マガジンが搭載される。シールドはアームユニットを介してバックパックに装備されるという特殊なタイプ。

➡4/バックパック：各機オプションや増設装甲で機体重量が増加し、それを補うために専用のバックパックが開発された。

J E S T A

RGM-96X ジェスタ

Spec

●頭高：19.3m ●全重：2,710kg ●全幅：24.0m ●センサー出力：2,710kW ●スラスタ：総推力：89,030kg ●センサー有効半径：14,200m ●武装：バルカン砲、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ハンド・グレネード×6、他



ユニコーンガンダムの 露払いを務める随伴機

地球連邦軍再編のために進められる「UC計画」。その中核となるRX-0ユニコーンガンダムは、同世代のMSの中で圧倒的なスベックを誇っている。だが汎用性を排除し、対敵性ニュータイプ戦に機能を特化させた点は否めず、短時間しか機能しないNT-Dシステムをはじめ、運用が限定されている点は否めなかった。

ユニコーンガンダムが敵性ニュータイプとの戦闘を行う際、ユニコーンガンダムの機能を最大限発揮させるためにユニコーンガンダム自体の消耗を防ぐうえで、一般戦力を掃討するための随伴機は必然であり、その開発は、ユニコーンガンダムの開発と並行して進められていた。

最低限求められるのは、ユニコーンガンダムに追従出来るスベックを持つこと。とはいえ軍縮が進む宇宙世紀0090年代末期において、主力機はジェガンへの転換が進められていたが、本機もその例に進むジェガンの基礎技術がベースとされた。

ここでプラスに作用したのは、ジェガンに豊富なバリエーションやオプションパーツが存在していた点にある。たとえば特務仕様様のスタージェガンは、クシャトリヤとの戦闘において、

ファンネル対策を想定した戦闘を見えている。サイコミュ遠隔操作兵器は時代を席巻したが、それゆえ対策が普及していたとしても不思議ではない。

こうしたデータをフィードバックすることで、スタンダードなジェガンはよりスペシャライズドなジェスタへと発展。装甲、センサー類の強化をはじめ、専用設計のラスターを採用することで、大幅な機動性の向上を果たした。その総合性能はRX-93Vガンダムに近い程のものとなった。

武装はジェガンやリゼルといった連邦軍主力機と規格を統一するものの、出力の向上や拡張性の追加といった仕様変更がなされている。重戦仕様様のジェスタ、キャノンをはじめ様々なバリエーションが存在する点も、ベースとなったジェガンを引き継いでいる。

宇宙世紀0096年には新規機評価試験のため、ロンドン・ベル機の旗艦ラー・カイラムへと12機が配備された。ネオ・ジオン残党が襲来したリントン基地襲撃戦においては、エースパイロット部隊であるトワイスターの搭乗によって旧型機を圧倒するなど、ユニコーンガンダムの随伴機としてのスベックを見せつけている。

しかし、結果的に、ユニコーンガンダム1号機がイレギュラーな存在となったため、本来の随伴機としての活躍は現状果たせずにいる。



バリエーションを想定したジェスタの開発背景

ユニコーンガンダムが敵性ニュータイプと1対1で戦うシチュエーションを作ることが、ジェスタに課せられた使命である。それゆえ様々なシチュエーションで一般MSを圧倒するため、基本性能の向上だけではなく、多彩なオプションが用意されている。ジェスタ・キャノンも、そのバリエーションの1つで、多くの武装を装備した重戦タイプとなっている。その武装は、ビーム・キャノンに4連マルチランチャー、ハンド・グレネードの増設、装甲の強化など。重戦用として専用の機体が開発されたわけではなく、これもジェスタのオプション装備として開発された点が、時代性をあらわしている。各部の増加パーツは、爆発ボルトにてバジすることが可能となっている。

ジェスタ・キャノン



武器・装備

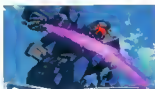


ビーム・ライフル

ジェガンが使用するタイプよりも長銃身タイプだが、カートリッジは統一規格でジェガンと同タイプを使用する。通常射撃モードのほか、連射モードを使用することも可能。

ビーム・サーベル

左上腕に1本搭載される近接武器。ジェガンと同タイプの統一規格品である。



ハンド・グレネード

両腕に3基ずつ収納されている投掷武器。

シールド

バックバクマウントタイプのシールドで、腕の動きを妨げない。ジェガンと同様、ミサイルが内蔵されている。



UC計画とは？

ユニコーンガンダムの開発計画として進められたプロジェクト、UC計画。新型MS開発の計画としてだけではなく、その誕生の背景には宇宙世紀の今後を占う重要な秘密が隠されている。



あくまでユニコーンガンダムの生体システムとして、ときには怒りに身を任せて戦ったバーナジ。だがロニと対峙した戦いの中で、初めて自らの意思でNT-Dを起動させる。それは憎しみや怒りを止めたいという思い。これはNT-Dシステムにとってはイレギュラーな事象であり、連邦軍の恐れしたニュータイプの力だった。



サイコミュなどニュータイプ能力に反応するユニコーンガンダム。クシャトリヤのファンネルを兼ね取り、制御下において。ムーバブル・フレームがフル・サイコフレームであるということは、つまり機体全身がサイコミュシステムであることに等しい。それゆえ、一般的なサイコミュシステムを搭載した機体を凌駕することはたやすかったはずだ。

宇宙世紀0100年を目指し 恐るべき計画が実行される

宇宙世紀0100年、それは宇宙へと進出した人類が迎える新たな宇宙世紀。大きな節目となるこのタイミングに、地球連邦政府は宇宙世紀0095年の中期防衛整備計画において、連邦宇宙軍再編計画を発表。その概要は、分散配置されている連邦軍の艦艇を統合し、かつての主力艦隊たる地球軌道艦隊を再建する計画であった。

UC計画は、この再編計画の一部として組み込まれていた。UC計画を進めていたのは、地球連邦軍の委託を受けたのはアナハイム・エレクトロニクス社とされていたが、実質的にはビスト財団が行っていた。

計画の目的は、次期フラッグシップたるRX-0ユニコーンガンダムと、それに伴う随伴機の開発がメインとされた。が、本来の目的はニュータイプの抹殺、ひいてはジオン思想の完全抹消を目指すプロジェクトであった。

搭載されるNT-Dシステムは、表向きはニュータイプドライブと表記されたが、本質はニュータイプ・テストロイヤル、つまりはジオン・ダイクンが唱えたニュータイプ思想そのものの抹殺を行ったためのシステムである。

ニュータイプによって稼働するサイコミュシステムを使いながら、ニュー

タイプを抹殺するという矛盾を抱えているが、それゆえNT-Dは強化人間で稼働することがふさわしいという。

宇宙世紀0100年には、ジオン共和国が自治権を放棄し、連邦構成国家に編入される予定であり、連邦政府は思想としても存在としても、完全にジオン国家を根絶することが可能となる。

一方でユニコーンガンダムには、連邦政府の重大な秘密を握るという「ラプラスの箱」の手掛かりが組み込まれたLa+が搭載されており、連邦とジオン両者を抹殺する可能性を秘めた存在になる。ビスト財団は「抽付き」に箱のカギ、つまり本機を譲渡しようとした背景は、世界のバランスを意識し、この世界から革命の心を失わせまいとする意思が込められていた。

本来、プロジェクトが想定した性能を持つ機体であるならば、ガンダムタイプである必要はない。しかし、一年戦争を勝利に導き、ジオンを消滅させる象徴として英雄たるガンダムの存在が利用された感はある。かつてテイターズが自らの正当性を強調するためにガンダムMK-IIを開発した状況と同様、ガンダムである意味はもはやプロバガンダとしての役割がなくなかったのかもしれない。一方で、ガンダムは時代を要する存在として、機多の戦場に奇跡をもたらしてきた。それはユニコーンガンダムも同様であった。

宇宙世紀0105年代のガンダムたち

マフティー動乱で激突した2機の兄弟機



一年戦争、グリプス戦役、第一次、第二次ネオ・ジオン戦争、ラプラスの箱を巡る攻防……。繰り返されてきた戦争の悲劇は、宇宙世紀0100年を迎えても繰り返される。

最先端装備をおこられた 記念すべきガンダム

宇宙世紀0105年、大規模大戦は過去のものとなったが、連邦政府の腐敗と圧政は変わらず、紛争の火種はくすぶり続けていた。連邦政府の特権階級を襲撃する秘密結社「マフティー・ナビユ・エリン」（通称マフティー）の結成、そしてのちにマフティー動乱と語られる紛争の発生も、必然のことであつたのかもしれない。

この時代においても戦争の力を握る存在はMSであり、宇宙世紀0090年代に開発されたMS群の系譜を継ぐ機体を中心となつていく。連邦軍サイドが使用するFD・03グスタフ・カール、ドール・カールはジェガンの再設計機であり、マフティーが使用するMe02Rメツサーはギラ・ドーガの再設計機である。

状況としては宇宙世紀0090年代の軍縮時代からあまり変化がないとらえられるが、アナハイム・エレクトロニクス社にとって宇宙世紀0105年は、同社製ガンダム20周年という記念すべき年。ここで送り出されたバネロペーは、ある種この時代の最新技術を体現する機体だといえるかもしれない。

同機にはMSとして初めてミノフスキー・クラフトが搭載されたほか、サイコムシステムを使用したファンネル・ミサイルが搭載されている。遠隔操作ビーム兵器としてのファンネルは、その対策法の確立によりすでに過去のものとなり、結果としてサイコムユの技術の行き着いた先が、ミノフスキー粒子が無効化した「誘導ミサイル」だったのはなんと皮肉な話である。

こうしたMSの領域を超えた装備も含めた数々の装備により、バネロペー

は30メートル級的大型MSとなった。これは、ともすればかつての恐竜的進化と揶揄された時代へ善き戻つたような印象すら受ける。その背景には、同社の技術を誇示するためのデモンストレーション的な意味も込められていたのかもしれない。

マフティーの依頼によって建造されたミガンダムは、バネロペーがMSと外部ユニットによって成立していた構造とは異なり、ミノフスキークラフトを初めとするすべてのユニットを本体に内蔵した、いわばバネロペーの発展機である。アナハイム・エレクトロニクス社が連邦とマフティーのミリタリーバランスを制御しようとしたかは定かではないが、この2機の性能に迫るMSは開発されることはなかった。両機の系譜を受け継ぐ機体も、これ以降開発されることなく、小型化という別の革新を迎えることになる。



バネロペー

アナハイム・エレクトロニクス社製ガンダム開発20周年を記念して開発された。RX-104イデウスセウスガンダムに、FF（フィックスド・フライト）ユニット、バネロペーユニットを装着した状態がバネロペーと呼ばれる。ミノフスキー・クラフトによって単機での飛行が可能だが、空挺抵抗減用のビームバリアが未完成のため、高速飛行時はフライトフォームに変形することが必要である。この時代の特徴的なサイコム兵器、ファンネルミサイルを採用する。パイロットは、地球連邦軍所属のレーン・イェム。



ミガンダム

マフティーの要請によって開発された試作MS。バネロペーとは違い、機体内部にミノフスキークラフトユニットを搭載する。またバネロペーでは未完成であったビーム・バリアが完成しており、同装備による空挺減速効果により、MS形態のまま飛行可能である。ビーム・バリアの技術自体は、のちにクロスボーン・バンガードや次世代の連邦系機体も採用するが、あくまで防衛兵器としてのもので、ミガンダムやバネロペーのような飛行時の補助機能としての意味合いにはニュアンスが異なっている。パイロットは、マフティーの指導者、マフティー・ナビユ・エリンことハサウェイ・ノア。

地球連邦軍の迷彩

カラー

エーゴによるジャブロー降下作戦は失敗に終わったが、その後、地上用に改造された多くの新型MSが優秀な戦力しが持たぬカラバに参戦され、地上におけるディンサーズの駆逐をカラバが抱えるようになっていた。その際の主力がMSA-003ネオであり、それまでの主力であったRGM-79RJMⅡに比べて弾性証や機動力がアップしており、青龍の駆逐を持て代わりたりの在来証を脱する汎用性も高く、費用の削減が小規模なことでほかに低く、使い勝手がよかった。

政治的中程であるダカールを弾きえたカバ(は)は算道を狙うティターンズ側に対し防衛部隊を配属、中でもMSA-003は繰り出される敵新型MSに対抗しうる機体として多くが集められた。ティターンズ側は可変MSを投入し直接ダカール市街へ進入することがタイプ化しカバ(は)を開けた。市街地では不利と見て市街地に潜み迎撃する戦術を取った。一部の機体には市街地まで移動された。少ない数での戦術を防ぐ努力が払われていた。

この機軸は初期のダルガーとスライヴと対し、斜角に上りラバーと
とされるという「スライヴ」を採用、両者の空間に差を掛けしている。乾物
地帯であるダルガーの市街と同様に地を削りだした道は、ドット模
ターで海とグレーとライトストロ、ライトブルーの3色が使われて
いる。取組方も多くのRGM-79シムが投入されていたことで、
ムサシや他のMS40は3台を同時に発射して連射マークを打った。この
機軸は後年のスライヴの前身に、ブルーとスライヴ・グリーン
の色を青と黄に塗り替えて対し、真ん中のブルーは地帯、斜角が上を
示すという「スライヴ」の、その外に市街を走るエーゴのグリーンと
青が対する機軸とに思われる。機軸ナンバーの「06」はダルガーで、
エーゴ機軸の機軸で対し互に返答し合っているものとされている。

強行偵察用に
MA形態に
的を絞った迷彩

MSA-005メタスは試作機可変MSとされ、機体の腐蝕性が指摘され本機生産されなかったが、試験運用から3基のジェネレーターによる加速性能とメガバスター・ランチャー等の補助が可能な余剰出力に着目し、少数機が生産配備され試験運用が続けられていた。内容は加速性能と長大な航続距離を生かし、4機1組の偵察のほか、機体構造の腐食や燃料系圧路等の実機テストなどであった。

グリプス戦役も終結になるとネオジオフの動きを知るために偵察活動の重要度が増え、エーゴの機体のなかで航続距離が長く座を切り切れるMS-06Fがその役に最適ではないかと少数が検討選出に供された。

この機体は基本的にMA形態時の迷彩効果が優先された配色となっており、全体を濃いグレー、その上に濃いブルーを重ねて甲冑に用い込む迷彩がされているが、各部のコーションカラーは残されている。機体には可動ペーン上にブルーで濃淡マークが入るのみで番号などは一切なく、各面は一切の照

一方、ブルーで塗られた「グレイ・ファントム」は、このように、両者の間に位置している。一説には2機を交互に試験運用しており、もう一方の機体はグレイとブルーの配色が逆で「グレイ・ファントム」の図の機体が「ブルー・ゴースト」とこのコードネームで呼ばれていたとの事であり、偵察に特化した機材が追加で多数配備された偵察専用機であったともいわれている。

「機動戦士Zガンダム」の映像
 上で、モビルスーツの塗装は
 いちゆる。設定色、のびは一種
 類である。しかし、アニメシ
 ョンの世界を少し離れて宇宙世
 紀という世界で実際に何が行わ
 れていたかということを考察し
 てみると、モビルスーツは宇宙
 地上など様々な場所で行動する
 からして、おそらく様々な状況
 にフィットさせるために多種多
 様な塗装や迷彩があったと考え
 ることは少しも不思議ではない
 むしろ、「宇宙世紀の世界で遊ぶ
 ということを考えると、そうい
 ったことを想像するのも一つの

RGM-89A ジェガン 第二次ネオ・ジオン戦争後 艦隊配備機カラー

想定設定

第二次ネオ・ジオン戦争後、連邦軍はロンド・ベル圏に増派されたRGM-89を旧来のQM-MSBに代わる主力として活用するも方針を固めたが、戦争により劣化した状況からその配備は遅々として進まなかった。そのような状況ながらもRGM-89のZGM-99の近來戦を数回する基本性能の高さと汎用性は高く評価され、新主型や次期型などの開発も遅くから開始され徐々に連邦主力MSとなった。

背景解説

活動を続けるネオ・ジオン残党の対抗に迫られ、配備の遅延もRGM-89だったが、軍艦の高い艦隊のMS部隊を優先しレム兵との更新を行っていた。この機体は新鋭クラブ艦隊を母艦に新定されたベテランが多く在籍する第2MS中隊第4小隊所属で、左肩に入る部隊マークは第4小隊を表すローマ数字の「IV」を元に「V」を行って走ってくるブーメラン、真中に集める手連のシンボルと艦隊の「V」に掛けて図案化したものと組み合わせ、一つ入っている連邦十字は第二次ネオ・ジオン戦争に参戦したことを示している。機体塗装は他の所置MS部隊がRGM-89に改良されていないとみられ艦隊の塗装を継承し、機体のみユニコカラーであるオレンジで塗られ、伝統の連邦MSカラーとなっている。右肩に連邦十字軍、右腕に機体番号「04」をブルーで入れているが、部隊マークがオレンジカラーなのはこの「04」機のみで、他の機体は番号などと同じブルー。これは第4小隊と同じ4番機が隊長機と指定されているからである。

ジェガン
配備初期の塗装



特殊部隊用の
シール迷彩テスト機



RGM-89B セル 第二次ネオ・ジオン戦争後 特殊任務グループ所属機カラー

想定設定

ロンド・ベルに対し、連邦政府及び軍の一部にあったティターンズの再興を企図する者やアウトロー部隊と見下す者の思惑が一致し、対抗部隊の動きが密かに監視された。第二次ネオ・ジオン戦争終結直後より残党の増殖作戦用特殊部隊として少人数の編成で活動。後に単独作戦を遂行できる本格的な部隊編成となり、機体作戦以外にも特殊作戦用MSの開発、テストなども行うに至った。しかしロンド・ベルへの影響が懸念し一先化けが早かったとの判断が下され、MS時はエコーズなどへ所属。戦時中は連邦軍へ回収され、本体は特殊テストグループへと名称変更のうえ改編されたが短期間で閉隊されている。

背景解説

STG（特殊任務グループ）と呼ばれていた特殊部隊。MS運用部隊には訓練とテストを担うDet-8（8分隊）、通称「ブルース」と呼ばれる部隊があり、各種新MSや機体のテストを行いつつ、性能を把握した段階でロンド・ベルへの配備機体の選別情報を上層部へ報告していたともいわれる。作戦環境に合わせ各種迷彩などを機体に向う特殊部隊用として、塗料の量や専用設備での作業が不要のシール状シートに塗布したテストの一例。本隊は特殊部隊の試験用機に開発された試作品で、全塗装するMSでは耐熱性の不足による変色が起き、機体運動開始直後はシート自体が剥がれるような状態だったが、テストを重ねる使用し徐々に進化した結果、採用は断念された。この機体は特殊部隊向けRGM-89と同様の塗装で塗られたPGZ-05の初期生産型で、新機体のテストベッドとして使用された。迷彩具合が判りやすいグリーン塗色のシール状シートが半透明の両面では各所に貼られ、部位ごとの変色が見られるようになっている。所蔵を示すもの「RFSP」のみ、あとはコールドサインといわれる「ZE-7」が試験用入るだけである。実験では訓練やテストを行うためとみられているが定かではない。



① ビーム・ライフル モビルスーツの武装の 主役の地位を確立

武装の面では、一年戦争の機体からもっとも進化したのはビーム・ライフルだ。従来のビーム・ライフルは、エネルギーCAP技術により、縮退寸前のミノフスキー粒子をライフル内にチャージし、それをメガ粒子に変換して使用していた。この方式ではビーム・ライフル本体にチャージできる範囲でしか撃つことができず、戦場において弾切れが頻発した。ゆえに、ビーム兵器を使用できる状況下でもカトリックジ式で装填できる実体弾兵器を使用するケースもまた、多かった。

また、メガ粒子自体はライフル本体に収納されているが、打ち出すにはモビルスーツ本体のジェネレーターの力を借りなければならず、ビーム・ライフルの出力の大きさは、本体のジェネレーターに大きな関係があった。実際、RX-78ガンダムのビーム・ライフルはRGM-79ジムのジェネレーター出力的には若干荷が重く、携行出来ないわけではなかったが、実戦で使うには

やや難があった。一方でビーム・スプレイガンは出力が低く、ジオン公国軍の超硬スチール合金製モビルスーツ相手では必要十分な威力があったため、広く普及した。

一方で宇宙世紀0087年には、ビーム・ライフルにはエネルギー・バツク方式が広く普及しており、一年戦争のように弾切れを起こす可能性は低くなり、また、出力も向上している。

この時代のビーム兵器は、その出力が分かっており(別表参照、同じビーム・ライフルといっても、その機体の性能と用途から様々な出力のものが採用されている。ビームは出力の高い方が威力もあり、また、距離に比し収束率が減退していくものの、遠距離からの攻撃が可能となる。しかしながら、各機体のセンサー有効範囲と必ずしも同一ではなく、このことから出力の高さは単に破壊力を求めるという部分もあることがわかる。

単純に対モビルスーツ戦闘であれば、2MW程度あれば充分だが、より出力が大きいに越したことはない、という程度なのだろう。実際の戦闘でも各機体のビーム・ライフルの出力の大きさ

宇宙世紀0087-0096年

モビルスーツの 武装



宇宙世紀0087年以降のモビルスーツの武装は、一年戦争の戦訓を取り入れたものとなった。しかし、第二世代以降の“実験の時代”らしく、その武装もまた、実験的な要素も多かった。ここでは、Z計画以降のエウゴのモビルスーツの武装を中心に当時の各モビルスーツの武装を解説していこう。



主なモビルスーツの ビーム・ライフルの出力

型式番号	名称	ビームの出力
MSN-00100	百式	2.8MW
MISA-003	ネモ	1.9MW
MSZ-006	Zガンダム	5.7MW
RMS-108	マラサイ	2.2MW
NRX-044	アッシュマー	2.6MW
NRX-005	ギャプラン	※3MW
PMX-003	ジ・O	2.6MW
RX-160	バイアラン	4.7MW
AMX-004	キュベレイ	※1.4MW

※ギャプランはビーム・キャノン、キュベレイはファンネルのビーム砲の出力

グリアス戦役時代の主なモビルスーツのビーム・ライフルの出力。1MW=1000KWなので、多くの場合はビーム・ライフルの出力は、その機体本体の出力よりも大きい。キュベレイはファンネルの一門の出力。ファンネルはある程度の至近距離からの攻撃のため、出力は低くてもいいのだから、一般的モビルスーツ相手であればこの程度で充分なのだろう。



はあまり関係なくとも見える。一方で、対艦戦闘などを考えた場合、各機のライフルの出力を見るに、2・5 MW以上は欲しいところかもしれない。ちなみにZガンダムのハイパー・メガ・ランチャーは8・3 MW、Zガンダムの2連装ダブル・ビーム・ライフルは各々10・6 MW、第二次ネオ・ジオン戦争時のサザビーのビーム・ショット・ライフルの出力は10・2 MWと、ジェネレーター出力が大きい。逆に、ビームの出力も増大しており、エネルギー・バックがあるものの、ジェネレーターの果たす役割もまた大きいことが分かる。また、Zガンダムのハイ・メガ・キャノンでは単体で50 MWという凄まじい威力を誇る。これはこの確自機が本機のジェネレーターに直結していたからであり、宇宙世紀0130年代に登場した、ヴェスパーも

同様のコンセプトの高威力砲だ。しかしながら、エネルギー・バックのエネルギー量も限度があるはずで、いくらジェネレーター出力が高くても、高出力の攻撃を繰り返すと早く弾切れになるだろう。多くの場合は出力を用途に応じて変えて対応したはずで、必ずしも常にフル・パワーではなく、多くの場合は2 MW程度の出力を使っていたのではないだろうか。実際のビーム兵器は、特殊な用途に使用する以外の通常弾での戦闘をほぼ駆逐してしまっただけ。また、その威力は凄まじく、実体弾に優れた耐弾性能を見せたガンダリウム合金とて、その直撃においては損失が大きかった。そういう意味では、ビーム兵器の威力の前には装甲の防御性能はほとんどないに等しく、対ビーム・コーティングなどに頼るしかなかった。RGM

② ビーム・ビストル リック・ディアスにのみ 装備された小型銃

リック・ディアスのランドセル部に二丁マウントされている小型のビーム兵器。一説には百式のビーム・ライフルと同等の能力があるともいわれている。しかし、実際にはリック・ディアスの主武装はクレイ・バズルカであり、ビーム・ビストルはあくまで非常用の武器であった。

砲身などの耐久性が一般的なライフルに比べ弱いなど、何かしらの障害を抱えていたのだから、使い捨てに近い兵器だったとされ、実際それほどの使用例があるわけではない。むしろ、宇宙用戦艦時の奇襲への対応策としての背部への武装と考える方がいかにしれない。実際、このビーム・ビストル

はリック・ディアス特有の装備であり、以後の機体に採用例はなく、実驗的な要素が強かったと言える。

③ ビーム・サーベル それ程の出力を必要としない 近接用の兵器

ビーム・サーベルは、エネルギーCAPの技術、すなわちビーム・ライフルの技術に応用して、サーベル状にして、対モビルスーツ戦用に使えるばかりでなく、艦艇の装甲に大きなダメージを与えることができるほどの威力を持つ。

出力としては0・450・6 MW程度であり、換言すればこの程度で至近距離であるならばおおよそのものは切ることができたのだろう。また、ビーム・サーベルを本体に接続することで、簡易型のビーム・ガンとして使用することが出来る機体もあった。MSZ-006 Zガンダムの場合、ビーム・ガンの出力はサーベルの倍の1・3 MW程度であり、ファンネルの1・3 MWの出力とほぼ同等。ファンネルは近距離からの着弾を想定している兵器でもあり、それ以上のレンジからならビーム・ガンの出力は対モビルスーツ戦としては充分ではない可能性も高い。牽制用、あるいはモビルスーツなど以外の目標に小ダメージを

与えるためのものと言える。

一方で、MSZ・010ZZガンダムの場合、ハイパー・ビーム、サーベルをはじめからビーム、キャノンとして使用することも念頭に置かれており、サーベル時で1、1MW、キャノン時には10MWもの高出力を誇った。このサーベルは小惑星を両断出来る程の威力があり、ややオーバースペックともいえる。

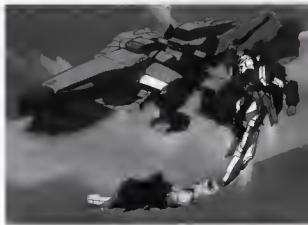
しかし、0、4MW程度で充分な能力のビーム・サーベルに倍以上の出力が必要かは疑問な部分も多く、その後は高出力はビーム・トマホークやビーム・アックスなど、ビーム部分の表面積を拡大する方向に進化していったと考えられる。

④ パズーカ

わずかながら需要があった 実体弾兵器

宇宙世紀0087年以降、モビルスーツの武装はビーム兵器が標準化されていくが、いわゆる実体弾兵器が完全に否定されたわけではなかった。

ビーム兵器隆盛の理由としてはおろか、その高エネルギーが挙げられる。マシンガンなどに比べ威力も速度も速いため、完全に主役の座を交代することになった。一方で、同じ実体弾でも対艦戦艦などに使用する高エネルギーのパズーカは、貫通力ではなく、爆発



による面でのエネルギー攻撃ができるなど、ビームと違った効果も期待できるため、オプションとしてこの時代でも使用されている。また、広範囲に鉄球などを飛散させる指向性兵器としても、ビーム兵器にはできない芸当で、通常の戦闘以外にも対ニュータイプ機戦闘でも効果を挙げた。

また、ビーム・攪乱幕使用時における長距離ビーム兵器の威力の減衰には効果的であった。

このような理由から、一年戦争以後、宇宙世紀0087年頃は、いわゆるパズーカ系兵器は、まだサブ・ウェポン的な武装として一般的だった。しかしながら、宇宙における実体弾兵器は、流れ弾や破片などが何かに当たるまで運動エネルギーを維持し続ける（戦場以外の思わぬ場所や時間で被害が出る）

という問題もあるため、その後、使用頻度は少なくなっている。

一方、地上においては宇宙のような問題も少なく、またビーム兵器は大気による減衰という問題も抱えていることもあり、宇宙世紀0090年代においても、実体弾兵器は、宇宙よりも幅広く使われている。

⑤ グレネード

あらたな近接戦闘用の 携行兵器

モビルスーツの近距離兵器としては、頭部のガトリング砲（バルカン）が代表される。これは車両や対人兵器としては極めて有効であるが、対モビルスーツ戦には若干力不足であり、ましてやガンダリウム合金製のモビルスーツとなると、当たりどころというレベルの兵器に過ぎなかった。

そこで第二世代以降のモビルスーツには、バルカンに足して近距離兵器が装備される例が多くなった。主流なのはグレネードといわれるものだが、その多くは榴弾を発射するというよりは、ある程度の目的追尾機能を持ったごく近距離型のミサイルのような兵器といえた。

その威力は、当たりどころによってモビルスーツを撃破できるほどのものであったが、速度もビーム兵器に較べるとそれほど高くなく、また本体の

メガ・ライダー

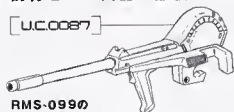


★サブ・フライト・システム（SFS）とメガ・パズーカ・ランチャーを合体させたような支援メカ。搭載しているメガ粒子砲の威力も高い。しかし、後継機などは存在せず、運用面などで折り合わない点が多かったのかもしれない。ただ、SFSは一定の需要があり、後々の時代まで後継が開発されている。

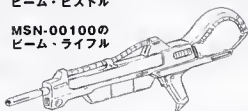
センサー類に頼った追尾式であるため、有効射程も短いと思われ、あくまでサブ・ウェポンでしかなかった。それでもビーム兵器にはない役割を担えることから、その後長らくモビルスーツの標準的武装として装備されることになる。

年代別にみる 携行ビーム兵器の形状

[U.C.0087]



RMS-099の
ビーム・ピストル



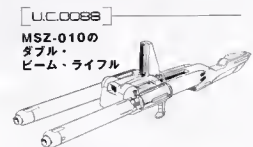
MSN-00100の
ビーム・ライフル



MSA-003の
ビーム・ライフル
◆ネモのビーム・ライフル
は、ジムⅡやジムⅢと同じ
形状。スタークジェガンな
ども機体する。隠れたベス
トセラーかもしれない。



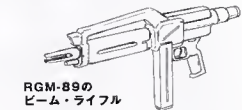
MSZ-006の
ビーム・ライフル



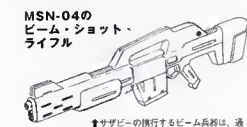
[U.C.0088]
MSZ-010の
ダブル・
ビーム・ライフル



[U.C.0093]
RGZ-91のビーム・ライフル



RGM-89の
ビーム・ライフル



MSN-04の
ビーム・ショット・
ライフル

↑ザザビーの携行するビーム兵器は、通常のライフル以外にショットガンのような散弾ビームも撃てる特殊なタイプ。

そこで、モビルスーツ本体ではなく、オプション装備として強大なビーム兵器を、基本的には戦闘とは早く敵を発見し、早く攻撃した方が勝利を収める確率は高い。モビルスーツに強大なビーム砲を積むことは、それだけ有利であるといえたが、それには技術的障害もまた多かった。

しかし、基本的には戦闘とは早く敵を発見し、早く攻撃した方が勝利を収める確率は高い。モビルスーツに強大なビーム砲を積むことは、それだけ有利であるといえたが、それには技術的障害もまた多かった。

しかし、結果的にメガ・バズーカ、ランチャーも、メガ・ライダーも、そのコンセプトは後に継がれることがなかった。この背景には、モビルスーツのジェネレーター能力の向上に伴う、

一年戦争の戦訓といえるだろう。後にはモビルスーツ数機用のダメージ、バルーンの射出にも使用される。

⑧メガ・ライダー／メガ・バズーカ、ランチャー
究極の火力をモビルスーツに与えたが……
メガ粒子を使用したビーム兵器の威力は、それまでの兵器にはないものであった。だが、モビルスーツ単体に搭載するには限度があった。しかし、ビームには減衰という現象があり、長距離を攻撃するには、それなりの出力が必要とされた。

器を装備するという案が考案される。こういった考え方は、ジオン公国軍のスクウェアや地球連邦軍のバストライナーという形で一年戦争時から考えられていたものである。グリップス戦役時はエウ・ゴ、ティターンズともにこの長距離砲を開発しており、エウ・ゴはメガ・バズーカ、ランチャー、ティターンズはメガ・ランチャーなどを実戦に投入している。適切なオペレーションが施されると、艦隊単位、モビルスーツを部隊単位での撃滅が可能なる威力があったが、オペレーション自体が難しいこと、莫大にエネルギーを消費するためにモビルスーツ一機分の予備動力が必要なことなど、その運用に障害が大きいことも問題であり、あくまで大火力のスナイパ

1、伏兵程度の運用しかできないというのも事実だった。そこでエウ・ゴは、このメガ・バズーカ・ランチャー自体に航空機などの支援兵器などの機動力を与えることでこれを解決しようとした。それが第一次ネオ・ジオン戦争時に登場したメガ・ライダーである。

これは、サブ、フライト・システムにメガ・バズーカ・ランチャーを搭載したというコンセプトであり、第一次ネオ・ジオン戦争の時には、エウ・ゴのガンダムチームによって運用され、大きな効果を挙げた。しかし、結果的にメガ・バズーカ、ランチャーも、メガ・ライダーも、そのコンセプトは後に継がれることがなかった。この背景には、モビルスーツのジェネレーター能力の向上に伴う、

⑨トリモチ、ランチャー 戦訓から搭載された 多目的の射出機

モビルスーツの固定装備としては、手部に装備された多目的ランチャーの存在も忘れるべきではないだろう。これは通称トリモチ・ランチャーと呼ばれるもので、粘度の高い物体を射出し、近づく人間を拘束したり、コロニーなどの損傷被害を簡易的に軽減するなど、といった用途に使用される。これも、一年戦争の戦訓といえるだろう。

[MATCH No.1]

RX-178

MSN-00100

ガンダムMk-II vs 百式

グリブス戦役初期から第一次ネオ・ジオン戦争を戦ったガンダムMk-IIと百式。どちらも実績

のある機体だが、この2機を比べた場合、そして戦った場合どのような結果になるのだろうか。



↑実験機でもある百式はコンセプトも決っており、そもそもクワトロの技量に合わせて設計された面があると考えられる。エースパイロットクラスでなければ性能は引き出づらひだる。

↓スペックはアップデートされながら、従来の稼働性でまとめられているガンダムMk-II。保守的な設計といえるが、それだけに扱いやすい面があったというのは事実だ。



ガンダムMk-II	スペック比較	百式
18.5m	諸元値	18.5m
33.4t	本体重量	31.5t
54.1t	全機重量	54.5t
1,930kW	ジェネレーター出力	1,850kW
81,200kg	推力	74,800kg
11,300m	センサー有効半径	11,200m
編組バランゴッド ビームライフル ハイパーバズーカ ビームサーベル	武装	60mmバルカン砲 ビームライフル クレイバズーカ メガ・バズーカ・ランチャー ビームサーベル



THE 対決

一年戦争終結後もモビルスーツは進化し続けた。各時代を代表する機体を比べた場合、どのような結果が見られるのか？ スペックから紐解くモビルスーツの姿はいかに！

構成・文 星★夢介

両者のスペックはほぼ互角 機体に対応できるかが鍵

スペックを見てみると、まず重量はガンダムMk-IIの方が百式より約6%程度重い。だが、意外にもそれほど大きな差ではない。百式はパインダーの重量に相当する部分を脚部の装甲などを省くことによって相殺した、といった印象だ。ガンダムMk-IIはティターンズ工機製でジム・クウエルのひきつらな構造だが、ジム・クウエルの系譜となる機体だが、ジム・クウエルに比べると大幅に軽量化されており、構造材や装甲に用いられるチタン合金セラミック複合材も強度面では、ガンダムMk-IIに近い素材と思われ、つまり装甲に関しては（装甲が施されている部分に関しては）そんなに開きはないだろう。

一方の推力は9%近くガンダムMk-IIの方が高い。しかし機体重量差を考慮すれば、両者の差は実質的にはない。また、どちらもムーバブル・フレームを用いているが、百式のムーバブル・フレームは直線化したガンダムMk-IIのフレームを参照しており、これも大きな差とはならないだろう。

ジェネレーター出力については、ガンダムMk-IIが1930キロワット、百式が1850キロワットで、これも差がないレベルだ。ちなみに両機とも

エネルギーバック式ビーム・ライフルを使用しており、そもそもエネルギー出力の差が与える影響は小さい。

つまりスペック上は、2機はほとんど差がない。アナハイム・エレクトロニクス社、および連邦工機どちらの機体も、このレベルが当時のMS開発におけるある種の上限だった、と考えることができるだろう。大きく異なる点は、従来のスラスターを重視した機体のガンダムMk-IIと、パインダーのAMBACによる機動を重視した百式、ということになる。最新かつ実験的な要素の強いテクノロジであるパインダー機動は、いくつかの面でスラスター機動より優れている部分もあり、デッドウエイトになるパインダーを装備してなお、機体重量が変化しないという意味では、空間機動性は百式にアドバンテージがあると思われる。あくまで宇宙空間での話ではあるが。

百式はその優れた空間機動でガンダムMk-IIの虚を突き撃破することが求められる。その際には、パイロットは多少特殊であろう百式の機体機動をよく理解する必要がある。スペック上はほぼ同じにもかかわらず、アバガ隊において百式がほぼクワトロ専用機だったのに対し、ガンダムMk-IIは複数のパイロットが搭乗した理由も、機体の機動の理解という観点で見ると興味深いかもしれない。

vガンダムvsサザビー

「シャアとアムロがそれぞれ自身のためにオーダーしたニュータイプ専用機」というイメージが強い



↑「総帥専用機」に相応しい最高のスペックを与えること自体は間違ではなく、AE社的な発想だ（設計はネオ・ジオンではあるが）。実戦での集結がνガンダム以上に足りなかったということだろうか。

vガンダムとサザビー。実際の戦闘ではνガンダムが圧勝しているが、あの結果は必然なのだろうか。

↓νガンダムは急造であり調整不足ではあったがバランスの良い設計で、一般MSとの戦闘からNT専用機との対決まで対応できた。そして何よりアムロ・レイの技量の高さが勝利に貢献したといえる。



νガンダム	スペック比較	サザビー
22.0m	頭頂高	23.0m
27.9t	本体重量	30.5t
63.0t	全機重量	71.2t
2,930kW	ジェネレーター出力	3,960kW
97,800kg	推力	133,000kg
21,300m	センサー有効半径	22,600m
90mmバルカン砲 ビームライフル νハイパーバズーカ フィン・ファンネル シールド内蔵ミサイル シールドビームキャノン	武装	ビーム・ショット・ライフル ビームマホーク ビームサーベル ファンネル シールド内蔵ミサイル 拡散メカ粒子砲



スペックに溺れたサザビー あくまで堅実なνガンダム

サザビーとνガンダムは、どちらもファンネルを装備したニュータイプ（NT）専用機だが、そのコンセプトは大きく異なる。スペックを見ても推力は30%近くサザビーの方が高く設定されており、その一方で本体重量の差は約2・5トンだ。サザビーは大推力・大量の推進剤で高機動を実現し、νガンダムはそれよりは抑えたポイントでバランスを取っているとみられる。

ジェネレーター出力についても、サザビーのほうが約1000キロワットほど高いが、νガンダムも特別低くはない。むしろファンネルの充電やメガ粒子砲の駆動にも出力を当てなければいけないサザビーは、肝心な場面でパワーダウンをきたしたこともあった。νガンダムはフィン・ファンネルにジェネレーターを搭載する一方で、本体には余計な火砲を内蔵せず、安定性を重視した設計だ。

サイコミュ装備に関する思想も異なる。サザビーの場合は従来型のファンネル搭載機に近く、サイコフレームを用いて、高レベルなサイコミュシステムで6基のファンネルを操るといふもの。一方のνガンダムの場合、コクピット周りに配したサイコミュ受信パケットで相手の感応波を受信するという機

能が、これまでのNT専用機にあまり見られない機能だ。これはサイコミュを兵装のコントロールに用いるというより、パイロットの補助として用いる使い方。フィン・ファンネル本体もジェネレーターを内蔵し、長時間稼働に耐え、出力をアップすることに対して、バリアの形成も可能という、新機軸を盛り込んでいる。これも、パイロットを補うという方向への進化だ。また、武装もνガンダムがフィン・ファンネルからニュー・ハイパー・バズーカまで多彩な武装を備えているのに対し、サザビーはより装備の種類が少なく、実体弾兵装にも乏しい。

サザビーは高い技術をもつて機体スペックを高めることに注力し、パイロットのサイコミュ能力を純粹に攻撃（ファンネルの操作）に用いるというコンセプトで開発された機体といえる。一方のνガンダムはMSに必要な要素を高バランスで盛り込み、パイロットや機体を補助するものとしてサイコミュを搭載した機体だ。そのためνガンダムは不測の事態にも対応しやすく、安定して能力を発揮できる。そしてそれが、乱戦の後の一騎打ちでの勝利に結びついたといえるだろう。

『実戦』においてMSが必要としているものが何かを経験によって的確に、νガンダムに実装させたアムロの実力恐るべしである。

MSZ-006

Zガンダムvsティターンズ&連邦軍可変機

グリプス戦役はまさに可変MS百花繚乱の時代だったが、それら可変MSが戦ったらどうなるのだろ

うか。やはりZガンダムが最優秀機なのか!? グリプス戦後最強可変MSとは!?



PMX-000
メッサー



NRX-044
アッシマー



MSZ-006
Zガンダム



ORX-005
ギャブラン



RX-139
ハンブラビ



RX-110
ガブスレイ

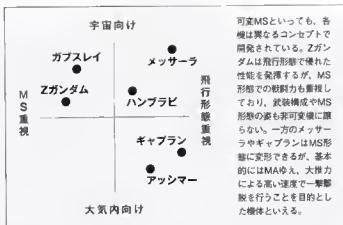
スペック比較	Zガンダム	ギャブラン	アッシマー	ガブスレイ	メッサー	ハンブラビ
適頂高	19.85m	19.8m	19.3m	18.5m	23.0m	19.9m
本体重量	28.7t	50.7t	41.1t	32.6t	37.3t	34.8t
全備重量	62.3t	94.2t	63.8t	56.2t	89.1t	56.9t
ジェネレーター出力	2,020kW	3,040kW	2,010kW	1,800kW	4,900kW	1,540kW
推力	112,600kg	183,000kg	94,200kg (M A形時)	277,200kg (M A形時)	96,000kg (主機6基)	59,800kg
センサー有効半径	14,000m	13,000m	10,200m	10,900m	11,300m	10,020m
武装	バルカン砲 ビーム・ライフル 2連装グレナード・ランチャー ビーム・サーベル シールド内蔵ミサイル ハイパー・メガ・ランチャー	バインダー内蔵 ビーム・ライフル ビーム・サーベル	専用ビーム・ライフル ビーム・ライフル	フェダーイン・ライフル 肩蔵メガ粒子砲 クロー・アーム	メガ粒子砲 グレナード・ランチャー 9連ミサイルポッド クロー・アーム	ビーム・ライフル フェダーイン・ライフル 肩蔵ビーム・ライフル サークルランス ビーム・サーベル クロー 胸ヘビ

重量については、ガンダリウム合金やムーバブル・フレームといった新技術を採用しているZガンダムが29トン弱と、6機中最軽量だ。推力も重量比で考えると、ガブスレイに次ぐ優秀な値だ。反対にギャブランおよびアッシ

マーは、推進力の搭載量も少ないとみられる。スペック上は高性能だが、実際にはフルで能力を発揮できる時間は長くないという点だ。また、メッサーの推力は96,000キロだが、これは主基6発分の推力とされ、実際にはもっと高いと思われる。なお、Zガンダムは各機の間ともいえる112,600キロ。

ここで今回取り上げるのは、上記の6機の可変MSとM Aだ。まずざっとスペックを比べてみると、同じ可変機といっても大きな差がある。まずスラスト・推力だが、ハンブラビは59800キロで当時の非可変MSと比べてもやや低い。それに対してギャブランは24360000キロ（ブースター装着時。非装着時は1830000キロ）と非常に高い数値だ。1G下の大気圏内を推力でもって強引に飛行させるといふコンセプトゆえの値だ。ガブスレイに至っては、ギャブランすら上回る。

Zガンダムのふたつの武器それは軽さとセンサー

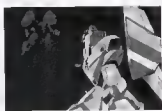


可変MSといっても、各機は異なるコンセプトで開発されている。Zガンダムは飛行形態で優れた性能を発揮するが、MS形態での戦力も重視しており、武装構成やMS形態の姿も非可変機に譲らない。一方のメッサーラやキャプランはMS形態に变形できるが、基本的にはMAゆえ、大推力による高い速度で一撃離脱を行うことを目的とした機体といえる。



▶高推力で武装も強力なガブスレイ。飛行形態とMS形態を使い分けるだけではなく、飛行形態や中間形態においてもローロによる攻撃が可能という新機構を備えていた。ジェネレーター出力の低さが気きどころ。

▶MS形態をとれるが、コンセプトとしては大推力のMAとして、その側面を重視して開発されたメッサーラ。木星圏の高重力下での運用を想定しているためだが、無重力状態においては凄まじい速度を誇る。



▶多彩な武装とチームプレイにより、初見では対応困難なハンブラビ。スベックは飛びぬけて高くないが、非常に実戦的である。MA形態への変形も機体への戦術的幅を広くとるため案外なものかもしれない。

▶アッシュマーやキャプランなど、1G下の大気圏内で飛行可能な可変MAを開発した連邦軍。宇宙からの降下作戦を恐れていたのだらう。非ムーンバブル・フレーム機のための、機体重量はどちらにも重め。



マリーなど推力は高い反面、機体はかなり重い。実戦において起こりうる戦況を想定すると、大気圏を突破してくるZガンダムおよび降下部隊に対し、まずは拠点からキャプランが緊急発進、高高度でこれを迎撃する(キャプランの大推力はこのためのものである)。Zガンダムはキャプランに味方を攻撃させず、これを撃墜するのが使命となるだろう。同様のウェイブライダー形態は大気圏突入に最適化された形状ではあるが、大気圏内での空戦能力も高い推力と軽い機体重量で一定以上の水準を確保する。一方のキャプランはいつてみればロケットのようなもので、本体重量も重い。超高高度での空戦能力が

高いかといえば、実際はそれほどでもないだろう(大気圏内ではなかったが、キャプランに搭乗したヤザンに動きが硬いと指摘されたことがある)。またZガンダムはセンサー有効範囲が1400メートルと、この6機中でもっとも高く、アビオニクスに優れている。時間は短いアウトレンジャーから射撃ができ、接近後の空戦にも優位なZガンダムの勝算が高いだろう。

そして要撃にあたってきたキャプランをかくいくつた降下部隊は、高高度で今度ではアッシュマーの編隊と戦うことになるだろう。アッシュマーは重量の重さを補うためか、自由落下の速度と自身の推力をプラスするという、縦方向での一撃離脱戦法を得意としている。Zガンダムは上下方向にも攻撃のしやすいMS形態で戦つてみられるが、飛行形態同士で戦う状況となれば、Zガンダムが推力/重量比や機体形状を含めた運動性の面で有利だ。

宇宙での戦いは、ガブスレイが相手の場合、Zガンダムの推力は大きく劣り、一撃離脱戦法など速度の差が顕著に現れる戦い方では不利だ。反面、センサーの能力はZガンダムが高く、アウトレンジャーから攻撃するが有利な位置取りから一撃離脱攻撃(Zガンダムの速力ももちろん低くない)を加える、というのがベストだ。推力の割に搭載燃料が少ない点を突いて持久戦に持ち

込むのも手かもしれない。また、ガブスレイは強力なビーム兵器を複数装備している割に、ジェネレーター出力が1800キロワットと低く、武装の過使用によるパワーダウンがあればそこが隙となるはずだ。

メッサーラは主スラスター6基の推力と重量を考えれば運動性において、Zガンダムが優位ではあるが、武装も強力で主スラスター以外の推力も高いので油断はならない相手だ。ここでもやはり決め手はセンサーの能力となってくるかもしれない。

他方、侮れないのはハンブラビ。スベック的にはごく普通だが、ウェイブライダー形態のZガンダムにも迫る速度を発揮することすらある。また、実際に搭乗したパイロットもスベック以上に優れた部分を感じていた。特殊な武装が多く、初見では見切るのが難しいというのも戦場という状況においては有効に働

大気圏突撃能力という一種の局地戦調機的な性格のZガンダムだが、このようにみていくと、その推力の高さと機体の軽さ、そしてパイオセンサーなども含めた電子機器の性能のおかげで、他の可変MSとも互角以上に渡り合えるMSだということになる。そこにカミーユ・ビタンとのニュータイプ能力が加われば、グリプス戦役で名を馳せた機体となるのも納得だ。

モビルスーツを中心とした 新たな兵器体系を築くV作戦

一年戦争端緒の戦いにおいて、地球連邦軍の一方的敗戦（実際にはジオン公国軍側の被害も甚大だった）の原因こそが、ジオン公国軍の新兵器であるモビルスーツ・ザクであった。この新兵器こそジオン公国をして圧倒的な国力差を顧みることなく、全面戦争に突入させた要因の一つだった。

そして、地球連邦軍にとってモビルスーツの配備は、勝利のための必須条件だった。かくして宇宙世紀0079年4月1日、地球連邦軍のモビルスーツ開発計画「V作戦」が発動される。V作戦とは、作戦と銘打たれているものの、実際のところは作戦というよりは軍事ドクトリンと兵器体系の見直しといえるものであった。

実際に前年の宇宙世紀0078年3月に、モビルスーツ開発計画であるRX計画がスタートしている。しかし、この時点のモビルスーツの戦略・戦術的価値はそれほど高くなく、RX計画自体も、仮想敵であるジオン公国軍の新兵器の総合的な評価が中心だったとわいられている。

それが一転してV作戦ではモビルスーツの開発・量産、ならびにその母艦となる艦艇の建造と、それらを使用した運用方法の確立、さらにはモビルス

ーツを中心とした一大兵器体系を確立することまで視野に入っていた。その開発方針は、まず長距離支援型、中距離支援型、汎用（自衛戦）型という3つのコンセプトの機体を製作し、それをベースに実際の戦略にフィッットした（生産や配備の上で適切な）普及型を開発するというものだった。

RGM-79ジムが優秀だったのはザクの孫機であつたから!?

このV作戦の成果として、RX-75ガンタンク／77ガンキャノン／78ガンダムのRXシリーズの各機体が完成する。その特徴は最大には3つあった。一つは、コア・ブロック・システムの採用。これは搭乗員の生存性の向上と教育型コンピュータの戦闘データを確実に持ち帰るためのシステムだ。

もう一つは防御性能の拡充である。実際、RXシリーズが一年戦争最強の機体と評価されているが、この装甲による功績が大きい。

最後はビーム兵器の採用だ。光学兵器分野は、地球連邦軍がジオン公国軍を技術的に上回っていた数少ない分野の一つで、モビルスーツの主武装「ビーム・ライフル」は艦艇の主砲なみの性能を実現した。

実際に、汎用型と、砲撃支援型、重火力型という3つの要素は、戦場で効果的に作用した。といっても、汎用型

V作戦、 GP計画 そしてZ計画

宇宙世紀80年代のMS開発

ガンダムの開発計画と言えば、V作戦とRX計画、GP計画、Z計画などが知られている。それらはどのような関係にあるのだろうか。ここではガンダムを中心とした80年代のモビルスーツ開発計画の関係について考察してみよう。

文 市ヶ谷ハジメ

ではとどのミッシェンは済むもので、その数は圧倒的に汎用型が多く、3機種の重要度は均一ではなかった。しかし、モビルスーツは、ある程度機能に特化する方が効果的であるということも分かっていた。地球連邦軍は3つの基本形から、戦場の要望に合わせてフィッットさせる開発方針で、ジオン公国軍は既存の機体であるMS・06ザクIIなどから、様々なサブタイプを開発する方針であった。

これは、最終的にはほぼ同じであるといえるが、地球連邦軍の方が、大規模であり、予算がかかる代わりに開発の即応性は早いという特性があった。結果的に地球連邦軍のRGM-79ジムは、ベースの機体としても優秀なものであり、戦中、戦後にわたって様々なサブタイプが登場し、宇宙世紀90年代まで運用されている。では地球連邦軍にとって初のモビルスーツ開発であるジムは、なぜそこまで成功したのか。通常ノウハウの少ない中で開発は、何らかのトラブルはあるはずだ。もちろん、開発ターゲットとしてのMS・06ザクIIの存在は当然あるだろう。ザ



クを徹底的に研究して、そこから発展していった技術ゆえに、ある程度の技術的保障はあったというのだ。

もう一つはRX計画の存在だ。金に糸目を付けずに新技術も多数投入した試作機(RXシリーズ)を開発、その中で信頼性を保障されたものを採用し組み上げていく。つまり、ジムとして組み上がった時点で、一定の信頼は保障され、機体全体としても発展性のあ

るものが出来上がるのだ。

ジオン公国軍はMS-05ザクIの使用を通じて得たノウハウで、決定版であるザクIIを完成させた。ジムは、ある意味ザクIの孫機であり、ガンダムの子機である。つまり、ロールアウトした時点で、完成度が高いのは当然ともいえるのだ。

GP計画ⅡRX・78ガンダム リニューアル・プロジェクト!

そして、戦後の地球連邦軍の新規モビルスーツ開発も、この手法が取り入れられる事となる。それは宇宙世紀0083年に登場した、地球連邦軍とアナハイム・エレクトロニクス(AE社)の共同開発となったガンダム開発(GP)計画である。

この開発計画も、まず試作機(プロトタイプ)は、機体設計に余裕のある実験機を開発し、先進のテクノロジーを投入する、という点で先のV作戦と

同義といえるだろう。RGMシリーズの時と違うのは、ベース(ベンチマーク)となった機体がザクIIではなく、RX・78ガンダムと、戦後にジオン公国軍から接収した技術であったということだ。

ガンダムをベースに再設計し、戦訓や様々な新テクノロジーを投入した新たなRX計画、それこそがGP計画の本質といえる。

実際、本シリーズの型式番号はRX・78のままである事からも、技術的にもRX・78直系の機体であることが分かる。当時の主力機であるRGM・79のN型(ジム・カスター)は、RX・78NT-1アレックスをベースにしていた。そういった意味では既存の機体を突き詰めたRGM・79N型と、RX・78自体の可能性を広げるGP計画の機体は親戚関係といえるだろう。

RX計画に繋がる GP計画の本質

RX・78 GP01ガンダム試作1号機は汎用型であり、RX・78の進化・発展型といえるものだ。最大の特徴は地上型と宇宙型を分けて開発されたことで、特に宇宙型(フルバーニアン)は、空間機動性に特化していた。

続くRX・78 GP02ガンダム試作2号機は、RX・77ガンキャノン同様の支援型と言っていいたいだろう。しかし、

中距離支援型のガンキャノンだが、実際戦場においては、汎用型との随伴、および直援というミッションが多かった。ガンダム試作2号機は、空間機動性などをより重視しつつ、戦術核装備とせう、支援型より一歩踏み込んだコンセプトが投入された。

もっとも変化があったのが、重火力による長距離支援型であろう。RX・75ガンタナは、戦場での需要はそれほど多くなく、またモビルスーツでは必要性能も少ない。そしてモビルスーツのビーム兵器搭載によって、その重要性は著しく低下した。実体弾による遠距離砲撃は依然必要だったものの、通常の火砲で代用できる。こういったことから、火力面はモビルアーマー的なコンセプトに移行することになる。

戦場でのモビルアーマーは、モビルスーツをはるかに凌ぐ大きさで、それを利用してスピードや火力などに特化した機体で、戦場でインパクトのある存在であることを証明した。

しかし、こうしたインパクトの代表格である、ソロモ攻略戦でのジオン公国軍が投入したMA-08ビッグ・ザムの活躍は、驚異的ではあったものの、最終的には1機のモビルスーツと戦闘爆撃機の攻撃によって撃破されている。こうしたビッグ・ザムのように一機で艦隊レベルを相手にできる兵器でありながら、かつ近接戦闘にも対応できる機

体として開発されたのが、RX・78 GP03ガンダム試作3号機(アンドロビウム)である。

こうして考えると、GP計画は、RX計画の成功と、一年戦争の戦訓を下敷きにして成立した計画であることが分かる。

GP計画の中で の野心作 ガンダム試作3号機

さらにこのGP計画では、いくつかの新コンセプトの実験がなされている。ひとつはガンダム試作3号機の兵器ユニット、オーキスの制御ユニットとしての役割を持つRX・78 GP03Sガンダム試作3号機ステイメンである。

本機は、火器管制システムは強化されているだろうが、実質上、汎用モビルスーツに近かった。本来であればガンダム試作1号機にオーキスの制御系を搭載する方向性もたはずだ。実際面では、カテゴリー上はそれほど差がなく、単体の性能としては同時代トップクラスの機体だ。

ではなぜガンダム試作3号機ステイメンは作られたのか。

本機の外見上の特徴は、大型のバイナダーを搭載している点だろう。バイナダーは、それ自身がスラスター・ユニットを内蔵しているものの、可動することで推進剤の消費をせずに機体運動が可能なAMBAC機能を持たせて

らう。

GP計画は本当に抹消された計画だったのか？

いると考えられる。このバインダーでAMBACを積極的に機体機動に利用する方式は、一年戦争後に出現した考え方であり、その後のA.E.C.社の技術陣はその可能性を探っていくことになる。その他にも全周開モニターなど、次世代に繋がる新機軸の技術が多数盛り込まれている。

そう考えると本機の役割は、オーソドックスな進化系のガンダム試作1号機と並び、最新技術を投入したもう一つの汎用型の試作機と考えるべきだろう。おそらくGP計画の最終段階で、どちらか使用実績の優れた方が生産型の母体になるのだろう。革新と保守、ここからもうGP計画の本質が伺える。

もうひとつがRX-78GP04ガンダム試作4号機ガベラである。こちらの方は、強襲型という、一年戦争当時には最新のモビルスーツ運用の考え方の機体だ。これは、MS-18Eケンパフアーや、MS-14MゲルググM(マリニー)など、対戦末期にジオン公国軍で盛んに製造されていた機種である。要塞やコロニー制圧の際、強行突入用の機体というコンセプトは、一年戦争には合っていた。しかし、これも宇宙世紀0080年代半ばにはあまり使われなくなった。おそらくこれも、ビーム兵器の普及により、モビルスーツの戦闘レンジがより広範囲になると同時に、重要度が低くなっていったのだ

歴史的には、このGP計画は「アラース紛争」において、A.E.C.社がガンダム試作4号機ガベラ(IIガベラ・テトラ)を旧ジオン軍残党に供与したことや、連邦軍内の政治スキャンダルによって中止され、全ての記録が抹消されたのである。

しかし、兵器開発は多分に政治的な要素と経済的な要素を含むもので、数千億円、時には数兆円単位の資金を投入するものでもある。また、技術開発の成果も、単純に政治スキャンダル絡みだからといって消すことが可能なのではないだろう。むしろ、これらを別の側面から見えていくと、面白いことが分かってくる。まず、「アラース紛争」以降の地球連邦軍におけるモビルスーツ開発行政を見ていこう。

当時のモビルスーツ開発は、ジオン公国のモビルスーツメーカーを傘下に入れたA.E.C.社が最大のメーカーであったが、モビルスーツ開発自体は、北にある地球連邦軍のオーガス社、オースランドなどの研究所や、後にサナリイ(海軍戦略研究所)となる戦略戦術研究所、そしてティターンズなどでも行われていた。

これらは基本的には地球連邦政府が

バックについていた公的機関だが、おそらくその開発・生産には民間企業の資本や人員が数多く参入していたことだろう。なぜなら、政府機関がそこまでの施設や人員を持っていると効率が悪いくらいだ。A.E.C.社はジオン系企業を買収したため企業名が表に出ていたが、モビルスーツの生産・開発を行う企業は同社だけではないだろう。

そして、「アラース紛争」以降、ティターンズでは、RGM-79ジムの最終型とも言えるQ型(ジム・クワイル)をベースにして、ムーバブル・フレイルムという新機軸を採用したRX-178ガンダムMK-IIを開発した。

一方前述の研究所では、ORX-005ギアブラン、NRX-0044アツシマーといった可変モビルアーマーなどを開発している。こうした様々な施設の様々な新テクノロジーが、第一世代、第三世代モビルスーツ開発の礎となっていた。

A.E.C.社が、GP計画の一部を旧ジオン軍残党に渡したことは、一幹部の独断とされるが、それがどこまで本当かは怪しい。一方でそのことが理由となり、地球連邦軍の肝煎りだった計画の発注がなされなかったことも事実。あるいは、一連の記録の抹消に至るまでの過程は、その他の勢力のロビー活動の成果で、名目的に抹消という形で、事実上は単なる中止の可能性もある。

技術的イノベーションとZ計画の発動

ともかくも宇宙世紀0087年のグリプス戦役の頃には、新しい技術が、実際の配備機という形で現れる。これらは偶然ではなく、技術開発の成果がちょうど形になったということの表れだろう。

そして、この当時、A.E.C.社では「Z計画」が進行していた。最終的には可変モビルスーツであるZガンダム開発に至る計画といわれているが、それはどうにも怪しい。なぜなら、MSZ-006 Zガンダムに続き、MSZ-010 ZZガンダム、MSA-0011 Zガンダムといった機体を矢継ぎ早に開発しているからだ。そしてこれらのモビルスーツの特徴を考えると、面白いことが分かってくる。

大気圏突入という特徴を与えられていたものの、後の生産型であるZガンダムなどを考えると、汎用型ともいえるZガンダム、砲撃型であるZZガンダム、そして拠点攻略(防衛)型であるSガンダムという用途を考えると、そのコンセプトは見事にGP計画のそれと同じと見ることができそう。

一方、GP計画の次にA.E.C.社が手がけたのは、4年後の宇宙世紀0087年に登場したRMS-099リリック・ディアスであった。この機体構成を見

2つの計画に見るMSの用途

Z計画

MSZ-006 Zガンダム

可変MSの代表で、第3世代MSの本機だが、基本的には中距離から近接戦闘を主体とした白兵戦用の機体である。ただ、これ自体で長距離攻撃も可能なので、その印象は薄いのだが。



MSZ-010 ZZガンダム

本来ならば支援攻撃に向いた機体と考えられるが、単機での戦闘もこなす戦力も持ち合わせている。ただ、後にフルアーマー化されるので、装甲面などを犠牲にしていた可能性も。



MSA-0011 Sガンダム

機体の構成要素はZZガンダムに類似している。強化型のEx-Sガンダムになると、その性格がガラリと変わる。当時としてはMSの能力の限界値に挑戦した機体と捉えることもできる。



汎用(白兵戦)型

中距離支援型

機体防衛(攻略)型

GP計画

RX-78GP01 ガンダム試作1号機

地上用、宇宙用に装備を換装することで汎用性の拡充を図った。コア・プロック・システムを採用している点もガンダムに適する。ただし、本機の場合は脱出装置の意味合いが強い。



RX-78GP02 ガンダム試作2号機

主に旧ジオン公国系の技術者が開発に携わったといわれる。戦術術の使用を前提にしているものの、バリエーションには多弾頭ミサイルを装備した機体も存在する。

RX-78GP03 ガンダム試作3号機

兵器ユニット(オーキス)をMSがコントロールするため近接戦闘にも対応できる。1年戦争での対MA戦もAE社なりに分析した結果かもしれない。デンドロビウムは開発用コードネームだ。



ると、ガンダリウム合金の採用、ムーバブル・フレーム対応など、当時最新のテクノロジーを備えているが、全天候型ミサイル、補助機動装置にパイロットを採用するなど、ガンダム試作3号機は要素も備えている。

本機は実際、形こそジオン系のシルエットだが、ガンダム試作3号機もジオン系チームが開発していたことを考えても、先の経験を活かした機体と考える方が自然で、それは可変機への過程にあったMSN-00100百式も同様だろう。つまり、GP計画の生産型は新技術の登場により陳腐化したため、その資産を活かしながら新技術を取り入れ、新たな計画が立ち上がったということだ。

RX計画をベースにGP計画があったように、GP計画をベースにして、新技術投入して量産機が作られ、さらにその発展を試みて、新技術の投入を行ったのがZ計画と考えるべきだろう。GP計画を経た成果としてリック・ディアスがあり、百式はZ計画の端緒となり、Zガンダムへと繋がっている。

Zガンダムのムーバブル・フレームは、ガンダムMK-IIのその影響を受けている。ティターンズはRGM系の到達点としてガンダムMK-IIを開発しているといえるが(その成果はRMS-154バーザム、RGM-86

RMS-154バーザム、RGM-86

宇宙世紀90年代のZ計画の成果

こうしてRX-78ガンダムを祖とする「次期主力機の実験機としての強力な試作機」という流れは、GP計画を通じて、Z計画でも踏襲された。

そしてZ計画の中心である量産機は、ひとつはRGZ-95リゼールという形で宇宙世紀0090年代に花開く。そしてもう一つは汎用型の傑作機、RGM-89ジェガンに結実している。この機体ではZガンダムの特徴のひとつである軽量化のノウハウを活かして、一般汎用モデルスーツにおける革命をもたらしたのである。

そして、そのあと30年ほどは、地球圏に一応の平和が訪れたため、新規のモデルスーツ開発は停滞し、次の動きは20年以上先の小型化のムーブメントにおいてであった。そして、その頃にはすでにRX計画を祖とするような開発方法は取られてはいない。時代の流れは、ここで断絶しているのである。



可変MS戦術論



宇宙世紀の世界では、可変機はどのように使われていたのか

可変機が存在意義、それは設定レベルではある程度の説得力を持ったものが存在するが、実際の戦場での様相はよく分からないとも言える。それでは可変モビルスーツ（MS）はどのように使われていたのだろうか。実際の戦術について考えてみたい。

文 矢吹明紀

使用目的が明確な現実の可変機 デメリット解消のための変形MS

いわゆる可変機構を付加した機体に関して、『機動戦士Zガンダム』の世界における誕生の動機と歩み、そして現実世界における繁栄と終焉を踏まえて、ここからは可変機能を備えた機体を運用するにあたっての有効な戦術及びその得失を考察してみることしたい。

現実世界における可変機構の中でも、可変後退翼は主として低中速域と高速域の双方において、良好な飛行特性と戦術任務をこなせる、汎用性を持たせることが目的だった。すなわち航空機自体に、他の可変機構を持たない機体を凌駕する多目的性能が求められていたということである。

ひとくちに多目的性能といっても、その任務は多種多様であり、たとえばF・111の場合などは、長距離を高

速で移動してからの中速で地形を回避しながら目標に向かい、精密爆撃を行うといった任務が課せられていた。対してF・14の場合は、専用装備でもあったフェニックス長距離空対空ミサイルを使った高速での機動戦と、機関砲を使った近接格闘戦を共に高いレベルでこなすためだった。この異なる速度域での戦術を一機種でこなすことができない可変機構という概念は、西側東側を問わず他の機体もほぼ同じ理由で導入された。

ちなみにV.T.O.L（垂直離着陸）機の場合はヘリコプターと固定翼機それぞれのメリットを両立させるために考案された可変機構であり、想定していた戦術的には遙かにシンプルだった。要するに重武装かつ高速移動が可能な戦術機を、必要に応じて飛行場を使うことなく運用することが目的ということである。

これら現実世界での可変機構機運用

に対して、ガンダム世界における可変機構の必然性は少々様子が異なっていた。それは第一義的理由が別構で記した通り、大気圏内での機動性を高めるために、空力性能を洗練すること、そして宇宙空間における直線的な機動性の向上。第二義的には、宇宙空間から大気圏内までスムーズかつ安全に移動するための可変機構だったという点である。なお、この二つの存在意義の優先順位は逆であるという考察もある。

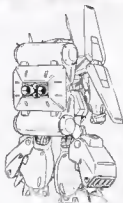
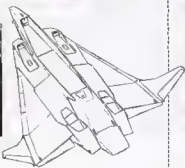
大気圏突入能力より 飛行能力が重要な機能である！

これら二つのことがMSを運用するにあたり、大きな技術課題だったことは、『機動戦士ガンダム』でも象徴的に描かれている。限定的ながらも大気圏突入用の簡易シールドとなる装備（冷却フィールドなど）を携帯していた地球連邦軍のRX・78ガンダムに対して、ジオン公国軍のMS・06ザクにはそう

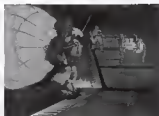
年代にみるMSの大気圏突入方法の変遷

U.C 0087

●フライングアーマー



●バリュート・システム



グリプス戦役時になると、MS単体での大気圏突入もオプション装備でこなすようになっていた。フライングアーマーは後のガンダムへ発展し、バリュートは軽戦クラスの大型のものまでが用意されることもあった。こうしたものが開発されていることを鑑みると、MSによる宙船降下作戦はそれなりの必要性と需要があったという筈だろう。

U.C 0079



RX-78ガンダム

一年戦争時では、ガンダムに付与されていた大気圏突入方法（諸説ある）は、本来MSには過ぎた機能といえた。こうした驚異的な能力は有効であることは間違いないが、MS単体による大気圏突入（宙船降下）は様々な道が模索されることに。

いったん装備がなかった。そのため、離脱が遅れた機体が大気との摩擦で燃え尽きてしまうという例のシーンである。「Zガンダム」の世界観は、設定や技術的にも「ガンダム」を継承する、同じ宇宙世紀を描いた存在である以上、このシーンをないがしろにすることができなかったのは想像に難くない。その上で大気圏突入を想定した形態への変形機能だったというわけである。

ちなみに「Zガンダム」の作品冒頭において、ガンダムの改良型として扱われていたRX-178ガンダムMK-IIでは、変形機能を持たなかった。だがその代わりにフライングアーマーという、大気圏突入シールド兼サブ・フライト・システムになる、飛行アシストデバイスというべき装備が用意されていた。これは機体そのものを変形させることができたZガンダムに至る流れの中では、非常に良く出来ていたメカ設定だったといっていだろう。MSZ-006Zガンダムにおけるウェイブライダーへの変形は、このフライングアーマーの機能を変形によって機体そのものに持たせたものであることは既述の通りである。

本当は航空機の前にはMSは歯が立たない!?

さて大気圏突入を無事終え、1G重労働内かつ相応の空気抵抗が存在する

中でMSを有効に機動させる上で、Zガンダムの変形機能はいかなる働きを見せたのだろうか？ まず、大型の人間型機動兵器であるMSにとって、多大な空気抵抗をもたらす大気及び1Gの重力の存在は全くの足かせ以外の何物でもなかった。MS自体、その空中機動に揚力や抗力による恩恵はまったく受けていないのだから。

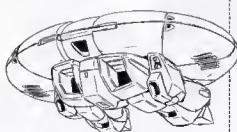
もちろんそのあたりは設計時から想定済みであり、重火器を携帯し地上を移動している分には、いわゆる二足歩行戦車としての有効性は極めて高かった。その上で限定的ながら三次元機動を可能とするために、いわゆるスラストターを使ったジャンプ能力を付加していたのがMSだった。

これについても、たとえば敵の一撃をかわす、もしくは射撃位置を素早く変えるといった動きにおいて、スラストターによる機動はそれなりに有効ではあったものの、敵が本格的な航空機の場合だとMS側にはほとんど為す術はないと推測できる。これは現実世界においても、戦車が対地攻撃機や急降下爆撃機に対してまったくの無力であったことに似ている。

ガンダム世界において、航空機がMS相手にも有利に戦う様はほとんど描かれていないの、実際に戦闘ともなれば航空機側が有利だったことは明らかである。そこで新たな概念として描

可変機にみるMA形態の形状の違い

MA形態

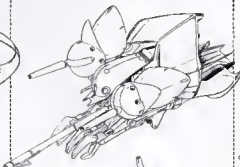


アッシマー
MS形態

NRX-044 アッシマー

こちらは可変機でも可変MAにカテゴライズされる。そのためMS形態より、MA形態がメインで運用されると考えられる。マグネット・コーティングによる可変機構で、変形時間は0.5秒ほど（諸説ある）。

MA形態



ガブスレイ
中間形態

RX-110 ガブスレイ

こちらは宇宙戦専用といわれるガブスレイ。MA形態では、体の各部に設置されたスラスターを一方に集中配置できるため、高い機動力を誇る。可変機のお手本のような機体だが、大量生産には至らず。

ウェイブライダー



Zガンダム
MS形態

MSZ-006 Zガンダム

大気圏突入後も活動できるようにウェイブライダーの形状が考慮されている。ちなみにZガンダム系列機などはMAではなく、ウェイブライダーと呼称することが多い（大気圏突入能力の有無に関わらず）。

かれることとなったのが、Zガンダムとそれ以降のMSにおける航空機（MA）形態への変形だった。実際、大気圏突入よりも、実戦においてはこちらの方がより多くの戦闘現場で有効と判断されたはずである。

飛行能力の獲得により よりマルチタスク化したMS

Zガンダムが飛行形態への変形機能を得たことで、少なくとも高速移動とより高々度も含めた三次元機動において、それまでのMSではあり得なかったレベルでの戦闘能力を獲得したことが、大きな戦力アップに繋がったことはいうまでもない。従来は複雑なスラストコントロールによって維持していた空中での姿勢が、空力による安定を得ることができたのだから。その上で通常の航空機と異なっていたのは、必要に応じて人型機動兵器としてのMS形態に素早く戻すことで、対地支援戦術や精密な地上施設攻撃、そして対MSでの格闘戦も効率良くこなすことができるようになったのは大きい。

これら兵器としての能力と、その戦術性能を現代の実在兵器に当てはめると、それは主力戦闘機、攻撃機、主力戦車、自走砲、対戦車ヘリコプター、VTOL攻撃機のすべてが一体となったものにも等しい。すなわち想定されていた任務はというと、まず

飛行形態において、高々度で待機した上での対ミサイル迎撃、中高度・低高度での迎撃戦闘、低高度での対地攻撃、同じく低高度での対MA戦闘など。そしてMS形態では歩兵支援を行いつつ、の対MS格闘戦、地形を考慮した詳細な進行偵察、ピンポイントでの施設攻撃と破壊、アンブッシュ（待ち伏せ）といった戦闘と推測できる。

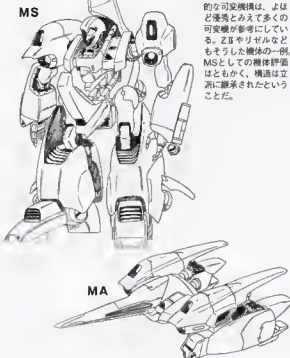
これらは現実世界の兵器運用においても基本的に同じであり、前述したピンポイントでの攻撃などは、精密誘導ミサイルなどを使う場合が多い一方で、攻撃ヘリコプターが装備する大口径の機関砲（30ミリチェーンガンなど）や空対地ミサイル（ヘルファアアなど）の有効性はいまさら声大にして語るまでもない。また機体を山陰などに隠した上での待ち伏せは、もはや対戦車ヘリコプターが最も得意とする戦術であり、これをより大規模かつ先進的なものとしたのがMSによる戦術といっているだろう。

そして何といっても可変機構を備えたMSのメリットは、こうした小回りが効く形態から、必要に応じて素早くかつ安全に飛行形態へとチェンジすることができたことだった。これは現実世界におけるVTOL機のも多様性などとはレベルが異なる、まさに空想の世界の産物ではあるが、言い換えれば兵器としての理想こそが、この大きく異

可変機構のチャンピオン?

MSA-005 メタス

絶望的な可変機構を搭載した可変機は、絶望的な可変機構は、どのような可変機構が参考になっている。Zやリゼルなど、MSとしての機体評価はともかく、構造は立派に継承されたということだ。



なる任務を容易に両立させることが可変形態にあったといつて良いだろう。
**地上とは違う
宇宙空間における可変機の意義**
ちなみにこれらはあくまでも重力と空気の抵抗の影響を強く受ける大気圏内での話であり、このいずれの影響も無関係となる宇宙空間においては基本的に飛行形態、MS形態のいずれでも絶対的なその戦闘能力に大差は生じなかった。
ただし地上戦と同様に特定の基地を攻撃する場合や、その施設内で待ち伏せするといった場合は、いうまでもなくMS形態の方があらゆる面で有利だ

った。要するにスピードがあるか、小回りが効いたかということである。ここでは依然として長距離探索を不可能とするミノフスキー粒子の存在が大きく作用していたという点で、現実世界における地上との戦術とは大きく乖離していた。
宇宙空間において飛行形態が有利だったのは、編隊を組んだ状態での戦闘が効果的だったシーン。たとえば敵の大艦隊を攻撃する場合や敵側がMS形態で大部隊を繰り出して、個別格闘戦では明らかに味方が不利だった場合などが考えられる。すなわち、ミノフスキー粒子による影響ギリギリの距離で、飛行形態のまま編隊を維持しつ

可変機の登場こそ ジオン技術者の夢!?

つ、長距離兵器で敵側のMSをアウトレンジするといった戦術こそが有効だったと推測できる。
とはいえ、エウゴもティターンズも、その製造コストの高さゆえに可変機構を備えたMSの配備は、ごく一部のエリート部隊もしくはエースパイロットのみだったと思われるため、実際にはパイロット個々の能力を最大限に発揮できるMS形態での運用が大半を占めていたことは、「Zガンダム」本編でもしっかりと描かれている。

今回は現実世界における可変機構を備えた兵器との比較運用論という大前提があったため、あえて飛行形態での得失まで言及したものの、冒頭に記した通り飛行形態の存在意義はあくまで大気圏突入と大気圏内での飛行性能の向上こそが目的であり、宇宙空間においてはMS形態による単機格闘戦こそがMSによる戦いの醍醐味だったに違いないだろう。

一年戦争におけるMSは、地球連邦・ジオン公国いずれにおいても、任務に応じて微妙に、もしくは大きく異なるその基本形態と装備を変えている場合が多かった。連邦軍側でいえばRX-75ガンタンクやRX-77ガンキャノンなどはその代表であるし、ジオン公国

軍側のMS-07Bグフなどは、形態こそそれまでのMS(「ザク」)に準じていたものの、格闘戦に特化していたという意味では、特殊用途の異種に他ならなかった。さらにジオン公国軍の場合、MSには向かない任務にはより大型のMAを戦線に投入している。そういう意味では、後の形態可変による任務の多様性の重要度により強く認識していたことは間違いない。

「Zガンダム」におけるMSの系譜は、地球連邦とその特権階級集団だったティターンズの場合、当初ジオン公国が残した基本技術を継承しMSの改修を行っていた。その代表機がいわゆるRMS-106ハイザックである。対して反政府組織だったエウゴの場合、いずれのサイドからも独立していた民間企業であるアナハイム・エレクトロニクス社との共同開発によるZ計画で、装備するMSを一新する道を選択したわけだが、特にここでMSA-005メタスという可変機構試作機があったことは、後のZガンダムなどに大きな影響を及ぼした。

メタスのコンセプトは、変形によるMSとMAの融合であり、そこには旧ジオン公国のエンジニアが抱いていた、ある種の理想があったのではないかと推測できる。そもそもMAという概念は、ジオン公国側がリードしていたのだから。

可変モビルスーツと 現実世界の可変航空機

その共通項と相違点

「機動戦士Zガンダム」の可変機が、当時の玩具的な流行を取り入れて登場したことは有名な話だが、一方で放送当時は実際の航空機の世界でも可変機が全盛といえる時代でもあった。そして、これらの可変機が存在が可変モビルスーツに与えた影響もまた、少なくないだろう。ここでは、可変航空機と可変モビルスーツの存在意義の差を考えたうえで、両者の共通項と相違点を探ってみることにしよう。

文・矢野龍記

70年代に花開いた 可変戦闘機だが……

現代、兵器の中でも航空機に関する様々な可変メカというものは、一時期に比べてその存在価値が低下しているようにも見える。

実際のところ、実用化目前の最新アイテムとしては、アメリカ海兵隊が導入を予定している多目的戦闘攻撃機であるロッキード・マーチンF35BライトニングIIのVTOL機能用可変排気ノズルくらいである。実際に第一線に

おいて運用中である現用機を見ても、アメリカ空軍／海兵隊のティルトロターVTOL機であるベル・ボーイング・ロータークラフトのV-22オスプレイ。そしていずれも可変後退翼を備えるアメリカ空軍の多目的超音速爆撃機のロッキード・イランサー、イギリス／ドイツ／イタリア／サウジアラビアの各空軍で運用中の戦闘攻撃機であるパナヴィアアトーン・IDS／ADVなど数機種に過ぎない。

さらに東側には、かつて旧ソ連で開発されたMIG23、同27、SU17、同

24といった可変後退翼の超音速戦闘機／戦闘攻撃機が相当数残存しているという情報もある。だが、いずれも旧式であり、その進化は既に停止して久しい。唯一Tu160は依然として第一線機のポジションを維持している。一方、前述したB-1ランサーと想定している戦術は同様であることから、今後の去就については先は見えている存在である。

思えば1960年代初めから1970年代にかけてというものが、最新鋭軍用機の世界において、可変後退翼が一



【可変翼機セレクション I】

グラマンF-14 トムキャット



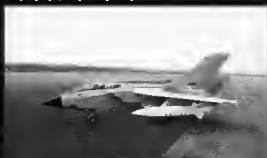
ザ 可変翼機（ミスター・C）といえるくらい、オトコノコノハートを刺激した可変翼戦闘機だ。アニメ作品に与えた影響も少なくない。アメリカ海軍機は2006年に退役してしまっただけ、イラン空軍では現在も活躍している。

ロックウェルB-1 ランサー



アメリカ空軍の超音速爆撃機。可変翼機の一つで開発の機体だが、その用途の特殊性から今も一線級の機体として活躍する。ただ、開発されたのが1965年と古さは否めないか？

パナヴィア トーネード



欧州各国で開発の可変翼機。同時代に誕生した機体の多くが退役するなか、湾岸戦争やイラク戦争などでも活躍している。まだまだ活動の余地はありそうだが、時代の趨勢からすると先行きは不透明だ。

種のブームでもあった。前述した現用もしくは現在では旧式化してしまっている機体、そしてすでに現役を退いているものも含めて、ある時期までに可変翼機は大量生産された。その中でも花形の存在だった超音速攻撃機ジェネラルダイナミクスF-111アーダーバーク、そして革新的な艦上戦闘機だったグラマンF-14 トムキャットなどは、まさにこの年代に基本設計がなされた機体である。

可変後退翼機全盛時代に登場した可変モビルスーツ

これらの中でも最後に挙げたトムキャットは、その形態と主翼の可変メカニズムの素早さから当時から人気

が高く、人気アニメとなった『超時空要塞マクロス』での主役メカでもあった『VF-1 バルキリー』と、その派生シリーズのデザイン設定に及ぼした影響は極めて大きかった。すなわち、それまで独自の世界観で構成されていたアニメメカに、初めて現実世界でのメカが大きな影響を及ぼした存在といつて過言ではなかった。

そうした状況においては、『機動戦士ガンダム』においては、コクピットを兼ねた戦闘機との合体メカこそあったものの、機体そのものが大きく変化する様な可変メカは、基本的に存在しなかった。これに対して、1980年代半ばという、まさに現実世界における可変後退翼機全盛時代に制作された

『機動戦士ガンダム』において、初めて大々的な可変メカが導入されたことは非常に興味深い。

ここでは現実世界の軍用機における可変メカがどのような目的で誕生し、そして時代の流れと共に消えていったのかを簡単に述べておきたい。その上で現実世界での全盛期とほぼ時を同じくして誕生したZガンダムにおける可変モビルスーツの存在理由を検証するのが、一番の近道のようにも思える。

技術の発展と戦場の要望において登場した可変機たち

軍用機における可変メカは、主翼取付角を可動とした、いわゆる可変後退翼に端を発する。発想自体は第二次世

界大戦中のドイツで考案されたというのが定説だが、「航空機の飛行速度が増すにつれて、後退角を増した方が良い結果をもたらす」ということは、世界各国の航空技術者にとって半ば常識で、後には実用化に向けて動き出すか？ という段階だった。

結局、敗戦によってドイツ本国での可変後退翼機の運用化はならなかったものの、戦後にその技術のバックボーンを引き継いだアメリカと旧ソ連によって、この技術は実用化に向けて着々と動き出すこととなった。ただし、当初はどうしても構造が複雑となり、重量増加は避けられず、実用化は難しいとされたい。こうした可変後退翼が一躍実用化の見通しが立ったのは、1960年代に入りエンジンの推力が大幅に増加し、パワフルな余裕が出たこと、そして用兵側からの高速化への欲求が、段と増したことが背景にあったといえるだろう。

具体的には、ようやく音速を安定して超えることができるレールに近づけたのが1950年代の終わりにすぎず、これを受けて、1960年代から1970年代はまさに「マッハ2以上」が最新戦闘機のスタンダードになり、そのためには高速に特化した機体形状の採用と引き換えに、中低速飛行域での扱いやすさを担保するため、空力特性を得る手段として、可変後退翼の実用

化が推進されたのである。

戦後の時代だからこそ必要だった可変モビルスーツ

一方、Zガンダムにおける可変モビルスーツ登場の理由だが、おそらくこういつたことではなかったのかと推測できる。それは一年戦争におけるモビルスーツの太極的な躍進は、ジオン公国軍と地球連邦軍の双方において、モビルスーツを中核とする兵器システムへの急激な進化をもたらした。一方、戦いが終わってみれば社会の疲弊は著しく、政情は依然として不安定であり、経済と戦力の双方を早急に立て直すためには、新規開発していた兵器体系そのものを見直す必要があった。

ここで重要だったのは、より少ない運用コストで「従来品を上回る有効な戦力を保持するため、何が重要か？」というセオリーであり、そのためには数に頼った戦力を高める、たとえ少数でも個々の能力を高めた兵器を運用する、という考え方であった。

もちろん、そこでは従来型のモビルスーツでは明確な弱点とされていた大気圏内で劣る機動性能や、宇宙空間における直線的な機動能力、宇宙空間にさせるか、という新たな命題も浮上してくるようになった。その結果、導き出されたのが「必要に応じて空力的に優れた大気圏内飛行形態に変化させ、

宇宙においては移動用のスラスター類を、ひとつ方向にまとめること」であり、これを可能としたのがZガンダムに代表される可変モビルスーツだったのではないかと、いうことである。こうした観点においては、ある意味、実機の可変機構に似た要望によって登場したといえるかもしれない。

Zガンダムの設計においては、まず一年戦争で勝利した地球連邦において、新体制下における次期主力機として開発されていたRX-178ガンダム Mk-IIの存在が大きな影響を及ぼしていたといわれている。RX-78ガンダムの正常進化型として設計されたこの機体は、可変機構こそ備えていないが、ムーバブル・フレームという新機軸の技術を表裏し、これが後の可変機に及ぼした影響は決して少なくなかった。ガンダム Mk-IIは、地球連邦における特種階級のエリート組織だったティターンズ用に開発された機体だったが、これらティターンズによる不当な政権支配を打破べく立ち上がった反政府組織であるエウゴとの戦いの緒戦において、エウゴ側の手に落ちることとなったのは存じの通り。一方で、エウゴがアナハイム・エレクトロニクス社にオーダーしていた新型機の開発は、当初はデザインに関するくだわりはなかったようだが、一年戦争に勝利した連邦の象徴というべき、

【可変異機セレクションⅡ】

MG-23



旧ソ連のミグ設計局が開発した戦闘機。東欧冷戦終結後は、NATO（北大西洋条約機構）などでも運用されている。その際のコードネームは、発展型のミグ27と同様にフロッガーという（決してバクランツのATではない）。

Su-17



こちらはスホーイ設計局の開発による可変翼機。戦闘機や偵察機として1970年から運用されている。一応、現役機ではあるが、ロシア空軍から徐々に退役している状況だ。現在はポーランド空軍のみだと。

初代ガンダムのイメージを強く抱いたZガンダムへと大きくスイッチしたのは、エウゴこそが連邦の正統継承者であるという強い意志の現れに他ならなかったのだろう。

実際の可変機と同様の悩みが可変モビルスーツにもあった

ともかく、こうしてZガンダムに至る可変機の流れはできたわけだが、その実戦での運用における必然性として、最も重視されていたのは、大気圏突入能力と、その後短時間で戦闘可能な形態へと変形できることだった。

このあたりのコンセプトは、現実世界での可変機における「高速度性能と中

低速度での機動性を両立させる」という考え方とは少し異なっており、単純に比較することは難しいが、要するに当初は不可能と思われていた機体に変えられる能力も、本来なら機体として大きく異なる戦闘さても、機体を変形させることで、両立を目指したという意味では、同様だということができるだろう。

もちろん現実世界における可変機の多くが、開発途中でその構造の複雑化と重量増加、さらに開発コストの上昇に悩まされたということは、おそらくガンダムの世界においても同様であり、重量増加をカバーするためにエンジン出力の向上（ガンダムの場合はジェネ

【可変翼機セレクションⅢ】

F-35BライトニングⅡ



航空自衛隊の採用によるニュースが記憶に新しいステルス機。用途に応じた派生機で対応するスタイルゆえ、複数の機種が存在する（写真はVTOL機のB型）。コスト面や開発の遅れといった文責はMSに近い？

V-22オスプレイ



こちらもニュースで話題の可変翼機。正確にはティルトローター機に分類され、ヘリコプターと飛行機の要素を合体させたような航空機だ（機体は輸送機）。開発自体は1940年代からと、意外と古かったりする。

レター出力とスラスター推力の向上、開発コストを無視できるレベルでの、一部のエアロバイク専用機として量産化は行わない、といった決断と共に、実用化にこぎ着けることができたということである。

実際、こうした特徴はZガンダム本編でも象徴的に描かれている。特に大気圏突入のためのウェイブライダー形態からの直接戦闘などは、当初はあくまで副次的な性能と思われていたウェイブライダーの空力特性が、そのまま戦闘機として機動できるなど、かつての「ガンダム」ではあり得なかったモビルスーツの戦い方が表現されたといつて良い。

さて、Zガンダムにおける可変メカ

は、本編を通じて最終的には多くの進化版が登場することとなる。もちろん可変機はあくまで一部の臨戦パイロットのための存在であり、その他大勢のパイロットのためには、可変機構を持たない量産機が多用される。これはトータルでの運用コストを下げるためにも必然だった。

可変翼機の衰退と新たな可変機の登場

一方、現実世界における可変機は、あらゆる速度域での良好な機動性の実現を目指した可変後退翼機（他に、別の目的の機体が登場する。そうVTOL）と垂直離着陸機である。奇しくも現用における最新機のV-22オスプレイ

イ、そして冒頭で記述した現在開発中のF-35BライトニングⅡはいずれもこのVTOL機である。

ここで注意すべきことは、かつて一世を風靡した可変後退翼機はいずれも、そう遠からぬ未来に消えていくというすでに歴史の必然となっていくという事実。垂直離着陸機がアメリカ海兵隊という特殊な戦術を多用する戦闘組織にとつて、依然として重要な機能的要素である一方、あらゆる速度域での戦闘能力の高さとなると、もはやその必要性は希薄。

戦闘機の設計においては、アフターバーナーを使用しない状態でマッハ1.5程度の速度を出すことができ、同時に優れたステルス性能と近接格闘戦における機動性こそが重要で、マッハ2を超えるスピードは、撃ちつばなしかつ自律誘導が可能なアクティブホーミングミサイルに任せるといったのが現在の趨勢であることは間違いない。

可変機を追い抜いた現実世界SFの世界では何が出たのか？

Zガンダムが鋭意製作されていた時代、軍用機の世界においては可変後退翼機にしろVTOL機にしろ、まさに第一線の花形機であったが、それがわずか20年ほどの間にまったく不要とまでは言わないが、その存在意義が希薄な技術となるとは、一体誰が予想した

だろうか？ ガンダム世界における兵器の技術設定は、基本的に依然としてSFのそれであり、現実では夢の存在でありながら、この可変技術のみはその優位性が明らかに薄れてしまっているのである。

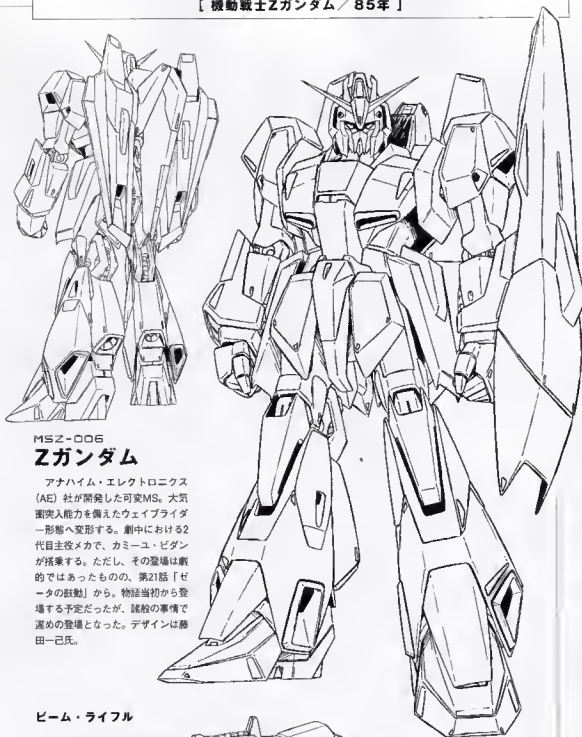
一般に、SFアニメの世界はいつの時代も、現実とはかけ離れた荒唐無稽な部分があった。一方、それなりの夢を馳せることができたものだったが、Zガンダムの場合、現実世界におけるリアルな戦術をある程度想定したことによつて、時系列的には明らかに過去の存在のはずだった現実世界の方が、今となつてはSFとはまた異なる推測の域を超えた「進化」を見せているといふことである。

とはいえ、Zガンダムにおいて可変メカがその存在理由として挙げた、あらゆるシチュエーションでの機動性と安全性の向上は、未だ現実世界ではなしていない。大型の人間型機体兵器が遠い未来に実現するとすれば、その設計書において必ず重要なポジションを占めることは間違いない。

その時こそ、現時点では推測も不可能な、新たな可変メカが導入されるのではないかと未来に期待したいところである。何よりも世の技術者の多くは、よりアグレッシブかつチャレンジングな設計を好むという事実において、現実も未来も関係ないのだから。

M S 設定資料

このページでは、各映像作品やゲームなどのメディアに登場したMSの設定資料を紹介する。基本はZ計画とそれに付随して開発されたア
ナハイム・エレクトロニクス社製の派生機を中心に取り上げ、後年の機体も収録した。なお、登場作品タイトルの後には年代を記した。



MSZ-006
Zガンダム

アナハイム・エレクトロニクス（AE）社が開発した可変MS。大気圏突入能力を備えたウェイブライダー形態へ変形する。劇中における2代目主役メカで、カミーユ・ビダンが搭乗する。ただし、その登場は劇的ではあったものの、第21話「ゼータの鼓動」から。物語当初から登場する予定だったが、諸般の事情で遅めの登場となった。デザインは藤田一己氏。

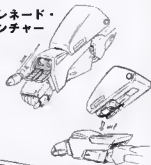
ビーム・ライフル



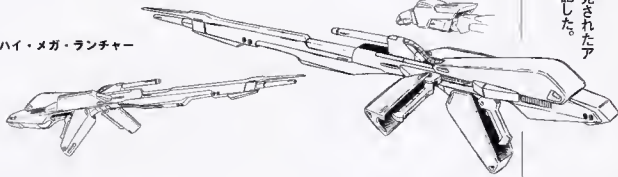
▼マウント形態

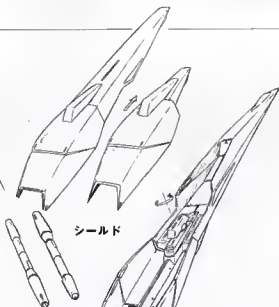
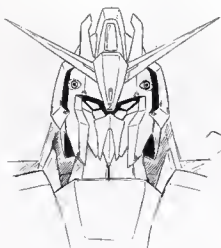


グレナード・ランチャー



ハイ・メガ・ランチャー



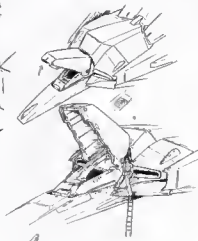


→シールドは伸縮式でウェイブライダー時には機首部分になる。ビーム・サーベルは機体のサイドアーマーに収納され、ビーム・ガンとしても使用可能。

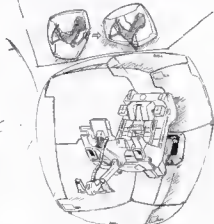
コクピット
ハッチ



ビーム・
サーベル



コクピット
レイアウト

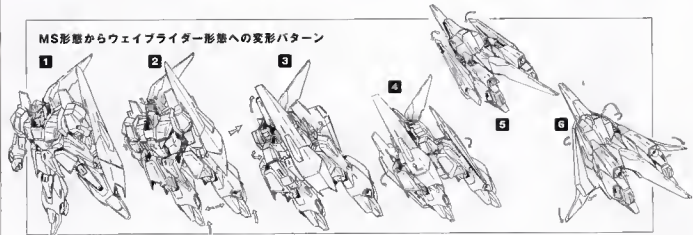


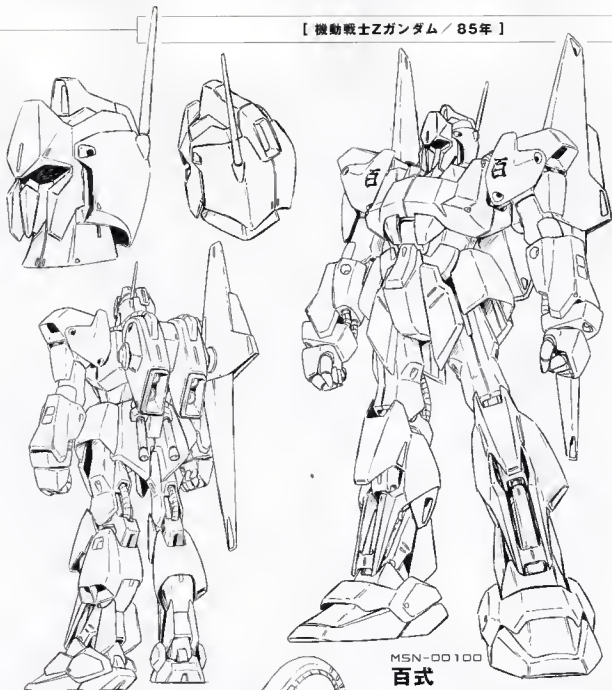
ウェイブ
ライダー

→この形態になることで単独で大気圏突入が可能。下に掲載した変形パターンを見てわかるように、かなり複雑な変形をする。



MS形態からウェイブライダー形態への変形パターン



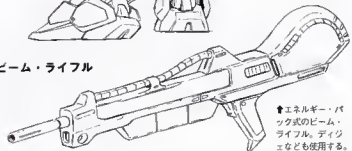


MSN-00100

百式

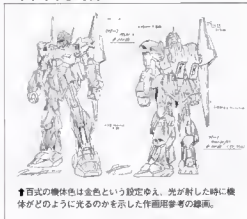
クワトロ大尉（シャア・アズナブル）の新たな機体。実質的に専用機といえ、機体色も赤から金色へと変更された。かつて赤い隼星の異名で恐れられた彼が、赤い機体から乗り換えた理由は何だったのか？ 実は、その辺りのエピソードは、3DCGで描かれるガンダムシリーズのショートフィルム作品の『GUNDAM EVOLVE./12』で描かれている。デザインは永野清氏。

ビーム・ライフル



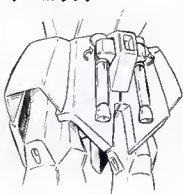
↑エネルギー・バック式のビーム・ライフル。ディジエなども使用する。

ハイライト参考用

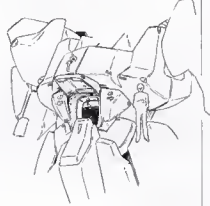


↑百式の機体色は金色という設定ゆえ、光が射した時に機体がかつてのように光るのかを示した作画用参考の線画。

リアアーマー&サーベルラック



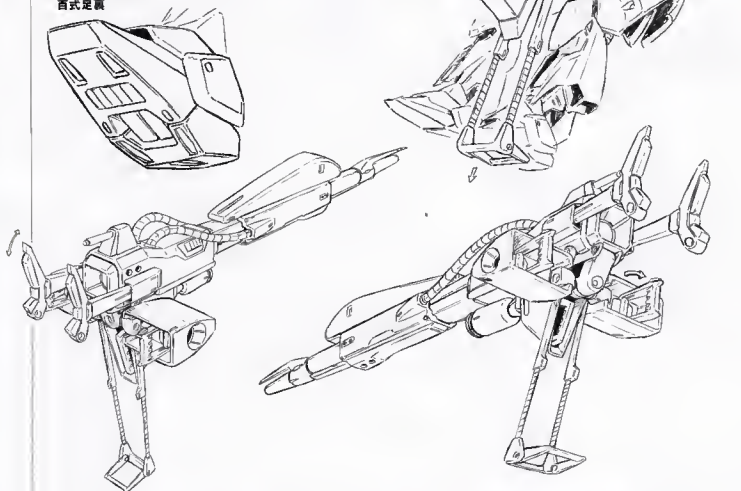
コクピットハッチ



メガ・バズーカ・ランチャー

百式の代名詞ともいえる装備の一つ。MSの身長ほどある巨大なメガ粒子砲で、連射をする際にはエネルギー供給用の駆動機が必要。あたれば戦艦だろうが一撃で仕留められる威力だが、いかんせんニュータイプのアレンジャーには強く、命中精度は残念ながら高くない。蛇足だが放映当時はプラモデル化されなかったが、後年HGUCで百式とセットで発売された（04年5月）。

百式足裏



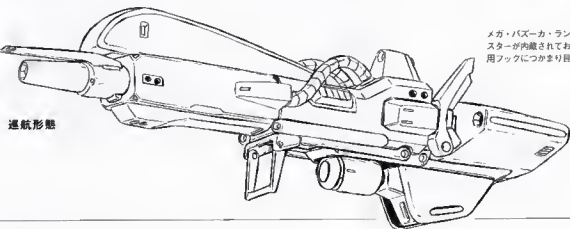
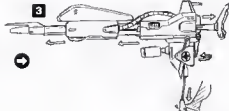
1



2

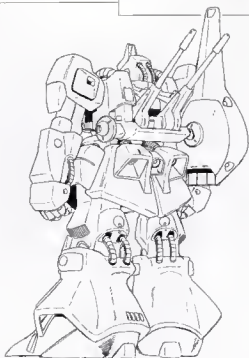


3



巡航形態

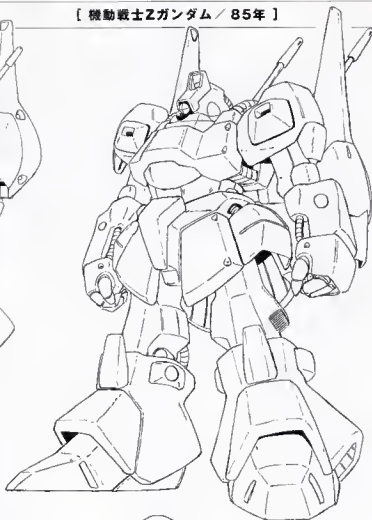
メガ・バズーカ・ランチャー本体にはスラスタが内蔵されており、出撃時には脚部用フックにつかまり目的宙域まで移動する。



RMS-099

リック・ディアス

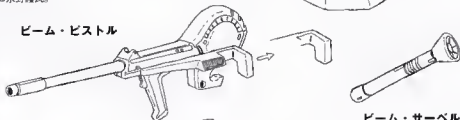
エウゴとAE社の共同開発による量産機。多くのパイロットがクワトロ大尉の専用機カラー（赤系）に塗り替えたのは有名なエピソードだ。ただ、宇宙戦では黒系の方が有利な気がしない。しかし、宇宙で活動していることを暗示する意味を考えると、黒から赤への機体色変更も頷ける。デザインは永野護氏。



バルカン・ファランクス



ビーム・ピストル



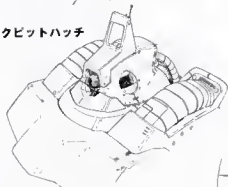
クレイ・バズーカ



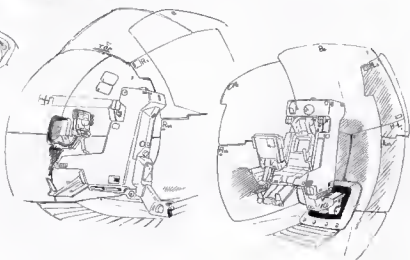
ビーム・サーベル

↑ビーム・サーベルは背中のバンダーラックの底面にマウントされている。ビーム・ピストルは使い捨てのビーム兵器で、クレイ・バズーカは実体弾兵器。

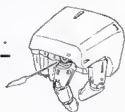
コクピットハッチ

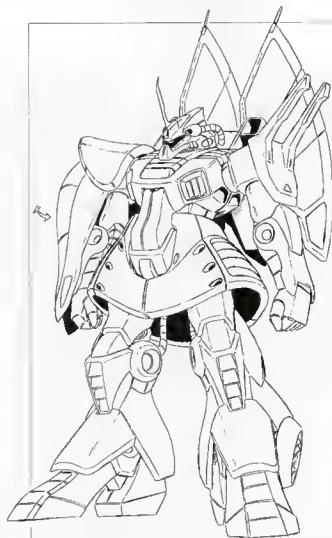


全天周モニター&リニア・シート



トリモチ・ランチャー





MSK-008

ディジェ

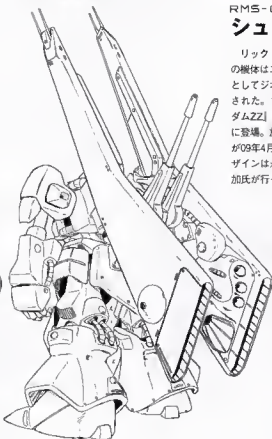
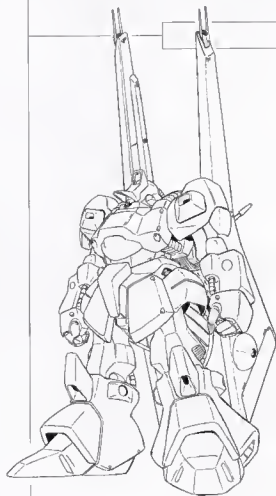
地球圏でディターンズへの反抗活動をしているカラバが、エウゴから供与された機体を機戦用にカスタマイズした機体。武器は百式と同型のビーム・ライフル、リック・ディアスのクレイ・バズーカなどを使う。そのジオンっぽい風貌から、当時アムロが乗ることに違和感を覚えたファンもいたとか。第35話「キリマンジャロの嵐」から登場。



足裏



〔機動戦士ガンダムZZ / 86年〕

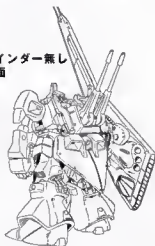


RMS-0998

シュツルム・ディアス

リック・ディアスの高機動型。ただし、この機体はエウゴではなく、政治目的の材料としてジオン共和国（ネオ・ジオン）へ供与された。まさかの悪役転換であった。『ガンダムZZ』第38話「鉄壁、ジャムル・フィン」に登場。放映当時、プラモ化はされなかったが09年4月にHGUCとして発売された。基デザインは永野護氏で、クリンナップを明貴美加氏が行った。

バンダー無し
背面



MSA-005

メタス

エウゴの可変MS。主なパイロットはレコア・ロンドやファ・ユイリィ。レコアが暴走してから(当初は戦死扱い)はファがパイロットを務めた。出撃するたびに、どこかが壊されている印象だが、不思議と搭乗者生還率が高い。次回作の『ZZ』でもファの乗機として活躍したが、ZZガンダム登場前の第10話『さよならファ』で戦列を離れた。

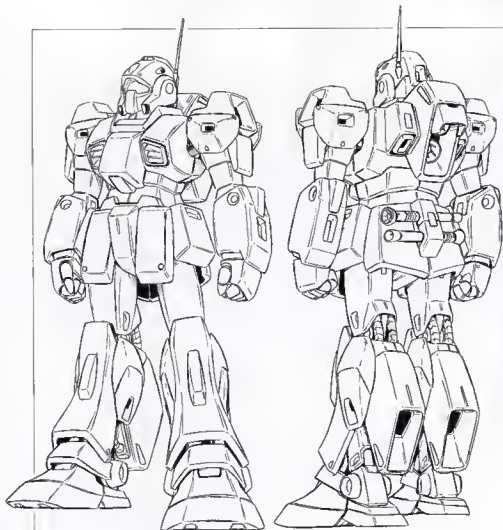
ビーム・サーベル&ラック

アーム・ビーム・ガン

MA形態

⇒いかにも宇宙戦艦娘といった感じのMA形態。設定では堅固な可変機構などといわれるが、肩部分に関節がなくつくと、結構機敏にできていたりする。MA形態時は駐機用にランディングギアが設けられている。

↑ランディングギア展開時

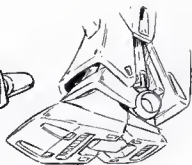


MSA-003

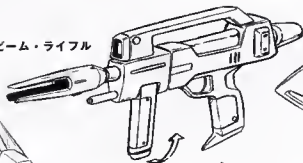
ネモ

エウーゴが運用する量産機。ジムⅡよりも高性能で位置付けとしては後継機にあたる。主なパイロットはカフ・コバヤシやエウーゴの一般兵。意外なところでロザミア・バダムが搭乗している。当時はエウーゴの機体だったが、後の『ガンダムUC』ep 4では、暗れて連邦軍の機体として活躍する姿が見られる。その際はゴールの色の違いが見分けるポイントである。

コクピットハッチ



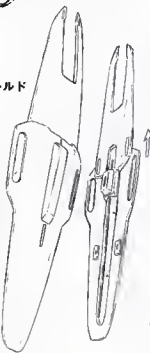
ビーム・ライフル



ポーズ参考用



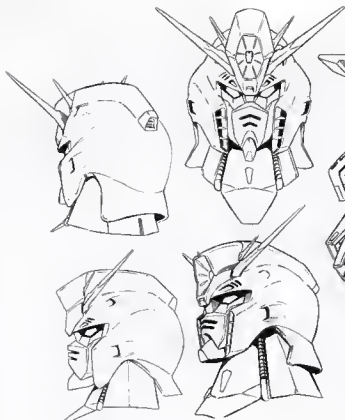
シールド



解体中の ネモ



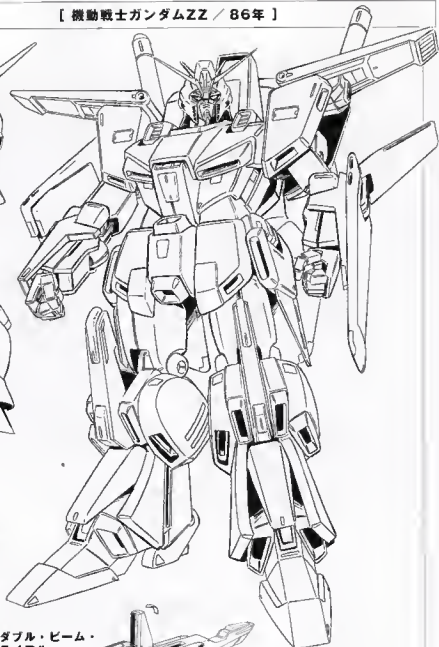
●ネモの基本装備はビーム・ライフルとシールド（伸縮式）。量産MSの標準的装備。ビーム・ライフルはジムⅡと同型。右の解体中のネモは、レコアガジュビトリスに潜入する際（第28話）、搭乗したゲルグをレストアするためにバラツかれた機体で、設定画は参考用に起こされたもの。



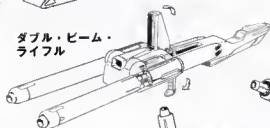
MSZ-010

ZZガンダム

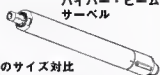
コア・ブロック・システムを採用した合体可変MS。
「ZZ」の真の主役メカといえる。その登場は第11話「始動! ダブルゼータ」より。それまでは、主人公のジュード・アースタはZガンダムに乗っていた。しかしZZガンダム登場後も、しばしば彼はZガンダムで出撃しており、案外とZZガンダムは使い勝手が悪かったのかも? デザインは小林誠氏。



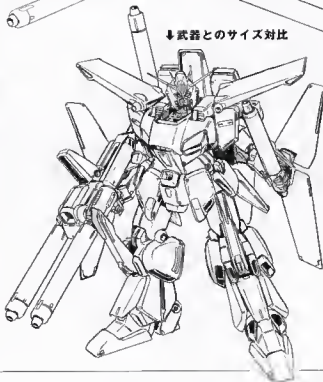
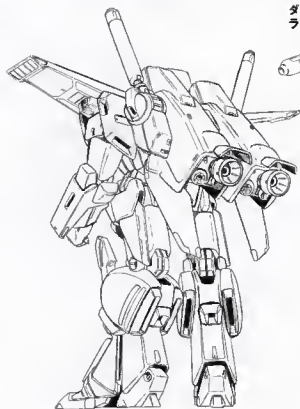
ダブル・ビーム・ライフル



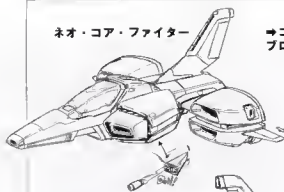
ハイパー・ビーム・サーベル



↓武器とのサイズ対比



ネオ・コア・ファイター



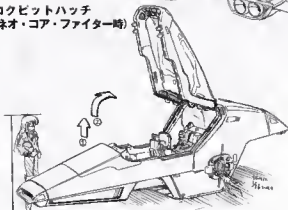
→コア・ブロック形態



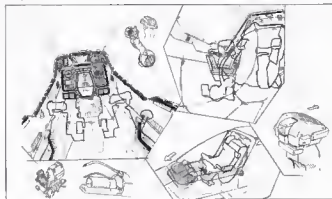
コクピットハッチ (MS時)



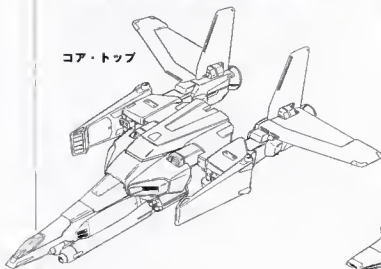
コクピットハッチ
(ネオ・コア・ファイター時)



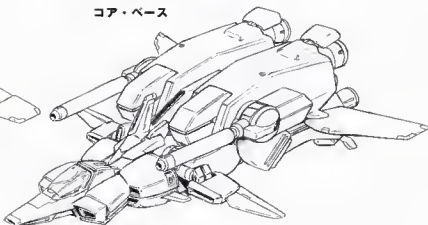
コクピットレイアウト



コア・トップ

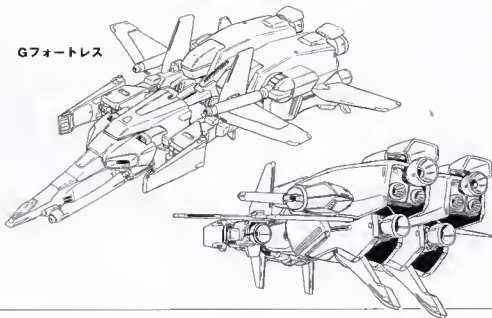


コア・ベース



→上半身のコア・トップ、下半身のコア・ベースが合体してGフォートレスへ。それを経て、変形してZZガンダムになるのだが、劇中ではコア・トップやコア・ベース、もしくはZZガンダムの状態で出撃することが多く、Gフォートレスで出撃する機会はほとんどなかった(劇中1度きり)。

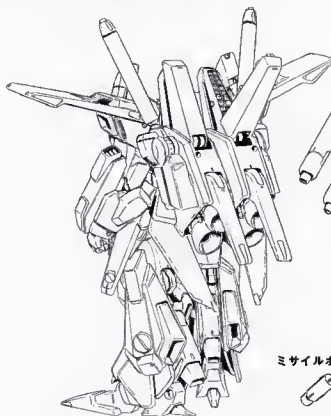
Gフォートレス



FA-0105

フルアーマー ZZガンダム

ハマーン率いるネオ・ジオンとの最終決戦に向け、ZZガンダムを強化改造した機体。放映時に模型化はされなかったが、当時から人気も高く後に実施された商品化希望アンケートの結果から、87年7月に発売された。当時展開されていた『ガンダムセンチネル』のラインナップの一つとしてリリースされた（製品の扱いとしてはFAZZといったところか）。



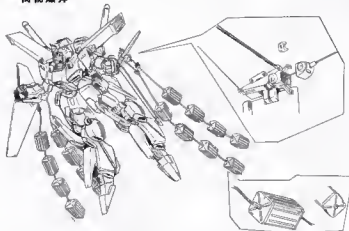
ミサイルポッド弾体



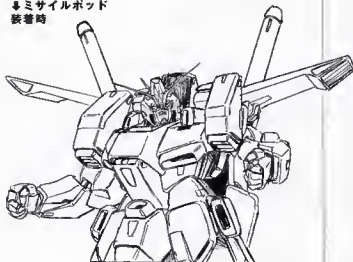
コア・トップ用ミサイルポッド



荷物爆弾



↓ミサイルポッド装着時



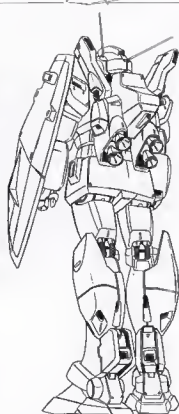
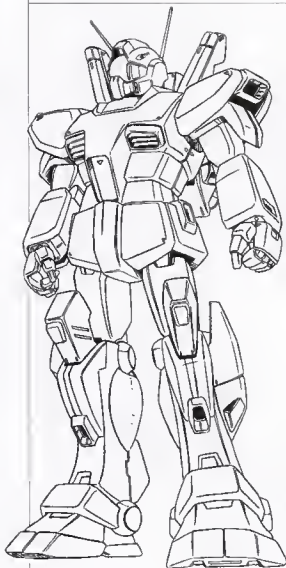
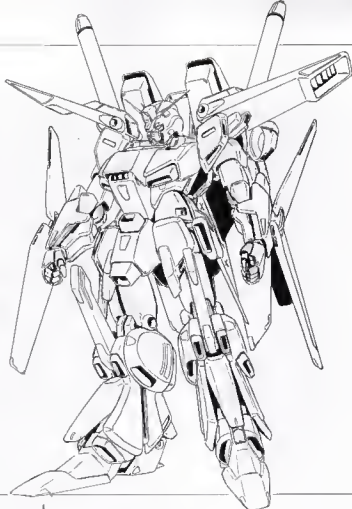
↑↑上の荷物爆弾は第22話「ジュー、出撃!!」で用いられた手製の爆弾だ。右のコア・トップ用のミサイルポッドは、肩部の装甲にマウントして使用する。大気圏突入を控えランドセルを外したZZガンダムの戦闘力を補うため取り付けられた。第23話「燃える地球」に登場。

強化型ZZガンダム

フルアーマーZZガンダムの素体にあたる機体。フルアーマー化に耐えられるよう各部改修を行ったという設定。従来型と比べると機体やランドセルなどの形状が異なる。なお、00年8月に発売されたMG「フルアーマーダブルゼータガンダム」で、初めて立体化された。ちなみにフルアーマー、強化型ともに、明貴美加氏がクлинаップとデザインを行った。

ZZガンダム用バリュートバック

左はZZガンダムの地球降下用バリュートバックの設定画。これの取り付けを行うため、ランドセルを外しミサイルが使える状態のZZガンダムは、肩部にミサイルポッドを装着して出撃した(右ページ参照)。しかし、当のジュードはZガンダムで地球へ降下したので、結局使われることがなかった幻の装備なのだ。

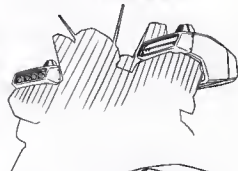


RGM-86R

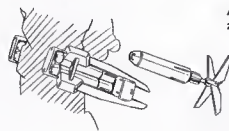
ジムⅢ

第一次ネオ・ジオン戦争期の連邦軍の主力MS(一部機体はカラバでも運用)。ジムⅡの後継とされ、開発においてはガンダムMk-IIの技術が導入されている。第27話「リィナの血(前編)」から登場し、脳メカでありながら主人公たちのピンチを救うという、珍しい活躍をした。後の「逆シャア」「UC」などにもゲストメカとして登場。11年7月に発売されたHGUCが初のプラモデル化。

ノーマルミサイルポッド装着時



大型ミサイルランチャー



小型ミサイルポッド



RGZ-91

リ・ガズィ

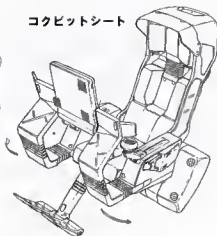
陸海空変換機とBWS(バック・ウェポン・システム)を採用した高機動MS。BWSをバグすると元には戻れない。本来は、航空戦闘機としての要素が強いかもしれない。劇中冒頭のアムロ・レイの搭乗機で、アムロがZガンダムへと乗り換えた後はケーラ・スウやチェーン・アギが搭乗している。



コクピットハッチ



コクピットシート



ビーム・ライフル



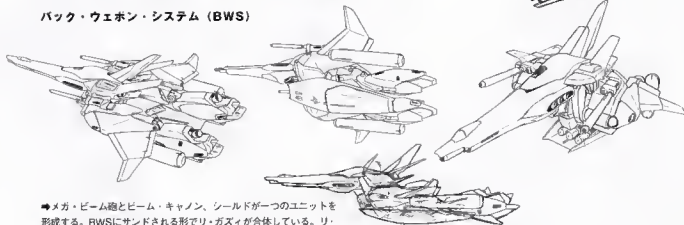
グレナード・ランチャー



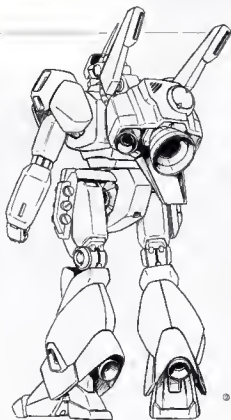
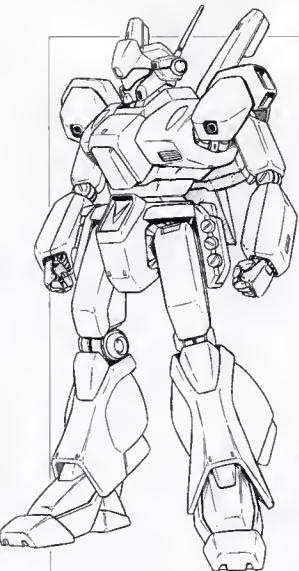
ビーム・サーベル



バック・ウェポン・システム (BWS)



◆メガ・ビーム砲とビーム・キャノン、シールドが一つのユニットを形成する。BWSにサンドされる形でリ・ガズィが含まれている。リ・ガズィ本体はZガンダムのような大胆な変形はしていない。



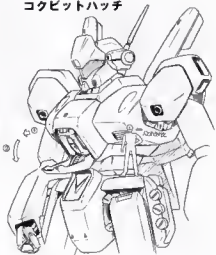
足裏



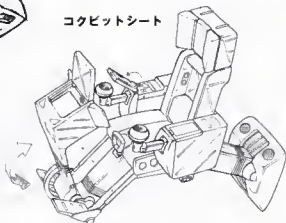
RGM-89 ジェガン

ロンド・ベル、ならびに地球連邦軍の主力MS。機体としてのポテンシャルも高く、重厚機ながらかなり高性能。その後、宇宙世紀0100年代まで主力として前線に立ち続けた。『ガンダムUC』では数多くのバリエーションが登場している機体でもある。劇中における主なパイロットはケラー・スウやハサウェイ・ノアなど。

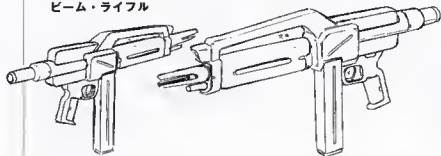
コクビットハッチ



コクビットシート



ビーム・ライフル

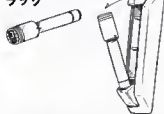


シールド

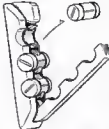


↑シールドの両サイドには2連装ミサイル・ランチャーを備えている。

ビーム・サーベル&ラック



3連グレナード



←ジェガンには腰のフロントアーマーが無く、サイドアーマーはウェポンラックになっている。

連邦軍MS共通マニピュレーター



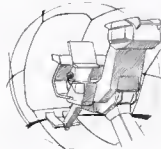
RX-93

vガンダム

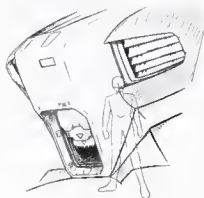
ロンド・ベルのMS機隊長であるアムロ・レイ専用機。彼の設計により開発が進められ、連邦軍としては初の無組式サイコミュ兵器（フィン・ファンネル）を搭載した。ネオ・ジオンの総帥、シャア・アズナブルの駆るサザビーと、史上稀にみるMS同士の殴り合い、文字通りの格闘戦を展開した。



コクピットレイアウト



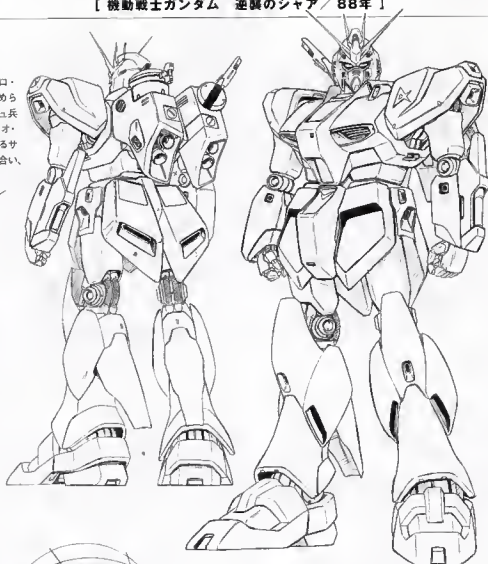
コクピットハッチ



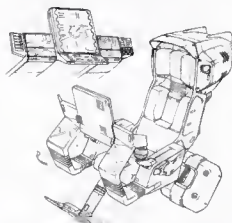
アームレイカー



胸部ハッチ

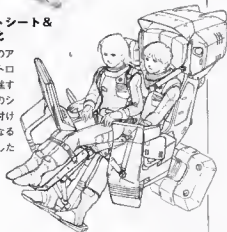


コクピットシート

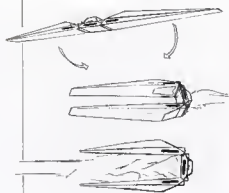


簡易コクピットシート & 人物サイズ対比

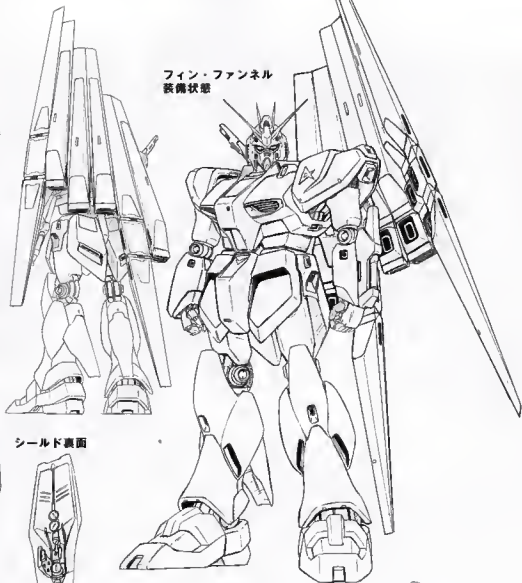
→vガンダムが月のアナハイム・エレクトロニクス本社から発進する際、チェーン用のシートが急増で取り付けられた。2人が乗るように座るのを記した設定画。



フィン・ファンネル



フィン・ファンネル
展開状態



ニュー・ハイパー・バズーカ



シールド裏面



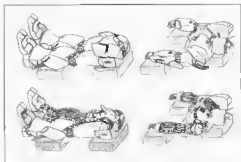
腕部サーベルラック /
ビーム・サーベル



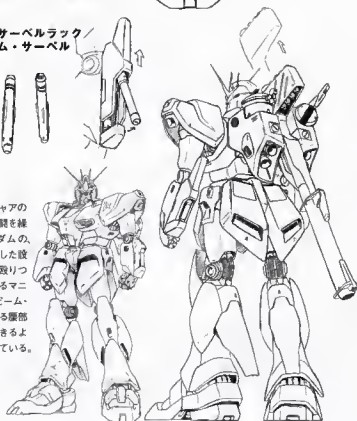
ビーム・サーベル



→アクシズ上でシャアの
駆るサザビーと激戦を繰
り広げるVガンダムの、
ダメージ状態を表した設
定画。サザビーを殴りつ
けてボロボロになるマニ
ピュレーターや、ビーム
・サーベルで溶解する腰
部の様子がイメージでき
るよう描き起こされている。



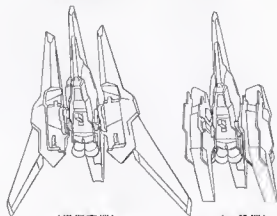
▶劇中冒頭のオープニングで組み立て作業中のVガンダムの設定画。上下に体が分かれていて、各部の装甲が取り外した状態のものも描かれている。かけられている布が取られ、Vガンダムの目が光るシーンにつながる。



RGZ-95C

リゼル／リゼルC型（指揮官機）

リ・ガズの後継機としての可変MS。可変機構などはメタスなどを参考にしている。バックパックの換装により大気圏内でも運用可能。またウェイブライダー一時的な高機動性を活かし、随伴する機体を運ぶサブ・フライト・システムとしても使われた。 Rond・ベル隊などに配備され、リディ・マーセナスの最初の乗機でもある。



（指揮官機）

（一般機）

✦大型のバックパックを装備したタイプはC型（指揮官機）と呼ばれる。

ウェイブライダー



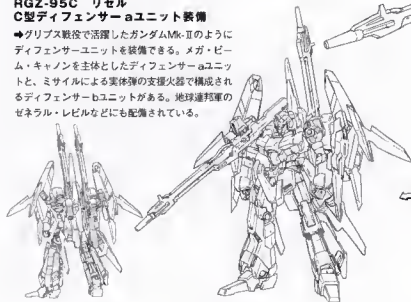
（指揮官機）

（一般機）

RGZ-95C リゼル

C型ディフェンサーユニット装備

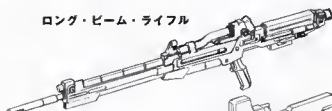
✦グリプス戦役で活躍したガンダムMk-IIのようにディフェンサーユニットを装備できる。メガ・ビーム・キャノンと、ミサイルによる実体弾の支援兵器で構成されるディフェンサーbユニットがある。地球連邦軍のゼネラル・レビルなどにも配備されている。



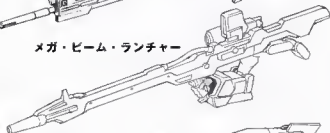
バックパック
無し背面



ロング・ビーム・ライフル



メガ・ビーム・ランチャー



シールド



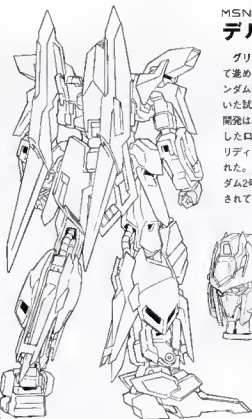
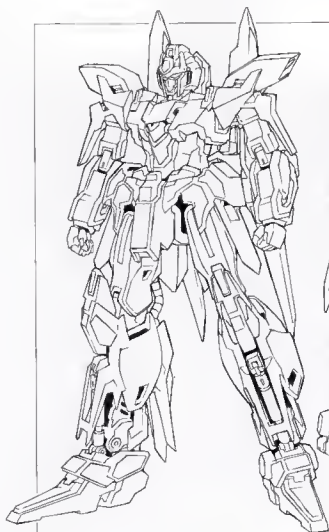
ビーム・サーベル／ラック



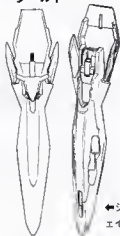
MSN-001A1

デルタプラス

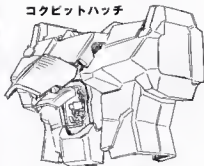
グリプス戦役時にMS開発計画として進められていた「Z計画」で、るガンダムの系統として開発が進められていた試作可変MS。しかし、激半ばで開発は凍結されていた。機体不足に窮したロンド・ベル隊の要請で急きょ、リディオ劇の機体として戦場へ投入された。しかし、機体はユニコーンガンダム2号機バンシィとの遭遇戦で破壊されている。



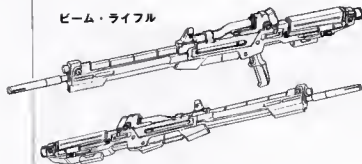
シールド



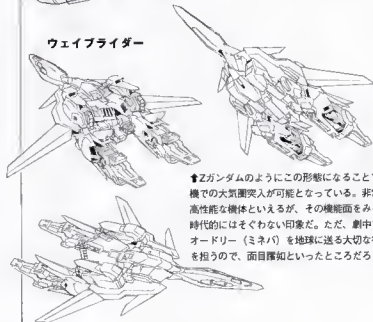
コクピットハッチ



ビーム・ライフル



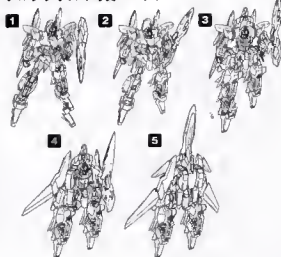
ウェイフライダー



↑Zガンダムのようにこの形態になることで単機での大気圏突入が可能となっている。非常に高性能な機体といえるが、その機能面をみると時代的にはそぐわない印象だ。ただ、劇中ではオードリー（ミネバ）を地球に送る大切な役目を担うので、面目躍如といったところだろうか。

←シールドはZガンダム系の機体と同様に、ウェイフライダー時には機首になる設計。

デルタプラスの可変パターン



RX-0

ユニコーンガンダム

UC計画においてビスト財団主導で開発されたニュータイプ専用機。NT-Dと呼ばれるシステムを搭載しており、発動することでユニコーンモードからデストロイモードへと変身する。システム発動時は前身に内蔵されているサイコフレームが赤く輝く。しかし、発光の原理は不明らしい。また、「ラプラスの箱」の在処を示す鍵ともいわれている。主人公バナー・リンクスの乗機。

ビーム・マグナム



ハイパー・バズーカ



ビーム・ガトリング



デストロイ
モード



ユニコーン
モード



(ユニコーンモード)

頭部バルカン



ユニコーン
モード

デストロイ
モード

(デストロイモード)

RX-0

ユニコーンガンダム2号機 バンシィ

ユニコーンガンダム2号機。ユニコーンガンダム同様にNT-Dシステムを搭載し、発動した際にはサイコフレームが金色に輝く。アームド・アーマー-VNやBSといった特殊な武装を装備する。オーガスタ研究所において、重力下での慣性可動実験がされた。再調整を受けたマリーダ・クルスの機体として登場した。

頭部バルカン



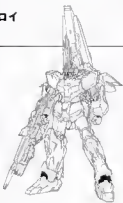
ユニコーン
モード

デストロイ
モード

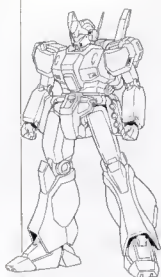
(ユニコーンモード)

RX-0 [N] ユニコーンガンダム2号機 バンシィ・ノルン ユニコーンモード

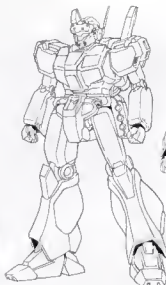
パイロットであるマリーダを失い、次の搭乗者であるリディ・マーセナス用に改めて調整が施されたバンシィ。新たな装備としてアームド・アーマー-DE、アームド・アーマー-XCを備え、リボルビング・ランチャー付きのビーム・マグナムを携行する。その威力は未知数だが、サブ・フライト・システムに頼らずとも長距離航行できるなど、驚異的な力を秘めている。



(デストロイモード)



RGM-890
ジェガン (D型)



RGM-890e
ジェガン (エコース仕様)

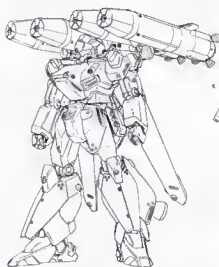


ガンダムUCに 登場する 量産MS

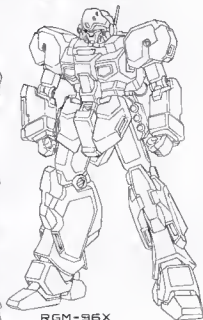
ガンダム作品の最新作の一つである「ガンダムUC」には数多くの量産MSが登場する。それらは過去の映像作品や関連企画で登場した機体であったり、最新の劇中オリジナルのバリエーション機であったり、多岐にわたる。ここではそんな中から連邦軍の量産MSを抜粋して紹介する。



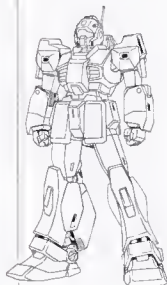
RGM-895
スタージェガン



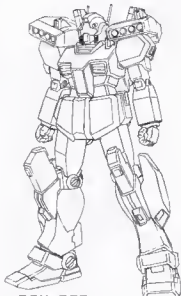
RGM-895
プロト・スタージェガン



RGM-96X
ジェスタ



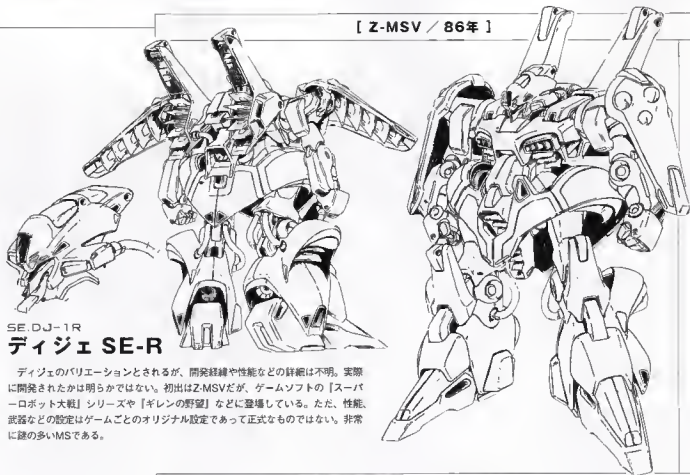
MSA-003
ネモ



RGM-86R
ジムⅢ



MSA-005K
ガンキャノン・ディテクター

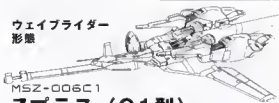


SE, DJ-1R

ディジェ SE-R

ディジェのバリエーションとされるが、開発経緯や性能などの詳細は不明。実際に開発されたかは明らかではない。初出はZ-MSVだが、ゲームソフトの『スーパーロボット大戦』シリーズや『ギレンの野望』などに登場している。また、性能、武器などの設定はゲームごとのオリジナル設定であって正式なものではない。非常に謎の多いMSである。

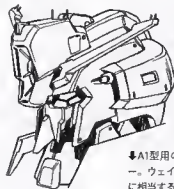
ウェイブライダー 形態



MSZ-006C1

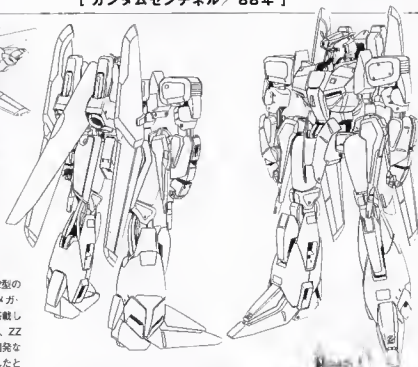
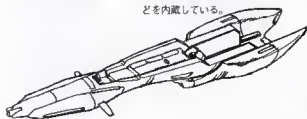
Zプラス (C1型)

Zプラス (A1型) の有用性を認めた連邦軍が採用したZガンダムの派生機。宇宙での活動を中心に設計されている可変機だが、オプションの装備換装により大気圏突入が可能。ウェイブライダー時は機体下部にビーム・スマートガンと一体になったバンダーを装備する。企画展開当時も人気があったため、1 / 144スケールでプラモデル化され、可変を再現していた。



◀ZプラスA2型の頭部。ハイ・メガ・キャノンを搭載したタイプで、ZZガンダムの開発などに活かされたという。

◀A1型用のシールドバンダー。ウェイブライダー時に機首に相当する部分。センサー類などを内蔵している。



MSZ-006A1

Zプラス (A1型)

主にカラバが運用したZガンダムの派生機で、多くのバリエーションが存在する。ウェイブライダーへの変形が可能だが、A1型の系列機はどれも大気圏内での運用を想定した設計、機体改修が施されている。A1型は当時プラモデル化されなかったが、01年の10月にMGで発売された。ただし、ボリューミーなグレーの機体ではなく、派手目のテスト機カラーだった。



MSA-0011

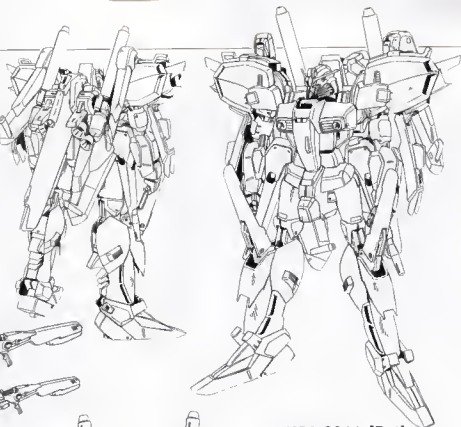
Sガンダム

雑誌による連載企画「ガンダムセンチネル」の主役メカ。ZZガンダムのような合体可変機だが、オプションを装備することで多様性を目指しているためコンセプトが少々異なる。上下半身のユニットはそれぞれGアタッカー、Gボマーに変形する。基本的に分離状態から再度合体することは想定されていないという（小説内では無理やり敢行した）。

ビーム・スマートガン

レドーム付き

パイポッド付き



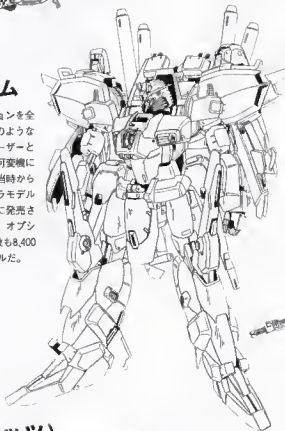
MSA-0011 [Bst] Sガンダム ブースターユニット装備型

↑Ex-Sガンダム用の強化型ユニットを背面と両腕部に装備した超重機動形態。直線機動による加速力は群を抜いて高いが、推進剤の消費が激しいため、長時間の活動には向かない。その外観はSガンダム版ジオングといった趣だが、88年当時1/144スケールでキット化されている。

MSA-0011 (Exst)

Ex-Sガンダム

Sガンダムに強化型オプションを全て装備した機体。Sガンダムのような合体可変機ではなく、Gクルーザーと呼ばれる巡航形態に変形する可変機になっているのが特徴である。当時からSガンダム共々人気が高くプラモデル化がされているが、03年3月に発売されたMGでは完全変形を再現、オプションも豊富に付属する。値段も8,400円（税込）というビックモデルだ。

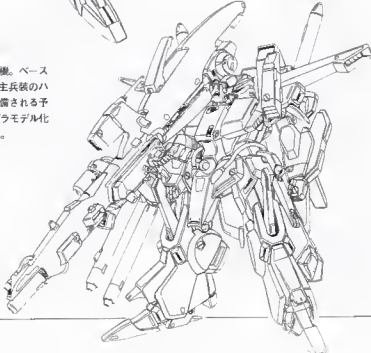
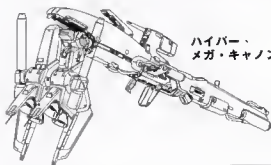


FA-010A

FAZZ (ファッツ)

フルアーマーZZガンダムの機能検証のために作られた実験機。ベースにはZZガンダムの試験機が流用されているという。ちなみに主兵装のハイパー・メガ・キャノンは、フルアーマーZZガンダムにも装備される予定だったという。ちなみに、こうした設定も手伝って、後にプラモデル化されたキットには、ハイパー・メガ・キャノンが付属している。

ハイパー・
メガ・キャノン



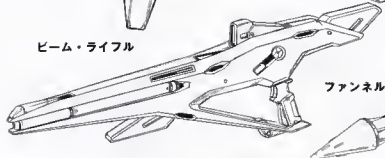
RX-104FF

ペーネロペー

小説『閃光のハサウェイ』の主要メカの一機。AE社製のガンダム開発20周年を記念して開発されたという機体。ペーネロペーはオデュッセウスガンダムにフライトユニットを装備した姿。主なパイロットは連邦軍キラークエー部隊のレーン・エイム。デザインは森木靖彦氏で、このページに掲載されている設定画は、いずれもゲーム化にあたって描き起こされたもの。



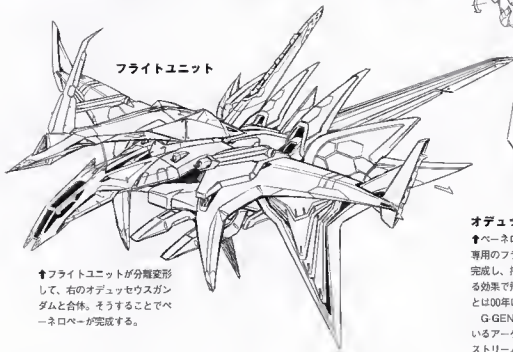
ビーム・ライフル



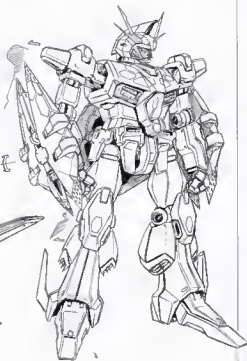
ファンネル・ミサイル



フライトユニット



↑フライトユニットが分離変形して、右のオデュッセウスガンダムと合体。そうすることでペーネロペーが完成する。



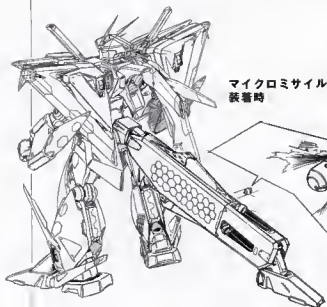
オデュッセウスガンダム

↑ペーネロペーの素体にあたるガンダム。これに専用のフライトユニットを装備することで機体は完成し、搭載されたミノフスキークラフトによる効果で飛行が可能である。なお、先述のゲームとは00年に発売されたPS用ソフト『SDガンダム G GENERATION-F』と、12年より稼働しているアーケードゲーム『機動戦士ガンダム エクストリームバーサス フルブースト』である。

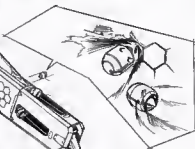
RX-105

ミガンダム

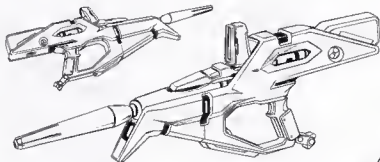
小説『閃光のハサウェイ』の主役メカ。ライバルであるベネロベーと同時期に開発され、秘密結社マフティーへと譲渡された。AE社の無節操な面は宇宙世紀0100年代でも健在らしい。搭乗者は秘密結社マフティーの指導者マフティー・ナビニュー・エリンことハサウェイ・ノア（かのブライトの息子である！）。こちらもゲーム化にあたって前ページに掲載したベネロベーと同じく新規に描き起こされている。



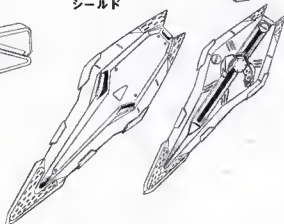
マイクロミサイルポッド
装着時



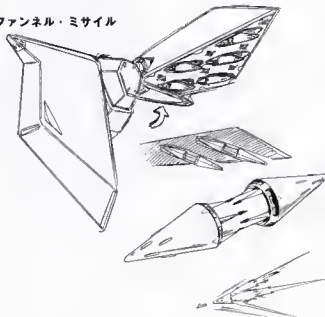
ビーム・ライフル



シールド



ファンネル・ミサイル



ファンネル・
ミサイル
サイズ対比



武器	※全弾重装 出力	※全弾重装 威力	備考
バルカン銃×2、ビーム・サーベル×2、 ビーム・ライフル、ハイパー・メガ・ランチャー、他	30.84	0.55	ウェーブライダーによる大規模突入が可能。
バルカン銃×2、ビーム・サーベル×2、 ビーム・ライフル、クレイ・バズーカ	29.46	0.73	-
バルカン・ファランクス、ビーム・サーベル、 クレイ・バズーカ、ビーム・ピストル	29.84	0.73	-
バルカン銃×2、ビーム・ナギサ、 ビーム・ライフル、クレイ・バズーカ、他	27.38	0.7	カラバによる隠蔽用改造機。
ビーム・サーベル×6、アーム・ビームガン×2	31.95	0.68	-
バルカン銃×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル	34.32	0.76	後に連撃軍の機体として「UC」に登場。
ダブル・バルカン、ハイパー・ビーム・サーベル、ダブル・ビーム・ライフル、 ハイ・メガ・キャノン、ダブル・キャノン、2連装ミサイル・ランチャー×2	9.32	0.68	コア・ブロック・システム搭載機。
スプレーミサイルランチャー×2、1連装ミサイル・ポッド×2、 8連装ミサイル・ポッド×2、他	11.88	0.70	コア・ブロック・システム搭載機。
バルカン銃×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 ニュー・ハイパー・バズーカ、フィン・ファンネル×6、他	21.14	0.84	サイコフレーム搭載機。
バルカン銃×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 2連装グレネード・ランチャー×2、ハンドグレネード×3、他	21.65	0.82	バック・ウェポン・システム搭載機。
バルカン銃、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ハンド・グレネード×3、 2連装ミサイルランチャー×2	25.29	0.77	-
バルカン銃×2、ビーム・サーベル×4、ビーム・マグナム、 ハイパー・バズーカ、ビーム・ガトリングガン、他	12.27	0.3	()内の数字はデストロイモード時。またはユニコーンモード時。
バルカン銃×2、ビーム・サーベル×4、 アームド・アーマーBS、アームド・アーマーVN	13.42	0.33	()内の数字はデストロイモード時。※1正名称はユニコーンガンダム2号機バリエーション。※2いずれもユニコーンモード時。
バルカン銃×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、 グレネード・ランチャー、他	25.95 (30.77)	0.71 (0.84)	()内の数字はディフェンサーユニット搭載時。
バルカン銃×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 シールド・ビーム・ガン、他	-	-	-
バルカン・ポッド・システム、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、 ハンド・グレネード×6、他	21.11	0.64	-
バルカン銃、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、他	25.29	0.76	-
ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル	29.11	0.53	非可変機。
ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、2連装ビーム・キャノン	23.84	0.45	非可変機。
ビーム・サーベル、メガ・ビーム・ライフル	32.72	0.60	-
バルスレーザークラス×2、ビーム・ガトリングガン、 多目的ランチャー・ユニット、ビーム・ライフル	31.56	0.68	-
ビーム・サーベル、2連装メガ・ビーム・ガン	31.46	0.57	-
ビーム・サーベル×2、ハイ・メガ・キャノン	25.45	0.61	カラバによる改造機。
バルカン銃×2、ビーム・ガン、ビーム・ライフル、ビーム・キャノン×2	30.82	0.84	カラバによる改造機。「UC」に登場。
ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、2連装ビーム・キャノン	23.84	0.45	ペーパープランで終わったといわれる。
バルカン銃×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ビーム・キャノン	34.63	0.82	後に「UC」に登場。
ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 ハイパー・ビーム・キャノン×2、グレネード・ランチャー×2、他	20.43	0.44	ペーパープランのみといわれる。
ハイパー・ビーム・サーベル×2、ダブル・ビーム・ライフル、 ハイ・メガ・キャノン、ダブル・キャノン	8.75 (19.20)	0.63 (0.60)	()内の数字はA型のもの。コア・ブロック・システム非搭載
50mmバルカン銃×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 隠密ハイ・メガ・キャノン、拡張メガ数値機、オプションウエポンリッド×2、他	24.21	0.55	コア・ブロック・システム非搭載。
ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ビーム・スプレーガン、 インコムユニット（オプションパック）、フィン・ファンネル（オプションパック）、 ハイパー・バズーカ、ビーム・キャノン、ミサイル×4	25.8 / 23.2	0.74 / 0.67	※1フィン・ファンネルパック装着時指定。 ※2インコムパック装着時指定
バルカン銃×2、ビーム・サーベル×2、 ビーム・キャノン×2、ビーム・スマートガン	37.39	0.62	-
バルカン銃×4、ビーム・サーベル×2、ビーム・キャノン×2、 ビーム・スマートガン、背部ビーム・キャノン×2、インコム	10.17	0.51	コア・ブロック・システム搭載機。
ビーム・スマートガン、背腰部ビーム・キャノン×4、 インコム、リフレクターインコム、他	22.63	0.14	コア・ブロック・システム搭載機。
60mmダブル・バルカン×2、ダブル・ビーム・ライフル、 スプレー・ミサイル・ランチャー×2、ハイパー・メガ・キャノン、他	11.72	0.8	非可変機。

MSスペック一覧

このページでは、本誌に掲載された代表的な機体のスペックを一覧にまとめた。MSの並び順は映像作品を先にMSVなどの関連企画になっている。

	名称	型式番号	全高 (m)	本体重量 (t)	全重量 (t)	ジェネレータ 出力 (kW)	スラスター 推力 (kg)	センサー 有効半径 (m)	装甲材質
MSV	Zガンダム	MSZ-006	19.8m	28.7t	62.3t	2,020kW	112,600kg	14,000m	ガンダリウム合金
	百式	MSN-00100	18.5m	31.5t	54.5t	1,850kW	74,800kg	11,200m	ガンダリウム合金
	リック・ディアス	RMS-099	18.7m	32.2t	54.7t	1,833kW	74,800kg	11,500m	ガンダリウム合金
	ディジェ	MSK-008	18.4m	33.9t	51.8t	1,892kW	74,000kg	11,700m	ガンダリウム合金
	メタス	MSA-005	18.1m	27.8t	52.4t	1,640kW	77,000kg	11,300m	ガンダリウム合金
NN	ネモ	MSA-003	18.5m	36.2t	55.6t	1,620kW	72,800kg	10,020m	ガンダリウム合金
	ZZガンダム	MSZ-0010	19.86m	32.7t	68.4t	7,340kW	101,000kg	16,200m	ガンダリウム合金
	フルアーマー ZZガンダム	FA-010S	19.86m	32.7t	87.2t	7,340kW	124,800kg	16,200m	ガンダリウム合金
	Vガンダム	RX-93	22.0m	27.9t	63.0t	2,980kW	97,500kg (18,300kg × 4, 12,300kg × 2)	21,300m	ガンダリウム合金
	リ・ガスィ	RGZ-91	20.5m	24.7t	55.2t	2,550kW	67,500kg (4,250kg × 2, 11,000kg × 2, 8,600kg × 2)	18,900m	ガンダリウム合金
CC	ジェガン	RGM-89	19.0m	21.3t	47.3t	1,870kW	61,400kg	14,200m	チタン合金 セラミック複合材
	ユニコーン ガンダム	RX-0	19.7m (21.7m)	23.7t	42.7t	3,480kW※	142,600kg※	22,000m	ガンダリウム合金
	バンシィ ※1	RX-0	19.7m (21.7m)	24.0t	46.7t	3,480kW ※2	142,600kg ※2	23,500m	ガンダリウム合金
	リゼ尔	RGZ-95	20.5m	25.8t (29.2t)	57.6t (68.3t)	2,220kW	81,500kg	14,920m	ガンダリウム合金
	デルタプラス	MSN-001A1	19.6m	27.2t	-	2,360kW	92,400kg	16,200m	ガンダリウム合金
CC	ジェスタ	RGM-96X	19.3m	24.8t	57.2t	2,710kW	89,030kg	14,200m	
	ジェガンD型	RGM-89D	19.0m	21.3t	47.3t	1,870kW	62,000kg	16,800m	チタン合金 セラミック複合材
	プロトタイプ Zガンダム	MSZ-006-X1	19.6m	29.9t	52.1t	1,790kW	99,000kg	14,000m	ガンダリウム合金
	量産型Zガンダム	MSZ-007	20.4m	32.1t	48.2t	2,022kW	107,500kg	11,500m	ガンダリウム合金
	ZII (ゼツツ)	MSZ-008	18.3m	31.1t	69.7t	2,130kW	114,300kg	14,000m	ガンダリウム合金
CC	百式改	MSR-100S	19.2m	39.2t	63.6t	2,015kW	93,500kg	11,500m	ガンダリウム合金
	リック・ ディアスII	MSA-099-2	18.52m	30.7t	58.2t	1,850kW	102,200kg	11,200m	ガンダリウム合金
	メタス改	MSA-005S	18.3m	34.9 t	50.9t	2,000kW	83,000kg	12,000m	ガンダリウム合金
	ガンキャノン・ ディテクター	MSA-005K	18.5m	34.5t	54.5t	1,780kW	54,600kg	9,200m	ガンダリウム合金
	ガンダムMK-III	MSF-007	19.5m	32.1t	48.2t	2,022kW	107,500kg	11,500m	ガンダリウム合金
CC	ネモII	MSA-004K	18.5m	45.4t	56.1t	1,620kW	68,600kg	12,050m	ガンダリウム合金
	フルアーマー ガンダムMK-III	FA-007G II	19.5m	47.2t	62.1t	3,040kW	141,200kg	11,500m	ガンダリウム合金
	プロトタイプ ZZガンダム	MSZ-009 (B)	19.02m	31.7t (29.5t)	63.0t (60.3t)	7,200kW (3,140kW)	100,300kg	15,480m	ガンダリウム合金
	量産型ZZガンダム	MSZ-013	18.5m	29.2t	53.5t	2,210kW	97,500kg	11,300m	ガンダリウム合金
	量産型Vガンダム	RX-94	21.2m	25.6t	64.5t (※1) 58.0t (※2)	2,500kW	87,000kg	19,400m	ガンダリウム合金
S	Zプラス (C1型)	MSZ-006C1	19.86m	36.18t	77.4t	2,070kW	124,200kg	21,000m	ガンダリウム合金
	Sガンダム	MSA-0011	21.7m	38.4t	73.0t	7,180kW	143,600kg	18,800m	ガンダリウム・ コンポジット
	Ex-Sガンダム	MSA-0011 (Ext)	21.3m	69.4t	162.5t	7,180kW	1,182,000kg	18,800m	ガンダリウム・ コンポジット
	FAZZ	FA-010A	19.86m	45.4t	94.6t	8,070kW	118,800kg	16,200m	ガンダリウム合金

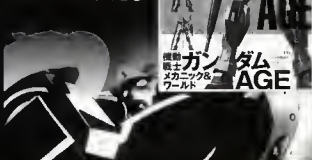
※あくまで目安でしかないが、それぞれ全重量/出力は、数値が低ければ実質的なパワーがあり、全重量/出力の割合、低い数値がよい。どちらも kg 換算で計算。
※ ZZ は機動戦士ガンダム ZZ、CCA は機動戦士ガンダム CCA、リゼルのシャア、UC は機動戦士ガンダム UC、S はガンダムセンチネル。

Mobile Suit Gundam AGE Mechanic&World

グレートメカニクススペシャル
機動戦士ガンダムAGE
メカニック&ワールド

A4判カラー付/定価1,995円(税込)

A.G.という世界、
百年の物語の
モビルスーツたち



Mobile Suit Gundam SEED C.E. Mechanic& The World

グレートメカニクススペシャル
機動戦士ガンダムSEED
コスミック・イラ
メカニック&ワールド

A4判カラー付/定価2,695円(税込)

第一次連合・
プラント大戦
メカニックと
世界完全ガイド!



Mobile Suit Gundam UC Mechanic&World ep 1-3 / ep 4-6

グレートメカニクススペシャル
機動戦士ガンダムUCメカニック&ワールド
ep 1-3 / ep 4-6

A4判カラー付/定価各1,680円(税込)

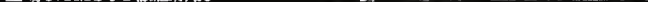
宇宙世紀の最新モード
「機動戦士ガンダムUC」を完全解説

Mobile Suit Gundam OO Mechanic

グレートメカニクススペシャル
機動戦士ガンダムOOメカニックシリーズ

A4判カラー付/定価各1,680円(税込)

「機動戦士ガンダムOO」に
登場したMSなど徹底解説



グレートメカニクス・スペシャル モビルスーツ全集



モビルスーツ全集①
RX-79
ジムBOOK
B5判カラー付
定価1,280円(税込)



モビルスーツ全集②
光戦用
モビルスーツBOOK
B5判カラー付
定価1,470円(税込)



モビルスーツ全集③
MS 08
ザクBOOK
B5判カラー付
定価1,470円(税込)



モビルスーツ全集④
MS-07・09
グラフトBOOK
B5判カラー付
定価1,470円(税込)



モビルスーツ全集⑤
RX-78 ガンダム &
V作戦BOOK
B5判カラー付
定価1,470円(税込)



モビルスーツ全集⑥
MS-14 ガルク &
ジオン戦術BOOK
B5判カラー付
定価1,470円(税込)

グレートメカニック & 関連書籍シリーズ

2013 AUTUMN GREAT MECHANICS.DX26 グレートメカニック.DX26

B5サイズ/定価980円(税込)



ガンダム ビルドファイターズ

ガンダムが読む新たな領域

- 宇宙戦艦ヤマト2199
- コードギアス 亡国のアキト
- 機動戦士ガンダムUC
- 聖星のガルガンティア
- 機河機攻隊マジスティックプリンス
- 革命機ヴァルヴレイヴ
- キャプテンハーロック
- INTERVIEWS

荒牧伸志 他



2013 SUMMER GREAT MECHANICS.DX25 グレートメカニック.DX25

B5サイズ/定価980円(税込)



機動戦士ガンダムSEED DESTINY HD REMASTER PROJECT 福田己津央監督インタビュー

- 機動戦士ガンダムUC
- 宇宙戦艦ヤマト2199
- ガールズ&パンツァー
- 機動戦士ガンダムAGE MEMORY OF EDEN
- 革命機ヴァルヴレイヴ
- 聖星のガルガンティア
- 機河機攻隊マジスティックプリンス
- INTERVIEWS

大河原邦男 磯井増敏 他

2013 SPRING GREAT MECHANICS.DX24 グレートメカニック.DX24

B5サイズ/定価980円(税込)



機動戦士ガンダムUC

ep 8「宇宙と地球と」
古橋一浩監督 & 玄馬宣彦 インタビュー

- 宇宙戦艦ヤマト2199
- コードギアス 亡国のアキト
- ガールズ&パンツァー
- 革命機ヴァルヴレイヴ
- 聖星のガルガンティア
- 機河機攻隊マジスティックプリンス
- INTERVIEWS

富野由悠季 / 大河原邦男 他

2012 WINTER GREAT MECHANICS.DX23 グレートメカニック.DX23

B5サイズ/定価980円(税込)



2大勢力特集 宇宙戦艦ヤマト2199 機動戦士ガンダムUC

- 機動戦士ガンダムAGE
- 超次元ゲイムロゼッター
- ガールズ&パンツァー
- TIGER&BUNNY
- コードギアス 亡国のアキト
- エウレカセブンAO

バックナンバーをご希望の方は、お近くの書店にご注文ください。

双葉社

〒162-8540
東京都新宿区東五軒町3-26
☎ 03-5261-4818 (営業)
<http://www.futaba-sha.co.jp/>
(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

※書店・HP以外に、電話・FAX・はがきでもご購入いただけます。
ブックサービス (営業時間: 9~18時)

- 電話 : 0120-29-9625 (携帯電話の方は 03-6739-0711)
 - FAX : 0120-29-9635
 - はがき : 〒101-8796 神田支店郵便私書箱82号 ブックサービス課
- いずれの場合も「社名(双葉社)、タイトル、購入部数、定価および住所、氏名、電話番号」をお知らせください。



編集

オフィスJB
飯田幸夫
豊村保行
宮崎左也佳

旭和則 (双葉社)

執筆

河合宏之
星★肇介
市ヶ谷ハジメ
矢吹明紀
南達健一郎
やすゆきゆたか
ニック木村

表紙イラスト

森下直親

本文イラスト

森下直親
船越裕

デジラマ

Robographer

Art Director

越田裕樹
(I'll Products)

Designer

成富英俊
園田茜
藤居雪子
岡田緑
森屋珠音
古敷谷あゆみ
大下哲郎
(I'll Products)

スーパーバイザー

山崎勇

本文写真

斉藤武司

協力

株式会社サンライズ

双葉社MOOK
グレートメカニック・スペシャル
モビルスーツ全集⑦

Z計画& アナハイム・ エレクトロニクス社製 モビルスーツ BOOK

2013年11月8日発行

編集人 二之宮隆

発行人 赤坂了生

発行所 株式会社双葉社

〒162-8540

東京都新宿区東五軒町3-28

営業 ☎03-5261-4818

編集 ☎03-5261-4869

<http://www.futabasha.co.jp/>

(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

※落丁・乱丁の場合は送料双葉社負担でお取り替えいたします。
※「製作部」までにお送りください。ただし、古書店で購入したものについてはお取り替えできません。

☎03-5261-4822 (製作部)

※本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法よでの例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に譲渡してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。
※定価はカバーに表示してあります。

©創造・サンライズ

©FUTABASHA 2013 Printed in Japan

ISBN978-4-575-46477-1 C9476

Z PLAN & ANAHEIM ELECTRONICS

**GREAT
MECHANICS**
グレートメカニクス
デザイン

双葉社MOOK



モビルスーツ
全集⑦
Z計画 &
アナハイム・
エレクトロニクス社製
モビルスーツ
BOOK

U.C.0087-0096

Z 計画 画 & アナハイム・エレクトロニクス社製モビルスーツ BOOK



クレート・メカニクス・スペシャルモビルスーツ全集⑦Z計画&アバハイム・エレクトロニクス社製モビルスーツBOOK双葉社



Z PLAN & ANAHEIM ELECTRONICS

GREAT MECHANICS
グレートメカニクス
スペシャル

双葉社MOOK



モビルスーツ
全集⑦
Z計画&
アナハイム・
エレクトロニクス社製
モビルスーツ
BOOK

U.C.0087-0093

Z 計画 画 & アナハイム・エレクトロニクス社製モビルスーツ BOOK

MSZ-006Zガンダム、MSZ-010ZZガンダム等、Z計画機と
アナハイム・エレクトロニクス社製のモビルスーツたちを徹底解説!

アナハイム・
エレクトロニクス社製MS専門書
一冊まるごと

Z計画機本

RMS-099 リック・ディアス
MSA-003 ネモ
MSN-00100 百式

MSN-001A1 デルタプラス
MSZ-006 Zガンダム
MSZ-010 ZZガンダム

RX-93 ヴガンダム
RX-0 ユニコーンガンダム
RGZ-95 リゼル etc



グレートメカニック・スペシャル

モビルスーツ全集⑦

Z計画&アナハイム・エレクトロニクス

一冊まるごと

Z計画機本

双葉社



©製造・サンライズ

定価：本体1400円＋税

雑誌6982-94

Printed in Japan ©Futabasha 2013



9784575464771



1929476014009

ISBN978-4-575-46477-1
C9476 ¥1400E